
金持ちファンタジー！

正体不明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金持ちはファンタジー！

【Nコード】

N5445F

【作者名】

正体不明

【あらすじ】

この小説は超が千個ぐらいつくお金持ちな高校生とその他愉快的な仲間たち（異世界からの来訪者や実は腹黒いメイド、萌える発明家、幼なじみのサイボーグ、罠作りの達人等々）という設定の上で繰り広げられていく話です。さてこれからどうなっていくんでしょうか？作者にも予測不可能です。《只今もう一つの小説の執筆と改訂版の作成により更新停止中です。申し訳ございません！》

プロローグ

「それ、ありきたり過ぎるんじゃないか？」

それは、俺がこいつらに対して初めて言った言葉だった。

話は数分前にさかのぼる。

それは学校帰りの出来事だった。

俺が普段と同じように一人帰っていたら、こいつらと出会ったのだ。……えっ？話が全く分からない？しかも50字ですらいってないだと、仕方がない、まともにするか。

まあとりあえず俺の自己紹介でもするか！俺の名前は田中太郎……嘘だ、今の日本にはこんな名前の人がいないだろう。まあ、もしかしたらいるかも知れないが、俺の知り合いにはいないぞ。そもそもこんな名前の主人公なんているはず……いたな、そういえば。

本当の名前は田中正造……これも嘘だ、足尾鉾山の人じゃないぞ。本当の本当の名前は織田信長だ……やはり嘘だ、ちなみに俺のご先祖様、これは本当だ、俺の本名は山上鳥本だ、やまのつせりもとトモと呼ばれることが多い、これからよろしく。作者が更新ストップしないかぎりな。

それじゃあ回想start！

俺は山上仁黒やまのつせじく高等学校からの帰り道を一人で歩いていた。

「……今日はあいつらに何をしてやるつか……」

と何気なく独り言を言っていると、

ドン！

「！」

バタツ

突然後ろから何かがぶつかってきて俺は転んだ。

すぐにふりかえってみると……それは俺と同年代ぐらいの緑色の短めの髪と瞳を持った、まるでRPGゲームの服装をした、小柄な少女だった。

「いたたたたたた…魔法王よくもやってくれたわね。もうすこしだったのに転送魔法なんて使って…」

この作者の文章力は無さすぎるな。プロローグからこれだとは先が思いやられる。

こんな転送魔法とか、魔法王とか言っている人おいて早く帰るか。これ以上奇人変人が増えたらどうなることやら。ただでさえ、常識が全くもって通じないぐらいなのに。まあ、たいして変わらないだろうけどな。そもそも俺自身非常識だし。と思ったときだった

上空から普通の高校生より身長が高めで、白いキリスト教の神父の服といえわかるだろうか？まあとりあえずそんな服を着た、青髪のイケメンが舞い降りてきた。

ストン

そして、フロアというやつの上に降りた

「魔法王、来るのが遅いわよ！で、ここはどこ？あんたが送ったんでしょ？」

「落ち着けフロア、それに僕をアダ名で呼ぶな、僕の事をアークと呼べと何十回も言ったはずだ」

「どうでもいいからとつと教えて！」

「どうでもいいからって…」

ふう、しかたがない、分かった。ここは異世界だ」

「っていきなりっ！？普通はもっとじらすところじゃないの！？まあいいけど、詳しく説明して」

「ああ、実は転送魔法を使っている途中で、何者かの手によって時空に歪みが生じてしまい、この時空に落とされてしまったんだ」

「そんなことできるのは魔王だけだから、魔王の仕業ね」

「ああ、きつとそうだろうな」

なにが起きたかすぐに想像できるな。こいつらの言っていることがすごくベタだから、たぶん今まで来たやつの中では一番ベタだ。まあ、とりあえず一つまず最初に言いたいことがある。

「それ、ありきたり過ぎるんじゃないのか？」

プロローグ（後書き）

初投稿です。問題点がありましたらぜひ注意をしてください。よろしくお願ひします。

第一話

異世界の住人A！？

「大体お前ら、とりあえず嘘つくんだったらもつとひねろ、転送魔法とか魔王とかどっかで見たことあるケータイ小説かあ？てかこれは携帯小説なんだけどな。まあ早く家に帰れ」

俺はまあ信じていない訳ではないが、というかすごく信じているのだが、あまりにもベタなんでこう言う。

「あんたいつからそこにいたのよ。それに嘘とはなによ、嘘とは、もしかしたら魔王の存在どころか魔法すら知らないの？ありえないでしょ。そっちが嘘ついてるんじゃないの？」

「コラッ！初対面の人だぞっ、それに魔法の存在を知らない世界かもしれないだろ、すぐに謝れ」

「え〜だつてこんな異世界の住人Aにわざわざ謝ることないじゃん、私たちの世界ではすべての生物には魔力が存在することが証明されているはずだけど？こいつわざと魔法を知らないふうになっている可能性が高いわよ？もしかしたら魔王の手下？そうするとこんな普通すぎる顔も説明がつくし。」

ピキッ！

異世界の住人A？ 普通すぎる顔？ 俺はこの小説の主人公だぞ。しかも、俺の言った事無視されてるし。こいつどうしてくれようか？

「いい加減にしろっ！失礼すぎるぞっ！」

「本当に魔王の手下だったらどうしてくれるのよっ！この頑固法王！」

「頑固法王？ふざけるなっ！僕はもっと人に対する礼儀を大切にしろと言っているんだ！」

「あの〜ちょっとすいませんが

「うるさいっ！異世界の住人A！だいたいあんたは正直すぎるのよっ！この頑固王！」

せつかく俺が平和的に解決しようと思ったのに……
たった今、俺の怒りメーターが100%になりました。

「ってか早くこいつを捕らえて、どうしてこの世界に送ったのか聞
くわよ頑固王！それじゃあ行けー！」

「だから僕の名前はアークだ！てか切り替え早！その前に人の話を
聞け！」

「ほう、俺を捕らえようとしているのか……死ねっ！よくも主人公
の俺を異世界の住人Aとか言ってくれたなっ！」

「えっ！？この殺気はレベルA以上よ！」

「フッフフフッフッフ黼髯フッフッフ傳フッフッフ馥諷！」

「後半かなり難しい漢字になっているんだ……け……ど……バタッ
！」

「なっ！フロアが触れられもせずに倒れただと！どうしたんだ。」

「簡単だ、ちょっとした殺気をぶつけてやったただけだ、安心しろ、
気絶しただけだ。ところでお前らどこからきたんだ？」

ちよつと説明しておく、俺の殺気は人とは違うみたいで質が高いみたいだから、人を気絶させる事ができる。そもそも殺気とは一般人にも放つことが可能だが、ごく僅かの力だけしか放てない。放ち方を知らないからだ。俺は、とあることで殺気の扱い方を完全に理解している。

殺気は基本、強さに比例して放てる大きさの最大量が決まるが、質は高くない。殺気の質とは生まれつき決まっっていて、物質で考えると密度のようなものだ。

殺気の力は大きさ×質で決まる。

まあ、殺気の説明はこんなところか。ちよつとのつもりが長くなってしまったな。

「じつ実は僕たちはあなたたちからみたら異世界からきたんです！
信じてください！あとその殺気をこちらに向けるのだけは止めてください！」

ほう、俺の殺気をくらっついても気絶しないとは。なるほど、これは本当に異世界から来たな、まず少なくとも一般人ではないな。
それにしても、こいつも丁寧語か。俺の殺気を感じたやつのかいはいはそうだったな

「ふーん、お前らは異世界からきたのか……ってそんな話信じられないはずがないだろ！証拠があればすぐに納得してやるがな」

でもまあ、こう言って相手の反応を伺う。

「こ、これは魔力をためることができると言える特殊な水晶です。あなたの世界に魔法がないんだっいたらこの物質はこの世界にはないはずですよ。調べてみてください」

証拠が出てきた。よし、簡単に調べるだけでいいだろう。

「わかった。とりあえず立ち話も何だから家に来い、その馬鹿女も連れてこい話はそこでだ。早くこないとお前の存在を経済的に抹消するぞ」

「いや、ちょっと待て！怖いな！」

「早く来い」

「ってもう進んでいる！？しかも足は普通に早っ！？ちょっとぐらいい待ってくれ！」

その後、魔法王は結構早く追い付いたが、

「ちょっと待て！僕の名前はア」

「五月蠅い」

【…殴られてしまいました。そして、当たりどころが悪かったのか、死んでしまいましたとさ。

終わり】

「まだプロローグと第一話だけで終わらすな作者！」

【さすがに嘘です】

第一話

異世界の住人A！？（後書き）

やっと投稿完了しました。

フロア「私たちのフルネームがまだでてきてないんだけど」
鳥本「それにまだ短いだろうか！」

すみません殺意を向けなくて……バタツ！

作者気絶のため後書きを終了します。

第二話

状況説明は後回し！？（前書き）

前回までが短かすぎると思っていましたので前回までよりはながい
です。

第二話 状況説明は後回し!?

（fromフロア）

バサツ!

「あれっ?」

私は起き上がった。どうやらソファアの上で寝ていたみたい。ところで。

「ここはどこ?あの異世界の住人A兼魔王の手下を捕らえようとしたところまでは覚えているんだけど」

「おう!やっと起きたか、まあすぐに二度と起きれなくなるんだけどな」

「すみませんでした!」

あれ?何でだろうか瞬間的に反応してしまった。まあいいとして状況は異世界の住人A……もう面倒くさいのでこれからは住人Aとしよう。

「なるほど、永遠に寝ていたいと考えていたのか、その願い叶えてあげよう」

「トリモトさん、考えていることぐらい自由にしてほしいな」

「…チツ」

「今チツて聞こえたのは……気のせいですよね！」

あゝ危なかった、あと少しで本当に永遠の眠りにつくところだった、だってすごい殺意を感じたんだもん。

「それじゃあ、まずはお前らのことだ」

「結局、私の状況説明無視ですか？」

「Oh, yes, of course」

「なぜに英語！？それに当然って酷くない？読者にも迷惑だし」

「どうせ会話だけなんだし後回しだタイトルの通りな」

「後回しってそんなタイトルでいいの？」

「Eゝんだヨ！作者のやることだしな」

「なにそれ！？」

「なんかフロアがツッコミキャラ化していくな」

「そんなこと言ってないで、ツッコミ役代わって！頑固王」

「だから僕の名前はアークだ！」

「あの〜」

「どうでもいいから」

「どうでもよくない！このままじゃ僕の名前が読者のみなさんに魔法王や頑固王で定着してしまうだろ。それに魔法王って語呂が悪いし、字画数的に運気が上がりにくいんだよ！」

「よしっ！お前アークというアダ名をすてろ！」

「二人とも酷くないか？（T|T）」

「アーク、お前はこの三人の中では一番立場が下のキャラだが、かなりマシなほうだからな。これから出てくるあいつに比べたらな」

「あんた誰っ？」

「俺は何というかな……この世界だ。それじゃ！」

「訳分らないし、しかも消えた！？消えちゃったわよあの人」

「まあ、あいつはなあ、訳分かんないやつだ正体いえばいいのに……ああ、なるほどな。あいつの名前か。お前らも知っているやつだ。読者にはもう分かった人もいると思うが、後書きで正体を教えたいやる」

「ちよっつ〜」

「ところで話が全く進んでいないんだけど」

「確かに」

「とりあえずお前らのこと説明してもらおうぞ」

「お前が寝ている間にアークに説明&証拠提示してもらって、お前らが異世界から来たということは納得したし、お前らの名前も聞いたがまだ聞いていないこともたくさんあるからな、まずお前が起きあがったときに俺のことを異世界の住人A兼魔王の手下と呼んだ事についてだ」

「一言で色々まとめたわね」

「作者の文章力のせいだな。さてとつとと質問に答える。カツ井もあるぞ」

「なんで本当にカツ井があるんですか!？」

「E〜んだヨ!」

「それさつきも使いました」

「E〜んだヨ!」

「キリが無いですよ」

「E〜んだヨ!……ちなみにこれはとある知人に教えてもらったネタだ」

「さてそろそろ答える」

「仕方ないでしょ、私はあんたの名前を知らないんだから」

「自己紹介しただろ、前話との間にな」

「分かるはずないでしょうが！それに私は気絶していたし」

「……起きてただろ、そうだろ？読者」

キッ

「ねえ、今あんた読者を殺意で脅したんじゃない」

「気にするな」

「はい！」

ついあまりの殺気のために反射的に言ってしまう

「聞いてくださ」

「それじゃ自己紹介してよ」

「ああ、わかった、俺の名前は山上 鳥本だ」

「ヤマノウエ・トリモト？変な名前」

「……俺にとってはお前の方が変な名前なんだよ。まあ日本人限定の感覚だがな」

「まあまあ、二人とも落ち着いてく。それに異世界なんだから仕方

がない」

「仕方がないわね。次に私たちの名前を紹介するわね。まず私がフロア・ムーンよ。でこいつが魔法王、アダ名はアークよ」

「だからアークは本名だ！」

「五月蠅い！お前が気絶している間に自己紹介終わっているんだぞ！」

「ひどっ！というか読者に私たちのフルネームが分からないまま進むところだったじゃない」

「気付いてください」

「それだったら僕も本名はアーク・サラブだ」

「まあお前の名前は置いて」

「ひどっ！」

「そろそろ本題に入るぞ」

「あ、ああそうしよう」

「まずはお前が起きたときに俺を異世界の住人A兼魔王の手下と呼んだ事についてだ」

「トモさん、無限ループになります」

「すまない、本題はお前が起きたときに俺を異世界の住人A兼魔王の手下と呼んだ事についてだ」

「意地でも無限ループにしたいんですか？」

「そんなことはない」

「だったらどうして続けるの！？それにしてもさっきから背後ですごく黒い、いや暗いオーラが出ているんだけど。」

「……………」

「あなたは誰ですか？」

「やっと気付いてくれました」

ドアの向こうに立っていたのは、何やら白いヒラヒラが多々あるロングスカートの服を着て、さらに力チューシャ？らしきものはめている女の人

それにしてもそりゃあまあ、あんなにドアの前で暗いオーラだして体育座りしていたら気付くでしょ。

あ、というかやっと状況説明ができる！

今、私たちは部屋の真ん中にあるテーブルを囲んでいます。

今は何事もなかったかのようにでしたが、さっきはなぜか魔法王がポコポコでした。

この部屋の大きさは普通の応接室よりちょっと大きいぐらいで、私はさっきまで寝ていたソファーに座っていて、魔法王とトリモトは向かい側にある椅子に座っている。ドアは私の後ろにあるわよ

「すみません、僕は途中であなたに気付いたのですが、隣でトモさんが僕にしか気付かないぐらいの殺気を放っていましたので気付いてない振りをしてました」

どうして説明口調なのよ!? 魔法王

「どうしてあんたが殺気を放っていたのよ?」

「面白かったからな」

「……可哀想だと思わないの?」

「もしも思わないと言ったらどうするつもりだ?」

「……で、あなたの名前は?」

とりあえずトリモトの発言をスルーして、

「私の名前は」

「次回で分かるぞ」

トリモトが言葉を被せる…酷くない?

「…くす」

「泣かないでください…」

第二話

状況説明は後回し！？（後書き）

あの謎の人物は作者でしたー！俺の名前は正体不明だから、正体を明かさないと不明のままにしておきました。

鳥本「うるさい！読者は気付いていたんだよ！それにまだ短いだろうが作者？」

ま、誠にすいませんでした！

第三話

お決まり設定！？（前書き）

更新遅くなりました。すみません。あと評価感想をください、お願いします。

第三話 お決まり設定!?

↳ from アーク

「私は山上家のメイド長の四葉緑よつばみどりです！
ふう、やっと言えました」

「メイド？何それ、人の魂を冥土まで送り届ける人？」

「基本的なネタですね」

「「？」」

「ああ、お前らは知らないよな。で、どんな用だ、緑」

「あつすみません、鳥本様、お食事の用意ができました」

「何で様づけなのよ？」

「メイドですから」

「だからメイドって何よ？私らは知らないんだけど」

「ようするにお手伝いさんだ」

「なるほど」

(何でこいつらはメイドのことをお手伝いさんと説明すれば分かる

んだ？)

「変なお客様ですね、鳥本様」

「異世界どうしなので仕方がないと思いますが」

「異世界？」

「いや、何でもない」

怖いんだが、殺気を飛ばしてこないでくれ。フロアも気付いたのか、小さくなっている。

「まあ食事ができたことだし、食いに行くか。……お前らは帰らなくていいのか？」

「えっ、ああそういえば私、気付いたらここにいたんだっけ」

「緑、ちよつと部屋から出てる」

「かしこまりました。鳥本様」

バタッ！

ミドリさんは部屋から出てった。どうしたんだらうか？

「さて、お前ら、いきなりだが帰れ」

「本当にいきなりだな！」

「魔法とかの説明はいいの？」

「いい、どうせ後でから聞くからな」

「どうやって私たちの世界に帰った後に聞けるのよ？」

「気にするな、アークお前が転送してきたんだよな、だったらとつとと帰れ！」

「……仕方ありませんね」

時空間移動魔法を使う。……あれっ？

「大変だ！時空間移動魔法が使えない！」

「やっぱりな」

「何ですって！あんたから魔法をとつたら何が残るのよ！」

「僕の存在理由は魔法をうまく使えるということだけなのか……(T
OT)」

「というかトリモトさん、何がやっぱりなんですか？」

「そりゃあお前らが帰れないという事だ」

「「え？」」

「普通はこうゆうのって帰れないフラグが立つものだろ？常識だ」

いぞ」

「え？」

「時空に歪みを起こして僕らをこの世界に入れたのは、他でもない魔王だぞ」

「あ！」

「それだったら、魔王は僕らを落とす場所から手下に監視させれば簡単に現在地が分かる訳だ」

「なるほどな。それにしても、ついに異世界からの来訪者まででてきたか。このペースでいくと近々そのあたりのやつが来るだろうと思っていたが本当に現れるとはな」

「それってどうゆう事？」

「いやなんでもない。そうだな、緑、捕まえてあるあいつを連れてこい」

「あいつって誰ですか？」

「侵入者だ、侵入者！」

「はい、わかりました」

ミドリさんがあわただしくでて行った。

それにしても侵入者って誰？魔王の手下といっても僕らを見張るん

だったら、低くてもレベルBはないとおかしい。でもレベルBともなるとメスカーナ騎士団でもかなわないぐらいだ、よって捕らえることなんて不可能。きつと違うだろう。

「連れて来ました」

「ハナセ！ハナセ！」

ミドリさんがすぐにだれかを縄で縛って連れてきた。

この、片言なのに姿形は全くの一般人のモンスターはたしか

「お前はゼリートスか」

懐かしいな、最近見なくなったから。最初のころはうじゃうじゃいたなあ。

「ゼリートス？何だそりゃ？」

「ランクEゼリー系最弱モンスター、ゼリー系は人間と区別がつかない外見を持つが、このモンスターは知能が低く片言の言葉しか話せない」

「お前らの世界にはモンスターもいるってわ」

「ハナセ！ハナセ！」

「うるさい！」

ポカッ！

「黙っていて欲しいですね」

あ、今殴ったのはミドリさんか。

「ここでまたお決まり設定が作動して魔王がお前らを連れて来た理由がわかると思ったがな、今のやつじゃ話にならんからな、それに作者もそれほど馬鹿じゃなかったらしい」

「それではそろそろ食事に行ってくれなければ困りますので」

「ああそうだな、それじゃあ行くか。食事中に色々と聞こうか。お前らも俺についてこいよ。迷子になって、のたれ死んでもしらないからな」

「「？」」

その言葉の意味はこのあとすぐに分かることになる。

「ってシリアスみたいな言い回しだな」

「鳥本様、早く行きますよ」

第三話

お決まり設定！？（後書き）

どうも正体不明です。「遅いわよ！」

「それに文章も下手だしな。それが理由で評価感想が来ないんだ。」
相変わらずすいません。さてこれからも金持ちはファンタジーをよろしく願います。

第四話 説明づくし(前書き)

更新遅れてすいません。

その代わりとっては難ですが今回の話は長いです。

第四話 説明づくし

～ from フロア～

さて、私達は部屋から出ました。すると、

「ながーーーーーい！何こーーーーー！」

えっと、なんというか廊下がすごく広い、長い、読者が想像出来ないぐらいに、見たことないけどたぶん魔王の城の廊下がおもちゃに見えるほど長い

「お前ら、うるさいぞ」

「また、異世界にワープしたんじゃないの？アーク」

「おお、やっと名前で言ってくれた」

「たまには、アダ名で呼んで見たかったからね」

「アークはアダ名ではない本名だ」

「今日は4月1日ではないぞ」

「ひゅ……」

魔法王がすごい勢いで落ち込んでいるけど気にしない

「とうかなんで廊下だけこんなに広いのよ？」

「廊下だけ？」

「そう、さっきの部屋は普通だったじゃない」

「ああ、あの部屋は第352142番目の応接室だったからな」

「えっ？それって、応接室が350000個以上あるってこと？嘘でしょ？」

「正確に言いますと、応接室の数は1000000です」

「……そりゃありえないでしょおお！どうしてそんなに応接室があるのよ？どうしてこんなに廊下が広いの？どうして居候がたくさんいるの？合計部屋数はどのくらいあるの？どうして私のバストは小さいの？どうして地球は丸いの？どうして……」

「落ち着いてください。お客様」

「それ全部作者のせいだぞ」

「仕方がないですね、ワープシステムを起動させます」

おっと、ここからは俺視点だ。さて、ワープシステム起動。あっ、ちなみにワープシステムとは、とてつもなく広い俺の家の中を一瞬で移動するために開発されたマシンだ。えっ？俺って何者だつて？まあ、タイトルで気付いていると思うが気にするな、後でから説明してやる。それじゃあディナールームへゴー！
ピュッ

「あれ？ここは何処だ？」

「ここはディナールーム（またの名前を食堂）だ」

「何か瞬間的に移動した気がしたけど。って何この料理はとてつもなくすごいんだけど。今更な感じがするけどあんたの家すごい金持ちよね？異世界だからこんなずば抜けた金持ちがいても仕方がないよね？魔法王」

「僕に話を振らないでください。それにしても、僕ら以外に人気がないですね」

「やっぱり遅すぎたか。今の時間は……9時だ」

「それにしてもどうしてこんなに料理が余っているんですか？」

「ああ、ついさっき用意させた。それよりも、お前らの世界の話を知ろうか。まず……魔法からだ」

「魔法……どうやって話そうか？私達にとっては蛇口をひねれば水が出るぐらい当たり前の事だしね」

「僕が話しましょう」

魔法か、もしかしたら全ての生物に宿っている、魔力を放出して、とかだったりするのか？いや、作者もそれほどありきたりなことするほど馬鹿じゃないか

「魔法とはですね、全生物に宿っている魔力というものを使うこと
によって発現することが出来ます」

あ、俺が考えたこととほとんど同じだ。それじゃあ次は魔力は修行
しだいでいくらでも強くなるあたりかあ？

「魔力は修行しだいでいくらでも強くなります。魔力が強ければ強
いほど高等な呪文ができるし、オリジナル魔法も使えます」

また当たった。もしかしたらエスパーの才能があるのかもしれない
な……よく考えてみたらこいつらの世界がベタなせいか。じゃあ次
は『魔力が強ければ強いほど一度に魔法が使える数が増える』だろ
う。魔力がいくら強くても、魔法を使える実質的な数は変わりません。
魔法は使うことに基本的にはエネルギーを使います。そのエネルギ
ーとは何でも構いませんが、使うエネルギーがある一定の物に限ら
れている魔法もあります。高等な魔法になるほど多いようです。ち
なみに使うエネルギー量も高等な魔法になるほど多くなることがほ
とんどです」

「パクパクモグモグパクパク」

あれっ？予想が外れたな。こいつらの世界の魔法は『エネルギー変
換式』か。

…ってか、さっきからフロアが高速いや、光速の速さでパフェばか
り食ってる。もう、千個目だ、こんな短い間によくそんなに食べるな

「次に魔王の事です。簡単にいえば魔王は人間を滅ぼそうとしてい
ます」

ヒュッ……

あまりにも典型的な魔王だな。それにフロア、すごいな！たべるのが速過ぎて、音すら聞こえない

「魔王は何やら『人間は世界の自然法則から外れたもの、よって我は人間を滅ぼし、世界の自然法則をもとに戻すだけだ、神の名のもとに。』と言い、最強の魔力と無限のエネルギーとどこからか呼び出されるモンスター軍を使って人類を滅ぼそうとしています」

神の名つて、魔王が神とかいっていいのか？せめて、魔神にしろよ、それにけっこうご立派な考えをもっているな。俺には関係ないが……いや、関係ないこともないな

ぐらぐらゆらゆら

ん？何だこの音は……フロアが食べると同時に積み上げていたパフエタワーが今にも崩れようとしている。でも微妙なバランスで立っているから、たぶん大丈夫だろう（確証はない。ただの推測）

「しかも、魔王の城は誰も知らない場所にあるみたいで、その場所を世界で唯一見つけられると占われたのが、この『勇者』フロアなのです。」

なるほどなるほど。占いかあ、どっかで聞いたような聞いてないような話だな。でもアーク、気付かなくていいのか？今にもパフエタワーがそちらに崩れようとしているんだが

「しかし、世界中を探してみても場所が分からなかったので、フロ

アがイライラして、僕に特訓という名目で八つ当たりしようとしたので、とっさに転送魔法を使ってしまったら、この世界にきたのです」

何だそりゃ

「ばらさないで！魔法王！」

「僕の名前はアークだ、決して魔法王などではないっ！」

「今言うべきことは、それじゃないと思うぞ」

「いや、今言うべきことはこの事なんです！」

「もうアークと呼んでもらうのは諦めたらどうだ。そもそもどうして魔法王と呼ばれるのを嫌っているんだ？」

「それは、字画数的に運気が魔法王よりアークのほうが上がりやすいからです。」

「え……何じゃそりゃ。そもそも本名自体は変わらないから運気は変わらないんじゃないのか？」

「何じゃそりゃとはどうゆうことだ?! 運気は僕が命よりも大事にしているものだ!」

「黙れ! とつと話を再開しろ!」

「はい!」

ふう、なんかあった。まさかこれほど狂信的とは思ひもしなかった。それにしても人間っていろいろいるな。

「次はモンスターの事でも話しましょうか。モンスターとはどこからともなく」そこらへんのことはいいから、さっきのゼリートスのときに言ったランクとかのことも聞こうか」

「分かりました。ランクとはそのまんまの意味です。モンスターの強さをはかるために設定されランクE〜SSSランクまであります。さっきのゼリートスはランクEで最弱モンスターですので気にしなませんでした。あとモンスターにも魔法が使えます。またそれ以外の生まれつきの能力も持っています。まあモンスターは多種多様なので説明しきれないのでこちら辺にしときましょう」

「わかった。それ以外のことは追々聞こうか」

このままじゃずっと話が続きしな。ん、パフェタワーがさらに高くなってないか？もう天井の近くまで上がっているぞ。おっとフロアが今、ギャラクシー・パフェ、簡単に言うと巨大パフェを食おうとしている。よくそんなに食えるなあ。まるで魔王と勇者が自分たちよりも強いラーメン好きな青年に振り回されるお話の主人公がラーメンを食べているときのようだ

「それじゃあ、次はそちらのばんですよ」

「ああ、ようするに俺は超金持ちだ、俺の親が金持ちなんじゃなくて、俺が金持ちなんだ。実は俺が高校生になったときに、親がくれたんだ。

『おい、トモ。俺たち宇宙旅行&世界旅行に行くから、山上財閥をやる』というふうにな」

「……………」

「んっ？どうした」

「……………どうしたじゃないだろ！ツッコミどころが多すぎるんだ！まずどうして何を聞かかったんだ！？次に高校生って何？財閥って何？次になんだ？あの親はあっさりし過ぎだろ！」

「まあまあ高校生と財閥についてはすぐに教えてやる。まず高校生というのは（中略）何？お前らの世界には学校自体ないのか、学校とは（中略）やっとわかってくれたか。次に高校のことなんだが（中略）えっ？説明長い？お前らのためだろうが（中略）次に財閥のことだが（中略）進もうぜ！ドラゴンボー（中略）パクパクパクパクパクパク！」

「フロア！お前食べてばかりで話を聞いていたのか？始めからやりなおすぞ（中略）高校というのはな（中略）お前、さっきの話まったく聞いていないだろ（めんどくさいので残り全略）」

「作者、それはやってはいけないだろ」

チツ！まあ仕方がない中略）魔王降臨！しかしトモは無視したので帰っていった（中略）これが財閥だ。頭にたたき込んでる！」

「ねえ、途中全然関係ないのが混ざっていたんだけど」

「しかも、魔王降臨してしまいましたよ」

「ああ、あれは別世界の魔王だから気にするな」

「魔王のくせに無視されたという理由だけで帰っていくって一体…
…本当に魔王？」

「それにあの魔王は作者がとつさに思い付いたあまりにも無理がある一発ネタだから気にするな、さらに別世界には自分よりも強いライメン好きな青年に振り回されている魔王だっているし、ストレスで今にもハゲになりそうで育毛剤を送られる魔王だっているんだぞ」

「……ところで、あなたの親はどこまで行ってるの？」

話を変えたな

「さあ？消息不明だ、でもどっかで生きてるんじゃないか？」

「消息不明って、心配じゃないの？」

「ああ！」

「うわ、ずいぶんあっさりと言っちゃった」

「だって、その気になれば、財力を使っていつでも探せるしな。最終的には作者特権を使って呼び出すこともできる。それに…いや、何でもない」

「？」

「作者じゃないのに作者特権が使えるの？」

「ん、使えないが作者を買収すればいい話だろ。」

(作者買収って一体どれだけ財力があるんだろ？てか不可能なんじゃない？)

「ああそういえば、まだお前らの言おうとしたことがどうしてわかったのかというと、俺は読心術が使えるからだ」

「たしかに、前にも私の思ったことを読み取っていたわね。ん、じゃあ、あの瞬間移動装置って何？」

「あれは、山上財閥の科学力をフルに使って完成させたそのまんまの意味の瞬間的に移動するものだ、ちなみに1日に6回しか使えないから、急いでいるとき以外使わないようにしている」

「すごっ！！私たちの世界でも科学は存在するけど、まさか科学技術で瞬間移動ができるなんて予想もしていなかったわ」

「そんなに驚くことないんじゃないか？アークも時空間転送魔法が使えるだろ？」

「実は私たちの世界でも時空間転送魔法が使えるのは魔法王と魔王だけよ」

「ふーん、そうか、……ちょっと待てよ、じゃあさっきのゼリートスはどうしてこの世界にこれたんだ？」

「それは魔王によってこの世界に送られてきたみたい、魔王は理由は知らないけど部下とその手下を異世界に送るなんてよくある話だから。あ、ちなみに魔王の部下は人間が多いから魔法を使っていないうちだったらすぐに倒せるし、その手下も1000匹位だしランク

B以上はないから、すぐに滅ぼせるし大丈夫。」

「待てよ、あれが1000匹かぁ。それを滅ぼせるってお前ら、意外と強いだろ」

「ううん、私が強い訳じゃないのよ、私はただ単に占いで選ばれた勇者で、戦闘能力は私たちの世界では一般人並、闘いはもっぱら魔法王まかせ」

「ふーん、時空間転送魔法を使えることにしても、俺はまだ魔法王について何も聞いてないんだが」

「魔法王は出身地も魔法王という名前の理由もわからないけど……
って魔法王も会話に参加してよ」

俺とフロアが振り向いたら

「スースー」

「「って寝てるー!?!」」

寝ているアークがいた。って本当にいきなりだな

第四話

説明づくし（後書き）

「どうしてこんなに更新遅れたのよ作者？」
実はテスト期間真っただ中でした。すいません！

第五話

実は腹黒？（前書き）

感想を下さい。お願いします。

第五話 実は腹黒？

（fromフロア）

「「って寝てるー！？」「」

何と机に突っ伏してねていた。そういえばさつきから何も喋っていなかったんだけどまさか寝ていたとは。

「ほんのちよつとの間でよくこんなに熟睡できたな。それにしても、急だな」

たしかに、でも魔法王はこんなところで寝たりはしないし……ああ！

「今日は新月の日？」

「ああ、そうだ」

「やっぱり、魔法王は新月の日の夜10時になると、急に何の前ぶれもなく、寝たり、回ったり、浮かんだり、踊ったり、殴ったり、泣いたり、酔ったり、死んだり、生きかえったり、狂ったり、3と言うときだけ馬鹿になったり、性格が悪くなったり、……（略）するのよ」

「ふーん、そうか。面白いやつだな」

「……え？突っ込まないの？寝たりする以外は嘘なんだけど」

「わかりました。……なんでやねん！」

「あ、いたんだ。ミドリ。」

「今頃いたと気付かれるなんて、……そうですね。私はこの部屋に来ていたという描写もされてなかったし、前は本当に最初にか喋っていなかったし、もう死ねってという感じですよ。私というキャラは」

「暗い、暗い、暗い、暗い、
海の底よりも」

「腹黒い人の心の中よりも、闇呪術よりも、暗黒世界よりも、宇宙の闇よりもブラックホールより暗黒魔界よりも暗い。」

「まるで、吸い込まれそうなくらい暗いんだけど。ん？なんか本当に吸い込まれそうな感じが……気のせい！気のせい！今日はいい天気！よし、大丈夫、大丈夫。」

「それよりもどうしてアークはお前と一緒に旅していたんだ？」

「それは……気付いたらいたのよ」

「へっ？」

「だから、気付いたらいたのよ」

「……それって会ったときのことを知らないってことか？」

「そのとうり」

「忘れたんじゃないのか？」

「ううん、私記憶力は良い方だから」

「いや、忘れた！」

「違う」

「忘れた」

「違う」

「忘れた」

「違う」

「絶対忘れた忘れた忘れた忘れた忘れた忘れた忘れた忘れた
！」

「多すぎっ！！」

「謎だな、こいつは、それに時空間転送魔法を魔王以外で使える唯一の人物でしかかなり強いんだろ？じゃあ、どうしてこいつはこんなに立場が弱いんだ？」

スルーされてしまった。ちょっと悲しい。

「魔法王は敵と戦うとき以外は暴力はしないの。それに口が弱いから」

「なるほど、じゃあ一連の事は今、こいつから聞き出そうか。おいっ！アーク！」

魔法王は起きない。そりゃそうよ、新月の日に魔法王が急に寝た場合、声をかけたり、揺すったりでは起きないし、もし起こしたら恐ろしいことになるから。

「おい、緑」

「なんでしょうか？鳥本様」

「復活するの、早っ！」

「こいつ殴れ」

「はい！わかりました」

「なぐるの！？」

いきなり！？そりゃないでしょ。私の感が危険信号を告げているんだけど。

「ああ、だつてこいつ起きないじゃん」

「とりゃー！」

もう殴ってる！？しかも声の高さと掛け声がすごいアンバランス！つて、すごい勢いでボコボコにされていく、手加減なしで、やばい！魔法王が起きる前に全力で逃げないと！

「……」

「キ……………」

もう魔法王が怒った顔で起きてきた。やばい！暴走モードだ。

「起きたな。でもどこの言語だ？」

「そんなことはいいから！逃げて！」

「（略）……………」

「作者、あからさまな手抜きするな！」

遠いところまで逃げないと……！トリモトはあんな殺気を放てるくらいだからきつとかなり強いだろうし、主人公だから絶対死なないはずだから（確信は全くない）ほっとこ。私は

「脱出！」

廊下へ脱出します。

「逃げるな、緑、捕まえろ」

「はい。鳥本様」

ミドリが先回りして、私は捕まえられました（泣）

「逃げるな。あいつが変な言語を言いだしたから、それを説明しろ」

「その前に逃げないと……」

「だから、どうして」

「『ウインド・ボーム』!」

「後ろ後ろ!」

「ん?後ろがどう

ズドン!」

「キヤアアアアアア!」

「ギヤ!.....!」

ズドン!」

「何あんたの叫び声!?」『が多すぎよ!痛っ!」

「すごいな、お前のツッコミ!普通は順序が逆だぞ。P S ・アークはどうして謎の言葉を言いながら攻撃してきたんだ?」

「P S ・って口でいうな!まあいいとして、魔法王が攻撃してきた理由は魔法王を起こしたからよ。魔法王は新月の日急に寝たところを起こされたりプリンを食べたり、あとイライラが一定以上たまるとああゆうふうには暴走モードになってしまうのよ。ちなみに魔法王はイライラが貯まるとになるからそれで判断できる。ああなる理由は不明」

「理由は不明か、戻す方法は？」

プリンには突っ込まないんだ。

「戻す方法は気絶させるか、日が変わるまで待つか、ヨーグルトを食べさせるかの三通りよ」

「なるほど、……って何でヨーグルト!？」

「どうしてプリンにはツッコまずにヨーグルトにはツッコむの!？」

「そつえばアークはどこだ。……あつ」

話を無理やり変えたわね。って

「何?……あつ」

私たちが魔法王のいたところを見ると。

……下敷きになっていた。パフェタワーの下敷きになっていた。片手だけ出していた。崩壊していた。……落ち着け!私!簡潔に言っと私が前回作ったパフェを食べたあと、……パフェタワーとよぼう。そのパフェタワーが崩れて、魔法王が片手だけ出して下敷きになっていたのよ。

さっきの『ウインド・ボーム』という魔法はようするに風の爆弾。爆発系魔法の中では最速の部類に入る、威力自体は低いけど、爆発と同時に猛烈な風を巻き起こす。ちなみにオリジナル魔法ではない。きつとその猛烈な風でパフェタワーが倒れたんだと思う。それにしても

「生きてる?」

「死んでも、山上財閥の科学力で蘇生させるから大丈夫だ」

「山上財閥の科学力つて一体どんだけすごいのよ!？」

「蘇生装置というものがあってな、その中に一時間ほど入れたらあらふしぎ、見事生きかえるんだ。死後硬直が始まったあとや原型が残っていない場合はさすがに無理だぞ。しかしこの機械がまた複雑で、とある人物が考えてから完成まで1000年かかったらしい」

「……すい」

「どづいう意味でだ」

「そりやまあいろいろな意味で」

「分かった。てか、早くアークを連れて行」
#:(
#:

えっ!?!もしかしたら。

「いつ生きてるうううう!?!」

「もしかしたらアークに死んで欲しかったか?それにしても気絶すらしてないな。仕方がない……!」

トリモトは魔法王に気絶しそつなぐらいの殺気を放ったが

「『……………!』」

「あれっ?」

しかし、効果なし

「『トルネード・ミニ』!」

魔法王から小さな竜巻が発射される。(まさしく技名どりの技

……………つてそのまんま過ぎっ!)

トリモトが竜巻に巻き込まれた。

「飛ばされてるな」

「よくその状況で現在進行形で他人事のように飛ばされてるときに
言えるわね!」

私は柱の影に隠れてやり過ごしていると、次第に竜巻が収まってい
く。トリモトが地面に叩きつけられた。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオカアアアアアアアアアアアアア
ア!……………!……………!……………!……………!……………!

「さて、逃げるぞ」

「……………」

つ、ツツコミ所が多すぎて何から言えばいいか分かんない。

「おーい」

「……何あの効果音！めったにないポリュームだし。『！』が相変わらず多すぎよ！しかも何事もなかったように次のセリフ言っているし、しかも、いきなり逃げるの！？」

「まあ、コメディーなんだから気にするな。それに俺は一般人なんだからな」

「コメディーだからって理由になるの！？それに一般人ってどうゆう事？」

「あ、しまった」

「鳥本様は実は殺気と山上財閥の力を除けば強さは一般人Aとおなじくらいですから。でも、たいていの人は殺気で鳥本様が強いと勘違いします。それは鳥本様はハツタリが上手ですから騙されるのです。心理戦が得意という実に主人公らしくない能力ですね。」

「言つな！緑！」

「今までどこにいたの？」

「柱の影に隠れていました。」

「緑、今から言うておく。決して俺の不利に」

「『クロス・カトル』！」

その時、魔法王の方からX形の真空波が放たれてトリモトに当たって吹き飛ばされていった。

「やった」

……今回はミドリの本性が垣間見えたような気がする。

「『ウォータムル・ダブル』」

魔法王の両手から二つの猛烈な強さの水流が放たれた。狙いは

「私だけ!？」

ボンバー!!!!!!

「なにその効果音!?!どうやったたらそんな音がでるの?それ以前に効果音じゃないキヤアアアアアアアア!!!!!!」

こうして私たちは逃げずに日が変わるまでずっと攻撃されつづけた。ちなみにミドリは今日最後の六回目の瞬間移動で逃げたのが見えてその後、すぐに私は気絶した。

第五話

実は腹黒？（後書き）

「どうして他の人があれだけの騒ぎなのに全く来ないの？」

「ああ、日常茶飯事だからな。」

「？」

「さて、そんなことは置いといて更新遅いんだよ作者。」
「すいませんでした。」

読者の皆様真にすいませんでした。

第六話 鳥本の朝（前書き）

更新遅れてごめんなさい！！
本編大修正していました。

第六話 鳥本の朝

（fromトリモト）

鳥本だ。今俺は俺の部屋で起きたばかりだ。昨日アークは暴れまくった後、12時になったとたん死んだように眠った。

フロアはアークの攻撃で気絶した。

俺はメイドに命じて二人を俺の部屋の近くの部屋に寝かしといた。

今は朝3時、そろそろ仕事に行く時間だ。

俺は部屋から出て、大社長室へ向かう。

30分後

大社長室についた。ちなみに重要な部屋は俺の部屋の近くに集まっているから30分で着くことができた。

その部屋には誰もいない。机の上には大量の書類が置いてある。俺の仕事はこれを読むだけ。山上財閥は俺がいなくても大丈夫なようになっている。でもまあ、大事には俺が判断するんだけどな。

3時間後

やっと読み終わった。これから部屋に戻る。

今、俺の部屋の前にいる。さて、今日はどんなのが待っているか。俺は一步目を出す。

ダァン！

前にあった床がなくなった。落とし穴だ。

今回はドアの真下まできっちりとなっていやがるな。

俺は後ろに下がる

シュルン！

俺は後ろにやった足を音がなると同時にあげる

バシヤツ！

やっぱりな。足を吊り上げるロープの仕掛けだ。今回はずいぶん古典的な罠だな。

と思っていたら

ビービー！

ロープが赤く光る

「センサー付きか！」

次の瞬間。オイルが床からじわじわと染みだしてきた。

オイルが横から発射されると、足の裏部分にはオイルは届かない。よって止まっている敵には効果は薄い。

しかし、オイルが床から染みだしてくるとなると話は違う。止まっている敵にも効果がある。

ツルツ！
ドーン！

滑って転ばすという効果が。

俺は転んだ後も滑り続けた。前方には落とし穴。このままじゃ落ちる。俺が選んだ選択肢は

1・たたかう
(何と！？)

2・まほう
(使えないし)

3・どうぐ
(持ってないし)

4・にげる
(できたら苦労しねーよ)

5・金のカフル活用
(そんな時間がないだろ)

6・祈る
(結局何の解決にもなっていないじゃねーか！)

7・落ちる
(結果同じだろ！)

8・あきらめる

(上と変わらないだろ！)

9・自殺する

(落ちるより悪いじゃねーか！)

10・死ね！

(命令系！？明らかに殺意があるだろ！)

つて選択肢たくさんあるくせに、ろくな選択肢ねー！！

といいつつ間一髪、俺は落とし穴の前で止まった。

上を見るとスピーカーがあった。きつとさっきの選択肢はこれから出ていたのだろう

ウイーン

ん？俺の前方に大砲のような物が出てくる。まあ、ようなじや無くて見たまんま大砲なんだけどな

ドン！

大砲から何かが打ち出される

「きゃあああああ！！トモーーー！！助けてーーー！！」

ん？こいつは、

「空香そいつが！？」

ボカッ！

ヒュー

ボス

俺と空香はぶつかって、落とし穴の下に落ちる。下にはクッションが敷き詰められていた。落とし穴は結構深い

「いたたた」

こいつは海里うみなと 空香そじか、俺の幼なじみで両親はいない。茶髪のセミロングで整った顔立ちをした……はつきり言うときれいだ。基本はツッコミキャラだ。説明は今のところこんぐらいか。

あと関係ないが俺はツッコミもボケもできる万能キャラだ

「お前はどうしたんだ？」

「起きてベッドから出たら、落とし穴があってそこから落ちて、後は気付いたら何か筒状の物の中にいて、飛ばされて、トモに当たって今に至るわけなんだけど」

「なるほど、分かった」

どうやらただ単にこいつも巻き込まれただけのようだ。

「た、助…けて…くれ」

ん？なんだこのかすれた声は、

「トモ！下、下！」

チツ！気付いたか。
俺は立ち上がる

「げほっ！ゲホッ！」
俺の下で座布団になっていたのは、草橋 創輝、苛められキャラ。
以上！

「俺の説明、短くね？（T|T）」

「E〜んだヨ！」

「……（泣き寝入り）」

それから、数分が過ぎて

「やつほー。生きてるかい？」

「当然だろ」

「いや、この前死人が出たからさあ」

「出たんかい、死人」

「冗談、冗談。生死の淵をさ迷った人や生き地獄を味わった人は居
たけどね」

「おい！……まあ蘇生装置でも原型がない場合は無理だからな。気

を付けるよ」

「分かった」

落とし穴の上から顔を出したこいつは立村たちむら 来斗らいと、今俺がいる落とし穴等を作った。本人だ。いたずら好きで、思い付いたら即実行、人を驚かすためには寝る間も惜しまない。特に、トラップを作るのが上手い。ちよつと子供っぽいやつだ、でも高校生。黒髪で子供みたいな顔をしている。身長は小さめだ。きつと徹夜で罠を作ったのだろう

「そろそろ俺たちを引き上げてくれ」

「ちよつと待ってて、すぐに美緒みおがくるはず」

カタコト

おっこの音は？

「おはよー、トモ」

やっぱりな。

「よう、美緒。」

「何の用事だったっけ？」

「覚えているよ。そんぐらい。俺たちをここから引き上げて欲しいんだ」

「は〜い。そりゃ、『絶対安全だつたらいいな、スーパーロープ』」
「願望かよ!」

そういえば美緒の説明はまだだつたな。本名は洞崎^{くつみ} 美緒^{みお}、はつきり言うとなまえキャラだ。金髪のツインテールでゴーグルを頭に付けていて、目はパツチリと開いている。

発明家の家系で蘇生装置を完成させたのもこいつだ。でもこいつは発明以外のことは忘れっぽい。あとこいつは発明箱なるものを常に持ち歩いている。がその中を見た者は誰も居ないという。だから山上財閥七不思議の一つに数えられている。他の六つは知らん(ってオイ!)

俺たちはロープで上に上がった

「それじゃあねー」

「ああ、分かった……ってちょっと待て!」
「なーに?」

「この落とし穴を塞いでくれ」

「りょーかい!」

美緒は『ノントラップ』を取り出す。見た目はただの(?)対戦車ライフルだ。……こいつの発明の名前に規則性が見当たらないな。

「それじゃ、ドーン」

美緒は対戦車ライフル?を発射する。

ヴウウウチユドーン
カツ！ドオオオグワアアアアアアアン！

まるでどつかの秘密基地が爆発したような感じで、すごい爆音と煙を巻き上げた。

それにしても本当にすごい威力だ。

煙がはれてみたら、落とし穴があった形跡がない。……ちなみに全部吹き飛ばされたわけではない。全て元通りだった

「それじゃー」

「ああ」

まず美緒が帰っていった。

「バイバーイ」

次に来斗が帰っていった。

「あれ？そういえば創輝は？」

空香の問いに俺は指を下に向ける。

「……じゃあね」

どっちら悟ったみたいだ。

「ああ、それじゃあな」

俺たちはそれぞれの部屋に帰っていった
ちなみに創輝はすぐに掘り出されたはずだ（無責任）

第六話 鳥本の朝（後書き）

「・・・今回俺突っ込んでばっかだ。」

「私の出番がない。」

仕方ないだろ。

「どうして？私はこの小説のヒロ」

メインヒロインは空香だぞ。大体お前書きにくいんだよ。

「ガン！！」

と言うことでフロアとアークいないほうがいいんじゃないのかと思います。

更新遅れてごめんなさい！！！！

第七話 新キャラ多っ！(前書き)

評価感想続々ください。

第七話 新キャラ多っ！

く from ソラカく

空香です。

あの後私は部屋に戻って今、朝食を食べに行くところです。

緑さんから聞いた話では、また新しく居候が入ったそうなので、ボケキャラじゃなかったらいいなあ。

と思ってます。ツッコミ量が増えるから

と説明しているうちに私は食堂に着く。しかし見たかんじ誰も来ていない

早すぎたかな？と思ったら。何かがおかしい。何かちょっと歪んでいるような…

あっ、なるほど。私はそのまま手を伸ばす。あつた、あつた

ガチャ

「やっぱりあんたね、来斗」

「早いね、20秒だよ」

ドアを開けたところの真正面に来斗がいた。

えっドア？ああ、要するに誰も居なかったように見えたのは絵のせいだったのよ。マジックミラーのように、ミラーが超高画質の写真だったんだけどね。向こう側からこっちは見えても、こっち側からは写真しか見えない。よって向こう側が見えないというふうだね。

空間が歪んで見えたのはガラスでできたドアノブのせいだったのよ。

仕組みは簡単そうだけど、実はこの仕組みを作るのに一体どれだけ頑張つて、どれだけの技術を作っているのやら。あと関係ないけど材料費も山上財閥からでているらしい。山上財閥って一体……

「あ、また来たからちよつとそこどいて」

私はちよつと横によけてから振り向くと来ていたのは、早奈はやな桜さくら私の幼なじみで茶髪のポニーテール。無口でけっこう鈍感。正直可愛い

ドン！

桜は壁にぶつかった

「……………」

私は正直すぐに駆けよりたい。でも、後でから来斗が何をするか本当に怖い。恐ろしい。ああ、あの時のトラウマがよみがえる。何もしないことにしよう（薄情）

「……………」

桜はやっとこれが写真だと気付いたみたい。でも、中に入る方法が分かんなくて困っているみたい

ゴツ

「……………」

ガラスのドアノブに頭をぶつけたみたい。痛そう

ガチャ

「おはよう、桜。3分だったよ」

「（ペコリ）」

来斗は時間も計っているみたい。桜は頭を下げる。それが桜の挨拶。マジックミラーのことは全く気にしてないみたい

「おはよう、桜」

「（ペコリ）」

私は何事もなかったように挨拶をする

ガチャ

するとトモが入ってきた

「おはよ、桜」

「（ペコリ）」

「スゴいね、0秒だよ」

トモがすぐに入ってきた。桜は早朝に会ってないから今、トモは桜にだけ挨拶をする

「そういえば、新しく来た今回は異世界からの来訪者だったっけ？
はどうしたの？」

「部屋に書き置きと着替えを置いてきて、メイドに案内するように
言っている」

「ふーん」

(その頃)

く from サクシャく

「ゲホツ、ふうやつと助かった。前回登場してすぐに埋められて散
々だ」

たった今掘り起こされた創輝。おつと違う違う。こんなのも
Eくんだヨ！

「ちよつと待て！作者ー！」

(その頃)

く from ミオく

美緒です。今から食事に行くところ。今日は何食べようかなー？あ
れっ？今日は何があったような。新しい……なんだったっけ？まあ、
いいや。

あつ！前方に真遊^{まゆ}発見。

「まーゆー！」

「後ろから抱きつかないでくれ。昨日も言っただろ。美緒」

「ええー！そうだったっけ？」

「言った。その忘れ癖、直してくれよ」

「そついえば、新しい実験パーツ作ったんだけど」

「私は付けないぞ」

「ええ！？もう付けちゃった」

「いつ付けたんだ！」

「寝ている間に。それじゃあ始動！」

「ちょっと待て！私の意見は完全に無視か。しかも実験パーツということはまだ完成していないんだろ。ってうあああああ！！！」

「うーん、操作が難しい上手く反応しない、まあいいや。そりゃ！」

「うあああああああ！！！」

あつ、飛んでいつっちゃった。さっきのは空が飛べるウイングパーツジェットブースター（名前はまだ決めてない）だったんだけど、失敗しちゃった

「from トリモ」

トモだ、さつきから誰も来ていない。今、来斗以外は席についている

「トモ。新しく来た居候ってどんなの？」

「簡単に言うと異世界からの来訪者で、そのうち一人は勇者だ。二人とも魔法が使える」

「はあ……ギャンブル好きなサイキッカーから始まって、幼なじみのサイボーグ、植物に寄生された人、罌を作ることに關しての達人、凄すぎる発明家等々が居候として来てから、さらに異世界からの来訪者が来てさらにバリエーションが増えるわね。……ってゆうかどうなっているのよ山上財閥は！！！」

「まあ、確かにな。俺も内心かなり驚いているのだが、全部本当のことだから、どうしようにもない。大いなる意志（作者）とコメディーというジャンルのせいだからどうしようにもない」

「確かに、でも僕は植物に寄生されたんじゃないって一体化したんだよね？ミル」

「その通り」

「おっと、いつの間に来ていたんだ？白羅とミル」
はくろ

「今だよな？ミル」

「うん、そーだね」

光離（こうり） 白羅（はくらか）、白い髪で顔つきは女っぽい。自然を愛するあまりに植物と一体化しようとしてこうなってしまった。という噂が流れている。植物は白羅がミルと名付け、背中から生えている。ミルは植物なのに見る、聞く、喋る等ができる。ミルはツタ植物で何故か白羅の意志で伸び縮みが出来、自由に操作出来る。普段は収納されており、白羅が話しかけると現れる

(その頃)

～ from アーク～

アークだ、何故か昨日の途中からの記憶がない。それは関係ないとして、今日から僕らはここの居候になった。……僕たちのいた世界はどうなっているのだろうか？かなり心配だ。

この世界の服は僕たちのいた世界のものとたいして変わらないようだ。おかげで難なく着れた。

机の上には書き置きと地図が残されてあった。どうやら自分たちで食堂まで来いという意味らしい。

僕は部屋から出る

「おはよう。魔法王」

「おはよう。って僕の名前は魔法王ではない。アークだ」

先に部屋から出ていたフロアが挨拶をしてきた。僕とフロアの部屋は隣にある

「うあああああああ！！！！」

ん？廊下の向こう側から誰かがとてつもない速さで飛んできた。明らかに僕たちに向かってきている。僕たちが選択したのは

「きゃあああああああ！！！！」

今のはフロアの声、まあとりあえず逃げる他無いだろう。

僕たちは必死に逃げていると、食堂が目に見えるところまで来ていた

「凄い偶然だね！」

「だって俺が誘導したからな。話進まないし！」

「作者！早く助けてくれ！」

「嫌だ、だって面白く無いじゃん。バイバーイ」

「帰るなー！！作者！！！」

作者が帰って行ってしまった。仕方がない食堂まで逃げ込むか。それ以外にライフカード？がない

「グハアアアアアアアアア！！！地面に埋められて作者にどーでもいいと言われた挙げ句これかああああ！！！」

後ろで誰かがぶつかつた。しかも、僕たちのはるかに前にまで吹っ飛んでいった

ドカッ!!

ええ！空中で何かにぶつかつたような感じで止まった！…？どういふことなんだ！？

（from トリモト）

トモだ、今回はやけに視点がころころ変わるな。読者が読みにくいだろうが、作者？

ドカッ！

何やら創輝がマジックミラーにぶつかつて来た

バリバリドツシャーンボカーン！！！！

「一体どんだけの威力なの！？」

しかも、当たりどころが悪かつたらしい。マジックミラーが粉々に崩壊した

「全くもう、壊さないでほしいな」

「俺……への心配は……無し……か……ガクッ」

あ、死んだ

「……たーーーーーすーーーーーけーーーーーてくーーーーーれ！
！！」

その後すぐに真遊まゆがすごい勢いで入ってきた

「仕方がないなあ、ミル」

「わかったー」

バシユツ！

白羅がミルを操って真遊を止める。ちなみに止めている間もブースターが動き続けている

「相変わらずだな。真遊」

虹広にじひろ 真遊まゆ、俺の幼なじみの一人だ、ちょっと男っぽい口調と銀色のセミロングの髪が特徴的で、とある事情でサイボーグになった、よく美緒に遊ばれている

「別に私は好きこのんでこうしている訳ではないぞ」

「で、そろそろブースターを解除してくれ」

「私の言ったことは無視か。まあいい。これを付けたのは美緒だから

ら、私にはどうしようにもない」

ガシャガシャ

おっとこれは発明箱が揺れている音

「おっはよー！」

「そんなことはどうでもいいからとっとと解除しろ」

「何を？」

「真遊のブースターをだ」

「分かったー。ええとどれだったっけ？」

美緒がコントローラーを出して、どのスイッチを押すか迷っているようだ。全くそんぐらい覚えとけよ

「ふう、やっと着いたー！」

おっとフロアとアークが今ちょうど来た。タイミング悪いぞ。空気読め（理不尽）

「分かんないから適当にやっちゃえ」

ん？やばい、このパターンは爆発オチか！俺は今日最初のテレポーター装置を使って逃げた。

来斗はまた誰かはめるための落とし穴をシエルター代わりにした

桜は机とさりげなく創輝を盾にした（ひどっ！）

「そりゃー！」

ポチッ

チユツドーン！！！！

今上げた面々以外の方々は当然、爆発に巻き込まれることになる

「なんで着いた早々にこんな目に会つのよー！！！！」

「俺さりげなく盾にされてるしー！！！！」

「ミルー！！！！」

「エーテルシエルター（魔法壁）発動！！！！」

「あれ？間違えたかなー？まっいいやー！！！！」

「私は何も悪くないのにどうして一番近くで爆発を受けるんだー！！！！」

「アークだけはエーテルシエルター（魔法壁）でダメージを受けずに済んだみたいだ。

そして、アークの顔を一目見た桜は

「…………ポッ」

そんなことになったというのはまた後の話

第七話 新キャラ多っ！（後書き）

更新完了！

鳥本「遅いぞ。」

緑「私って前回は今回も出ないんですね。どうせ私なんかその程度のキャラですよ。」

無視だ。

鳥本「結局それに行き着くわけか。」

第八話 悪役はやっぱり自滅する(前書き)

どうも、更新遅れてすいませんでした。

第八話 悪役はやっぱり自滅する

（fromフロア）

フロアです。

私は今自分の部屋にいます。前回のあと、なんかたくさんの方が来て、すぐに食堂が修復されました。そして、自己紹介も終わって歓迎されました。あの人ら私たちと同世代で居候なんだって。そして部屋に戻って今に至るといわけです。

えっ？前回の爆発の傷はなぜかコメディイだからということまで作者が10分で全員の傷を治しました。

今からトリモトが私と魔法王にこの家の案内をしてくれる時間

コンコン

噂をすればトリモトがきたみたい

「入ります」

「あれ？ミドリ？トリモトは？」

「それは言えません」

な、何かやばい予感がする

「それでは、アーク様と一緒に案内させていただきます」

「山上島は日本国に属する島で、今から30年ほど前に計画され、10年前に出来た島です。そういえば異世界から来たあなた達に日本国なんて分かりませんか。すいませんでした」

島で国単位じゃないとしたら、日本ってどんだけの超大国なの!? もう頭が痛い、この世界は私たちの常識が通用しないの? もう、そういう事にしよう。隣の魔法王も同じことを考えているらしい

「敬礼! 私はここの全権を任せられている料理隊長の河傘庄徳かたじまじゆつとくと申す者であります」

身長が2mはありそうな、体が大きく豪快そうでなぜか迷彩柄のコック服を着たおじさんが出てきた
ええ! いきなり出てきて何この人? 料理隊長? 普通ここはコック長や料理長じゃないの!?

「料理番長! この伊勢エビはどうするんですか?」

ポカーン!!

えええええええ!

殴っただけで壁にめり込んだ!? しかも殴る動機が分からないし

「馬鹿者!! 今日^{むろは}は料理隊長だ。料理番長は昔の話だ!! わかったか! 室葉副隊長!!」

「い、イエッサー」

「声が小さい!」

「イエツサー！！！！」

何なのよ！？この人達は

「この人達は山上財閥の全ての食堂を任せられている、河傘庄徳料
理長と室葉和成副料理長です。河傘料理長は気分屋で、日によって
自分の呼び名と口調を変えるのです。ここが食堂と呼ぶのも料理長
のご趣味です。それでは次へご案内しましょうか？」

「我らの軍歌を歌え！！室葉副料理隊長！！！！」

「イエツサー！！！！って軍歌！？そんなこと聞いた覚えがありません！」

ドカーン！！！！

ええ！今度は壁を突き抜けた。でもいつまでも終わりそうな気がしない。話に割り込む余地がない。次の場所へ行こう

「ここは地下です」

私たちが次にきたのは地下、明かり以外は何もないとてつもなく広い空間

「ねえ、何も無いんだけど」

「ここは色々するとこです」

「色々つて？」

「色々です」

「教えなさいよ」

「色々です。（黒い笑み）」

「……（汗）」

「次へ行きましょう。」

「ここは図書館です。ここは迷路のようになってるので迷い死なないように気をつけてください」

次に案内されたのは図書館。ここは見渡す限り本。本しか見えない。それにしても全体的になんか暗い。あれっ？通路の先に見えるのは

「桜！」

本を戻していた桜だった

「……！」

桜はこちらを見ると顔がすごい速さで赤くなった。どうしたんだろ？

ダッ

あつ！逃げた。ぐんぐん奥へ。大丈夫かな？迷路のようになってる
って聞いたけど

「ヒツヒツ。大丈夫じゃよ。桜はこの図書館の内部構造を全て理解
しておるからな」

「キヤアアアアアア！」

何！？急に後ろに幽霊！？顔が危険なくらい白いんだけど！？

「なんじゃ、失礼な」

「相変わらずですね、蓮也^{はつや}さん」

ハアハア、驚いた。だつて急に背後から現れたんだもん。

出てきたのは白髪の眼鏡をかけた老人、髪は意外と豊富でかつて美
男子だったのが伺える顔。

ちなみにアークは口には出してないがかなり驚いている様子

「ほえ？」

タタタバツ！

ええ！桜がすぐに戻ってきて蓮也さんを連れさった！？

桜と蓮也の会話

「……………キライ」

「ガーン！……………桜、おじいちゃんを嫌いにならないでくれ（T―T）

」

「……イヤ」

「うえええん」

なぜか奥の方から泣き声が聞こえてくる。低めの声なのでちょっと怖い

「あの人は早奈^{はやな} 蓮也^{はすや}この図書館の全てを任せられている人で、桜さんの実のおじいさんです。桜さんはよくおじいさんの仕事を手伝っています。ちよつと不気味なイメージがある人ですが、本当は面白い人です」

「ねえ、何で桜は蓮也さんを連れ去ったの？」

「さあ？ 私には言いかねますが恋は複雑とでも言っておきましょうか。それでは次へ行きます」

「「？」「」

（この二人はかなり鈍感ですね。……みんなに広めよ）

その後、三人を除いてみんなに広まったのは言うまでもない

～fromライト～

(なんか、カタカナで書くとデスノートの人が思い浮かぶなあ。b
Y作者)

来斗です。今はトモと美緒と一緒に罫を作っています

「今回はどうする?」

「今回は異世界から来た人だし、魔王軍と戦っていたってきいたからなあ。やっぱり落とし穴とかはきかないと思う」

「美緒、さつきからなにを作ってるんだ?」

「『カル・カル・カル』だよ」

「何だよ、その名前から連想出来る効果が無い装置は。なんか口ポットとかに居そうだな」

「要するに物質の質量を他に何も影響無しで変える装置だったわけ?」

「俺に聞くなよ。で、どうしてそんなもの作っているんだ?」

「何だったっけ?」

「忘れたんかい!」

さつきからツッコミっぱなしだね、トモ

「じゃあ、それを使おうか」

「よし、決定」

↳ fromアーク

やっと喋れた。さつきからずっとフロアと一緒に居たが、ほとんど喋ってないからな

「ここは天信山の入り口です。あそこに滝が見えますね。あれは口瀬滝です」

次に案内されたのは、天信山の入り口だった。ん？滝の中に人が居るように見えたのだが気のせいか

「誰？」

「え？」

は、背後に誰かがいた。いつの間に背後にいたんだ？

それに気配を一切感じなかった。さつきの老人は気配は感じたものの不気味だったのでちよつと驚いてしまったただだが今回は本当に気配が一切無かった

「警戒しないでください。梨恵さん。この人たちは新しい居候です」

「新しい居候か」

「この人はこの山の番人の天信 梨恵。高校生で鳥本様と同じ学校に通っています。よくここらで修行をしています」

梨恵さんの特徴は左の頬に傷があることだ。茶髪の髪は後ろでまとめあげ背中に刀らしきものを見えないように仕込んでいるみたいだ。その事は普通の人は気付かないだろう。服は修行着で何故か濡れている

「ちょっとすいませんがどうして濡れているんだ？」

「さっきまで滝にうたれて修行していたからだ」

「それでは何でわざわざ刀を背中に仕込んでいるんだ？」

「私と勝負しろ！」

「ええ！？何この急展開！？」

「言うの忘れていましたけど、梨恵様は強い人を見つけたら勝負を挑むのが日課なんですよ」

「さあ、早く答えろ」

「断る」

「分かりました」

「何その会話！？二人ともあっさりし過ぎ！」

「さて、次に行きましょうか」

「っつてこっちも！」

〈fromリモテ〉

「さて、最後にどこにセットするっ？」

「それはもう決めてある。この研究室は最後に案内するように緑に言っておいたから研究室の入り口にセットしておけばいい」

「わかったー」

3時間後

「かんせーい!!!」

「よし完成だ」

「そろそろ来る時間だよ」

「よし、来斗、美緒、隠れとけ」

俺たちは本棚の後ろに隠れる。……まるで俺たち悪役だな。新しく来た居候を案内して、最後に罠にかけるといふ恒例行事なんだけどな。え？そんなこと考えたのは誰だっけ？当然俺に決まってるだろ（やっばお前悪役じゃん。by作者）

バンッ！

おっ、ドアが開いた。来たか

「おい美緒、いるかー？」

声からして創輝かよ

「今い

ガバッ

俺は美緒の口をふさぐ

「もうちょっと隠れとけ、創輝を実験体にする」

「わかったー」

おっと創輝が入って来た。畏発動。

まずは体重を重くする装置

「ん？何か体と頭が重い」

ふふふ、これはあとでから急激に重くなるんだ。

しかもそこで重さに負け崩れ落ちようとしたところに『押してはならないスイッチ』が下に現れる。これは相手に精神的、肉体的にダメージをあたえる。しかも重さはどんどん増えていく。創輝も同じようになっている

ポチッ！

ん？ちゃんと研究室に行ったんだよな。一体どういうことだ？

「いや、何でもない。それじゃあな」

「分かりました、研究室の下の方で何やら物音が聞こえたのですが気のせいですよ。それでは」

「っておい！ちょっと待て、緑」

ブツツ

電話を切られた

「もしかしたら僕たちが落とし穴の中で作業している間に終わってたとか？」

「ああそうだ。……まあ、こんなことはいくらでもある。それじゃあ片付けだ。美緒、『ノントラップ』をだせ」

「あ、ごめん。今出力調整中なの」

「いいから貸せ」

「わかったー」

美緒は単純で助かる。それにしてもこれがないとどれぐらいの時間がかかるのか想像もつかんというかむしろ考えたくない

「それじゃあ発射！」

ヴィィィィプシュー

すると、何故か煙が吹き出した

「あれ？どうしたんだ？」

「これは……故障？」
ピカアアアア

しかもこれが光りだす。タイミング的にそろそろオチだから

「これはもしかや二回連続で爆発オチか？」

ドガアアアアーン！！

やっぱり大爆発

その後研究室はしばらく仕様不可能になったという

第八話 悪役はやっぱり自滅する（後書き）

鳥本「更新遅れた理由はなんだ？作者。」

それはインフルエンザで寝込んでいたからです。

鳥本「インフルエンザでも書け。」

無理です。

あと、評価感想だけでなく読みやすくするためのヒントなどもくだ
さい。お願いします。それでは。

番外話 キャラクター設定紹介【メインキャラ編】（前書き）

更新遅れてごめんなさい。

番外話 キャラクター設定紹介【メインキャラ編】

作者「今回はまさかのキャラクター説明番外編だー!!」

鳥本「テンションたけーな」

作者「さーて、今回はメインキャラ編です」

鳥本「まあ、もともとはこの馬鹿作者がキャラを多く出しすぎたせいなんだけどな。それもまだ学校すら出していない状態で」

作者「それを言うな。事実だけど」

鳥本「六、七、八話目なんかひどいぞ。なんせ一話につき3、4人の新キャラが登場しているんだからな」

作者「……黙秘権を使う」

鳥本「それじゃあ俺が勝手に進めていいな」

作者「あ、ちよつと待て」

鳥本「スタート!」

作者「無視か!?!」

ポジション：主人公、山上財閥のトップ、高校一年生

性別：男

性格：多少（！？）のS

髪形：黒髪で長さは普通

容姿：上の下。本人は普通とと思っているが、かなりの女顔。

成績：全科目学年1位

戦闘能力：一般人並だが、殺気で一般人を気絶させることができるから一般人よりは上。ただし山上財閥の力があるから、ある意味最強！？

備考：織田信長の子孫らしいが、今のところ確証はない。
心理戦が得意で、判断力がある

鳥本「つて感じで今回は進めていくからな」

作者「せめて進行役は俺にやらせてくれ」

鳥本「次はレギュラーキャラだ」

作者「またスルー！？」

海里 うみさと
空香 そらか

ポジション：メインヒロイン……らしい。高校一年生、ツッコミキ
ヤラ、居候、鳥本の幼なじみ

性別：女

性格：まともな常識人

髪形：茶髪のセミロング

容姿：上の上

成績：上の下

戦闘能力：皆無

備考：ファンクラブがあるらしい。両親は事故で他界。この小説で
一番の苦勞人？

空香「メインヒロインらしいって……」

鳥本「気にするな。次はフロアとアークだ」

作者「……………（隅で体育座り）」

フロア・ムーン

ポジション：レギュラーキャラ、勇者、異世界からの来訪者、居候、ツッコミキャラ

性別：女

性格：気が強い、どつちかって聞かれるとSに近い

髪形：緑髪のショート

容姿：中の上

成績：中の下

戦闘能力：一応、元々いた世界では平均だが、この世界では魔法がないため一般人よりは上

備考：ただ魔王の城を見つけると占いで選ばれた勇者のため特別なことは何一つない。かなりの貧乳、パフェのことになると色々としごい

アーク・サラブ

ポジション：ちょっとした苛められ役、レギュラーキャラ

性別：男

性格：けっこう優しい

髪形：青髪のロング

容姿：特上

成績：上の中

戦闘能力：普段でも、かなり強力な魔法が使えるが、暴走状態になると強さは格段に上がる

備考：身長は高め、何やら秘密があるようだ。博識。プリンを食べると暴走状態になり、ヨーグルトを食べると元に戻る。また、新月の日の夜10時になると急に寝る。起こすとまた暴走状態になるとい、まるで作者がとっさに考えたような設定を持つ。占いをかなり重要視する。本名は魔法王

魔法王（アダ名はアーク）「アークはアダ名ではなあああああい！
！！」

フロア「作者！今すぐ私の備考ってところを消しなさい！！人が気にしているところを！」

作者「いや」

フロア「二文字だけで断らないで！！！」

鳥本「それじゃあ次だ」

立村たちむら 来斗らいと

ポジション：レギュラーキャラ、鳥本の親友（悪友）、高校一年生、居候

性別：男

性格：意外と純粹で子供みたいな性格（になつたかなあ？）

髪形：黒の長めの髪

容姿：中の上、童顔

成績：上の下

戦闘能力：実質的な戦闘能力は皆無だが、罨を作ることに関しては達人的であるから、侮れない

備考：鳥本を罨にかけるのが日課。美緒とよく一緒にいる。頭の回転が早い。純粹（無邪気）な性格だから人を罨にはめるのに悪気はない

四葉 よつば
緑 みどり

ポジション：レギュラーキャラ、山上財閥メイド長

性別：女

性格：腹黒

髪形：緑のベリーロング

容姿：上の中

戦闘能力：主に情報を最強の武器みたいにして使う

備考：実は鳥本の考えることは大体読める。落ち込みが激しいがすぐにもとに戻る。落ち込みの具合によってはブラックホールみたい
に黒いオーラが漂う

草橋創輝 くさばし せうき

ポジション：苛められ役、高校一年生、一応レギュラーキャラ、居候

性別：男

性格：どうでもいい

髪形：黒髪

容姿：中の上

成績：下の上

戦闘能力：皆無？

備考：鳥本の幼なじみだったりもする。あとはどうでもいい

洞崎 としまき 美緒 みお

ポジション：レギュラーキャラ、山上財閥発明・開発長、高校一年生

性別：女

性格：天然、忘れっぽい

髪形：金髪のツインテール

容姿：上の上

成績：中の中

（数学と理科はトップクラスだが、国語と社会は壊滅的、英語は普通）

戦闘能力：主に自分が発明した常識外れの武器を使う。時折理不尽

な強さを見せる

備考：どこかの国の人と日本人のハーフ、真遊によくつきまとう。
来斗と一緒にいることが比較的多い。なにか発明する事が趣味

鳥本「さあて、まだまだ行くぞ。次だ」

緑「はい分かりました、鳥本様」

美緒「なにになにー？」

創輝「俺の紹介短くね？（T|T）」

来斗「当然だと思っよ」

創輝「グハツ！！」

早奈 はやな
桜 さくら

ポジション：レギュラーキャラ、居候、空香の幼なじみ、高校一年生

性別：女

性格：無口、意外と鈍感

髪形：茶髪のポニーテール

容姿：上の上

成績：どれもトップクラス

戦闘能力：ほとんど皆無。コメディイのときには本を投げつけたりする

備考：よく祖父の手伝いをしているが、そのたびにつきまとってくるので正直うっとおしく思っている。運動神経抜群だったりもする。アークに惚れていて、心の奥では密かにフロアをライバル視している

光離ひかり 白羅はくわ

ポジション：レギュラーキャラ、居候、高校一年生

性別：男

性格：あっさりとした性格、優柔不断な面がある。

髪形：白髪で長髪

容姿：特上、女顔のため男にも女にもとてももてる。

成績：中の下

戦闘能力：背中に寄生しているツタ状植物、ミルを自由に操る

備考：自然が大好き。しかしその為植物と一体化しようとして寄生されてしまったという噂があるが、真実は不明

虹広 にしひろ 真遊 まゆ

ポジション：レギュラーキャラ、鳥本の幼なじみ、居候、高校一年生

性別：女

性格：ちよつと男みたいな性格

髪形：銀髪のセミロング

容姿：中の中

成績：上の上

戦闘能力：ロケットパンチなどいかにもサイボーグらしい技が使えるらしい

備考：なぜサイボーグになったかという点、まだ明かせない。よく美緒に改造される。ちなみに外見は100%人間

天信^{てんしん} 梨恵^{りえ}

ポジション：レギュラーキャラ、山上財閥天信山番、高校一年生

性別：女

性格：落ち着きがある方かな？

髪形：茶髪の髪は後ろでまとめあげられている

容姿：中の上、目付きが鋭く左の頬に傷痕がある

成績：中の上

戦闘能力：謎の能力を使う。アーク曰く魔法に近いものらしい。五行の属性をすべて使え、さらに五行のどれにも属さない『天』という属性の技が使える。

剣術の腕も相当で、アークよりも別格に強い

備考：山上財閥に来るまでの記憶が無い。技は体が覚えていたらしく、問題無く使える。記憶が無いせいで自分の元の口調が分からなくなっている

意外と胸は大きい

鳥本「まあ、レギュラーキャラはこれで問題なく一通り終わったな。それにしても……何かこの作品の方向性がどんどん変わっているよ。うな気がするんだが」

作者「誠にその通りです。初めは異世界トリップ物コメディーだったんですが、何か六話目辺りから何でもアリのドタバタコメディーに変わってしまいました」

鳥本「なるほど、作者の無計画ぶりが改めてよく分かるな」

作者「さあて、ここでいきなり企画」

鳥本「って本当にいきなりだな」

作者「何と、キャラ募集企画をやります」

鳥本「まだこの『金持ちはファンタジー！』はたった10部分目までしか進んで無いぞ。そんなことしている暇があったらとっとと更新しろ」

作者「ごもつとも。でも、本当にやります。募集期間は作者の気分が変わるまでです。募集期間中でも、良いと思ったキャラはどんどん出していきます。

書くべきところはそのキャラの名前と大まかな設定、容姿、髪形だけでいいです。細かいところまで決めて下さっても構いません。(出ない可能性はありますが)一人でも送ってきて下さっても結構です。

どんどん感想欄に送ってきて下さい。あ、普通の感想だけでも十分にいいです。お待ちしてます」

鳥本「まあ、一人でも来れば良い方だ」

作者「それを言うなよ。あともう一つお知らせがあります。

これからは更新ペースを遅くしようと思ってます。まあ月に2、3

回更新出来ればいいほうかなと思っています」

鳥本「作者、殺すぞ（強烈な殺気を放つ）」

作者「バタツ！（気絶して倒れる）」

鳥本「おっと作者が気絶してしまったな。作者が気絶したから今回はこれで終了だ。それじゃあな」

第九話

地球滅亡間近！？（前書き）

今回はなんとスペシャルゲストに神技さんのキャラ、明日陽子^{あす ようこ}さんと鬱田^{うつだ}さんのさんが登場します。今回は神技キャラを知らない人にはちんぷんかんぷんなのかもしれないので、詳しくは神技さんのホームページ『神技の部屋』を見て下さい。アドレスは感想欄を見て下さい。（無責任）

第九話 地球滅亡間近!?

（fromトリモト）

トモだ。昨日の研究室の爆発のとき、俺は美緒が持ってたバリア装置を使って、爆発に巻き込まれずに済んだ。ちなみに美緒は爆発に巻き込まれたがその後も存分に働いてもらった。（鬼！）

俺は今部屋にいる。俺の部屋は三階に渡っていて一つの階に3つの部屋がある。しかもエレベーター付きだ。冷暖房完備。

一つの部屋の大きさは大体七畳くらい。え、小さいと思ったか？俺は巨大なものが好きだとも思ったか？俺の部屋には誰も俺以外誰も入ることは出来ない。よって掃除は俺一人でやらなくてはならないからだ。（注：実はほとんど機械に任せっぱなし、但し鳥本本人が掃除できないわけではないが、めんどくさいかららしい）

まず一階には寝室と温泉風呂と普通にソファとテレビがあるダイニングがある。温泉風呂とはその名の通り（読者の想像通り）温泉が出る風呂だ。しかも全国各地の温泉が自動で選択される、手動で選ぶことも可能だ。もちろん温泉の元など不使用だ。

二階には和室がある。さらに開かずの部屋が存在する。理由は知らない。（自分の部屋なのに!？）それに隠し部屋もある。隠す理由は無い。（じゃあなんでそんなものあるの!？）隠し部屋には様々なコレクションがある。鉄道模型やチョコQ、カード、骨董品、切手、メダル、剥製などだ。（共通点が見当たらないんだけど。）どれもこれもすぐさまコンプリートしてしまつてすぐに飽きた。

次に三階にはパソコンやゲーム、本、勉強道具、金庫、牢獄、戦闘用ロボット、古代文明の遺産ミハナなどが置いてあるごくごく一般的な高校生の部屋（金庫と牢獄と戦闘用ロボットのどこが一般的!？）いや、それは10000歩ぐらいさがって認めるけど古代文明

の遺産ミハナって何!?)と、トレーニング用品などが置いてある部屋と、あとドアがない部屋というのがあらしい(らしい!?)ちなみに明日は学校がある。正直言っつてめんどくさい。もう山上財閥のトップになってるから世界を征服してるも同然だし学校に行く定義自体が見当たらない。義務教育期間過ぎてるしな。でも留年や学校を辞めたりしたら間違はなく『あいつら』がくるから行かなければならないなあ。学校かあ。そういえばフロアたちの編入手続きしてないな。

……まあ、やらなくてもいいか

「おい、お前本当に山上財閥のトップなのか?あまりにも無責任過ぎるぞ」

「まあ一応そうだ。(一応!?) 　　そういえば作者、そういえばさつきから出てくるこいつは一体何だ?」

「それはちょっとした事情を解説したり読者様の心の声を表すものだ。ツッコミ役がこの場にいなかったから作ってみた」

「ふーん、まあいいや。ツッコミ役がきたらどうせすぐに消えるだろ。それにそろそろ帰れ、作者が本編に長々とでるなよ」

「ちつ、仕方がない、帰るか」

もしかしたら今回ずっと居座る気だったか?

おっと時計、時計。今は朝2時か(普通朝とは呼ばない)さて、仕事仕事

〔5時間後〕

〈fromソラカ〉

どうも空香です。私は今、白羅と真遊といっしょに何か白い立方体の箱を運んでいます。中はなにかと聞かれれば知りません、トモに見るなと言われているからです。それにしてもこれは下にタイヤがついているから楽に運べるけど、大きい。見た感じでは6m位の大きさ。

うう、トモに言われなければこんなこと絶対にしないのに。それに普通はメイドやら使用人に任せるものなんじゃないの？

「何で僕たちはこんなことしているんだろうね？ミル」

「しらない」

「それにしても、今日は美緒が来ないな。いつもだったら、今頃なにかしら改造しようとしてくるはずだ」

「美緒のことだから、そんなこと忘れて研究に没頭しているんじゃない？もしくは発明品が爆発したか（その通りだったりして）」

私たちは曲がり角を曲がる。

……なにやら研究室があるはずの場所が崩壊して廊下をふさいでいた。ガレキの山が積み重なり、赤、黒、青、緑などのさまざまな薬液がしたたり、大量の怪しげなビンが飛び散り、ガレキの下からは

なにやら手？らしき物が見える

「どうしたんだろっね？ミル」

「しらない」

「って早く助けなくていいの！？」

「あんな目にあつのは創輝ぐらいだよな？ミル」

「そのとおり」

「創輝だから、助けないほうがいいだろ」

「いや、証拠もないし創輝と決まった訳じゃないんだけど。もしかしたら、美緒かもしれないし」

「……だ、誰か」

ん？ガレキから前触れもなく、かすれ声が聞こえてきた。この声は創輝の声。証拠ができた。ってよくこの状態で喋れるわね

「それじゃあ、行こうか？ミル」

「そーしよー」

「それじゃあ、行くぞ」

「あ、うん」

私たちは別の道にされる。それにしてもどうして研究室があんなことになっているんだろ？まあ、気にしないでおい

その頃美緒は

「むにゃむにゃ、納豆が、納豆が来る〜。ねばねばきらい。うーん、ざらざらしてるのいや〜。助けて〜。うーんマッシュマロ納豆が〜」

自分の部屋で昨日の爆発のせいか包帯でぐるぐる巻きにされながら寝ていた。色々としつこいところ満載の寝言を言いながら

〜fromリモート〜

ドカアアアーン…！

「っていきなり何だーっ！！」

今、俺が社長室で仕事をしていると、いきなりドアが吹き飛んだ

『…ぶも』

「転送完了」

「って、お前らは神技さんのキャラクターの陽子としのじゃないか

！山上財閥の総力をあげて探していたのに、どうしてここにいるんだ？

あと読者、この二人については神技のホームページを見る！」

「気ニシナイ」

『いきなりここだった』

「なるほどな。まあ、何はともあれ良かった。いきなりここに来てくれたんだから……茶でも飲むか？」

『…うん』

「私はこの世界を見てくる 空間転移」

「ああ、分かった……ってちょっと待てーっ！！」

『…もう行った』

「……緑、茶を用意しろ、あと全力で陽子を探せ」

「分かりました、鳥本様」

(…ってどこから湧いてきた！？by作者)

～fromアーク～

アークだ。僕は今、図書館にいる。この世界の科学は実に興味深い、僕のいた世界とは根元からさて全然違う。だから科学についての本を探している。

ん？魔力の流れが違う。これはどうなっているんだ？この世界には魔法を使える人はいないはずだから……これは時空間転移魔法だと！？

「くっ『マジロ・ネルツ』！！」

シュウイイイイ

今の技は空間に見えない魔力の網を張る魔法だ。図書館中全ての場所に網を張った。オリジナル魔法だ。急に現れればすぐに分かる。時空間転移魔法が使えるとはおおよそ魔王以外にはいないだろう。ともなると来たのはかなりの実力者か、先手必勝だ……！

「そこかつ！『ピル・メガ』！！」

ピュン

半径30cm位の極太のレーザーを僕の背後に放った……が

シュイン

かき消された

「なっ何者だ！」

「ふふふ 正当防衛よ」

今、地球最大のピンチ!!!

第九話

地球滅亡間近！？（後書き）

うう、神技さん、キャラがおかしくは無いですよ？不安で不安でたまりません。

あと次回はなんと、アークが本気を出します。

鳥本「でも陽子よりはるかに弱いかな。」

それを言うなよ。でも暴走状態のアークは普段のアークよりもはるかに強いからな。それではそろそろ

鳥本「じゃあな。」

第十話 地球滅亡寸前!? (前書き)

更新遅くなってすみませんでした。

今回は色々と初挑戦が多いです。第三者視点や戦闘描写等、きつと下手くそだと思えますが見守っていて下さい。

第十話 地球滅亡寸前!?

「fromサクシャ」

どうも、今回は初挑戦の第三者視点でお送り致します

〔図書館〕

ここ図書館では勘違いによるアークと陽子の戦いが繰り広げられていた

「『ピル・バルラ』」

アークから大量のレーザーが放たれる

〔正当防衛よ でもちよっと手加減するわよ 指閃・乱〕

陽子の両手から大量のレーザーが放たれる

ババババババ

「くっ！相殺したか……くっ！」

アークに大量のレーザーが飛んでくる。

「『エーテル・シールド』!!」

アークは魔法の盾を作り出して耐える

〔雷神塊らいかい〕

陽子の攻撃は止まらない、アークに巨大な雷の塊が迫る

「くっ！」

アークは横に回避して

「『ウインド・ボーム』！」

風の爆弾を放つ。

〔指閃・貫かん〕

アークの『ウインド・ボーム』をレーザーが貫く

ボガアアアン！！

そして爆発し猛烈な風を呼び陽子を吹き飛ばす

〔雷神掌らいじんしょう〕

「くっ！」

しかし陽子は風を利用し距離を縮め、雷を纏った拳で攻撃する。し

かしアークは間一髪、後ろに下がって避け、相手との距離をひろげる（くっ！強すぎる。並みの技では効かないな。ならリスクはあるが、最強の魔法で一撃で決める他は無い！）

「その頃」

『…美味しい』

「そうか」

しのと鳥本はまったりと和室でお茶を飲んでた。ってアークが頑張っているのにそれは酷いだろ！！

「そついえばしの、さっき渡した世界最強のロケットランチャー、^{アドル}ADRは何か問題が起きてないか？」

《ヒヤハハハハハハ！！問題がおきるどころか絶好調だぜ！！》

「っていつの間に死乃に変わってたんだ？まあいいが。それにしても問題が起きなくて良かった、間違いなく地球滅亡するからな」

説明：しのは二重人格で吹き出しが『』から《》に変わり、性格は凶暴になりロケットランチャーを打ちまくる。しのと死乃は自分の意思で人格交代ができる

《ヒヤハハハハハハ！！交代！！》

『…だそう』

「つくづく思うがお前らの人格交代は簡単だな」

「鳥本様、新しい情報が入りました。」

「その情報は何だ？緑」

「最近就任したA国の大統領が【ピー】だったらしく【ピー】になって【ピー】らしいです」

内容が社会的にヤバいから削除！！

(陽子の情報ではないな、陽子が暴れ出したならすぐに情報が入るだろうからまだ暴れていないという事になるな)

「後、陽子さんによる被害状態は……図書館が半壊した後に実験室跡地が吹き飛ばされたぐらいです。今は天信山の方角に向かっていきます」

「ああ、分かった……」

「つてそつちを先に言えーっ！！今すぐ天信山に向かうぞ！」

『…このお茶飲んでから』

「緑、強制連行しろ」

「分かりました、鳥本様」

「瞬間移動装置、発動」

ギュイイイイイ

〔天信山入口〕

「…強い、とても強い力を持った人が二人戦っている。一人は前に会ったアークという人、もう一人はさらに強い、私が今まで戦った中では最強かも知れない…私はこいつと戦いたい！」

梨恵は強さを感じ取っていた

〔天信山上空〕

「『シャドウ・カラム』」

アークは無数に分身する

〔雷波らいは〕

しかし衝撃波によってアークの分身がかきけされる

〔雷閃〕

そしてアークに雷を纏った剣が迫る

(くっ！早い、避けきれない！…終わりか)

とアークが思った時、

「火閃かせん」

下から梨恵の放った火の閃光が陽子に飛んできて、雷閃の軌道をそらすと同時に梨恵はアークと陽子の間に移動し

「私と勝負してくれ！」

「いいわよ」

そして梨恵対陽子の戦いが始まった

〔空香、真遊、白羅(場所不明)〕

「……そういえばこれはどこに持って行くの？」

「私は聞いて無いぞ？」

「知ってる？ミル」

「しらなーい」

「って誰も知らないの!？」

「わ、私はもう空香がすでにトモから聞いていると思っていたぞ」

「僕が知ってるはず無いよね？ミル」

「そのとおり」

「……………どうしよう」

廊下をさ迷う三人だった。

〔美緒の部屋〕

今、美緒はベッドの上で包帯を巻いてすやすやと寝ている

「うーん、進化した、ダクロの力でマシユマロ納豆がコーヒー納豆に、うーん、助けて、納豆ビームが、ねばねば、うーん、サハナカアがあれば」

だから、何なんだ！？その夢は！

おっと、説明、説明

美緒の部屋は年がら年中、訳が分からん機械で埋めつくされている

…訳では無い。美緒の部屋はきちんと整理整頓されていて何がどこに置いてあるのかすぐに分かるようになってる。しかし美緒はそ

んなこと地球が滅亡する寸前にでもならないとやるはずが無い（まさしく地球が滅亡する寸前なんですけど!?!）

ガチャ

「美緒、生きてる？」

あ、ほこりがある。捨てとかないと」

来斗が入ってきた。身体中に包帯を巻いている

…大丈夫か？

「嘘」

イツツアダミー!?!その包帯嘘かよ。

美緒が包帯巻いているからてつきりお前も怪我したのかと思っただけ。

でもどうやって爆発から逃れたんだ？

「その秘密はこれさ!」

それは…赤い酢、赤酢か!

「そう、これで酢飯を作ったのさ。さあ、この寿司を食べて見てください」

うまあああああい!!!

つてミスター味っ子かああああい!!!でも赤酢のネタは将太の寿司からかよ!!!二つとも古いわーっ!!!読者様が分からんだろ!せめて喰いタンにしる!(赤酢は実際にあります。主に江戸前寿司に使われ、赤酢を使った寿司は絶品です。ぜひ読者様もお金に余裕

があればご賞味あれ。ちなみに作者は食べた事がございません」ってダメじゃん

「本当は僕だけが知っている秘密通路に隠れたんだよ」

なるほど…ってどんだけ。(古っ)それにしても秘密通路があったとは作者の俺ですら気付かなかったな

「それにしてもしばらく見ていないうちに汚れているね。掃除しなきゃ。まずはこの床のしみから」

そうかそうか、美緒の部屋がやけに綺麗な理由はお前が掃除していたのか、なるほどなるほど……
ってここ一応女の子の部屋だぞ！(一応！?)普通入っちゃダメだろ!?

「僕は小学校の頃からずっと美緒の部屋を掃除していたけど」

お、お前って

「?」

い、いや何でも無い

「わかったよ。それにしても美緒が珍しく部屋で寝ているね」

それは珍しい事なのか?

「うん、美緒は普段はほとんど部屋にいないもん」

そうなのか。まあ、四六時中実験室にいそなやつだからな

「うん、まあ研究室の10分の9ぐらい消滅しても何事も無かったかのように実験とかするからね。

それじゃあ、掃除始めるから手伝って」

え…バイバーイ

「あ、逃げた」

〔天信山〕

「きんかはん金花判！」

〔雷閃〕

梨恵が鋼鉄のマンホールほどの大きさの花を放ち攻撃するが弾かれる

〔金花判〕

陽子が梨恵の技のコピーし攻撃する

「！」

梨恵は寸前でかわす

（私の技がコピーされた。これでは奥義は使えない…普通の技もし

くは『天』を使うしかない)

アークは下から傍観しつついた

「梨恵さんの使っている技は魔法…なのか？魔法のようで違うよう
な…分からない。普通の魔法は四大元素により成り立つはずなのに
アレは五つの元素を持っている…」

〔雷塊〕

「水円」
すいえん

陽子が放った雷の塊を梨恵は水で作った輪で受け流す

バチバチ

〔そろそろこちらも本気よ 雷鎖砲〕
らいさくほう

雷鎖砲とは神技先生の最強キャラ、陽子が放つ神技先生の許可無く
して作った、相手の動きを封じる能力がある雷の鎖を落とし相手に
攻撃する奥義である

「天の解放！
てんしょうせんちやくう
天昇閃地空！！！」

梨恵の真下にある地面が盛り上がりひび割れ白い光？いや、光と呼
べるのかも分からない神々しきエネルギーが天空へと向かい陽子
の雷と相殺した

「」

「これほど強いやつと戦うのは初めてだ…」

陽子も梨恵も楽しんでいるみたいだった

「……これはコメディーだろうがああああああ……マジバト
ルしてんじゃねえええよ……！」

その様子を見ていた鳥本は叫んだ。

「てめえ、作者！第三者視点なんかやってんじやねえだろがああ
ああ……！下手過ぎだ……！そもそもナレーションがキャラと会
話してるな……！」

す、すみません……！ごめんなさああああい……！だからせめて
そのかつて無いほどの殺気を止めて下さい……！！

「だったらとつと第三者視点なんか止める……！！」

はい分かりました……！！

（fromトリモト）

ふう、やっと元の感じに戻ったな。さっきのはちょっと俺のキャラ
が変わってしまった。

まあ、作者があまりにもダメだったからな。それじゃあゴミ処分だ

「それじゃあ作者。喰らえ！お前が感想欄で何回も喰らった『スペース・レーザー』！！！」

スペース・レーザーとは山上財閥の人工衛星から発射される巨大レーザーを相手にぶつける技だ。ちなみに俺が言うだけで発動するが、本編では一ヶ月に一度しか放てないという弱点を持つ

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ！」

「！！！！！」

「悪は滅した」

さて、次は俺が叫んでもまるで聞こえなかった様子の二人だ。どうしようか？殺気はまるで効かないだろうし、…今度遊鬼に何か技でも教えてもらおうか？いや、そんな暇ないか

「美緒の部屋」

↳ from ライト

ふう、やっと掃除終わった

「うーん、サハカナアを手に入れた、ダークマター納豆との最終決戦、うーん、倒した。……………おはよー」

「おはよう、美緒。掃除終わったよ」

「わかった〜」

コンコン

おっと美緒が起きたと思ったらドアノックが

ガチャ

「入るわよ」

入って来たのは、空香と真遊と白羅の三人。

「どうしたの？」

「実はトモにこれを運ぶように頼まれたんだけど、どこに運べばいいのかわからなくて困っているのよ」

「あ、ここにテレポート装置がある。押しちゃえ！」

ポチッ

「え？美緒？テレポート装置付きだったの？…私たちの苦労って一体…」

ギューイイイイ

〔天信山〕

〜frontリモ〜

ヒュウウウウウ

「この音は何だ？」

「上を見てください鳥本様」

上を見ると、空香たちに運ぶように言っておいたアレが落ちてきている。

こりゃあ、俺たち潰れるな

『…交代』

《ヒヤハハハハ！アドル発射！！》

「止める！！！！！！」

俺は死乃がアドルを発射しようとしたところをリモコンで止める。アレが爆発したら地球が滅びる。横に避ければ潰されずに済むが、落下の衝撃で爆発して地球滅亡するな。人間死ぬ時になるとやけに冷静になると聞いたが本当だったな

「とりゃ、パワパワ発動！」

おっと、いっしょに落ちてきているのは真遊に空香、白羅になぜか来斗に美緒だ。

美緒が発明箱からテレビのリモコンらしき物を取り出してスイッチを押した

ギユイイイイ

「…何だこれは!？」

今のは真遊の声だ

真遊の靴の裏からジェット噴射が出た。うん、まるっきりサイボーグ

「今ので、一時的にそのジェット噴射と100万馬力の力と良い人が悪い人が判断できる能力が身に付いた……はず」

アトムか!？あと美緒、せめて断言しろよ

「いつの間に取り付けていたんだ!？まあ、今は逆にありがたいけど」

真遊はその後落ちてきている奴らを全員救ってアレを下から持ち上げゆっくりと下に下ろした

「で、今回のオチは？」

「え、オチか?……よし」

「それって何？」

〔雷塊・極〕

「金花判!」

ドカアアアアーン!!!!

「地球滅亡の危機はまだ続いているという事だ」

「……なるほど」

第十話

地球滅亡寸前!? (後書き)

鳥本「おい、作者。今回の話はまだ続くのかよ？」

そうです。神技さんのキャラが出てくる地球滅亡シリーズは次回ぐらいで終わると思います。

鳥本「相変わらず無計画だな。」

それを言うな。

鳥本「それに陽子がちょっと弱いように感じるんだが。」

まあ、作者特権でいくらか力を制限しているとお思いになってください。

あと、キャラ募集企画受け付け中です。どしどし送ってきて下さい。待っています。

あと、神技さん、勝手に技を作っちゃってしまい申し訳ありませんでした
ああああああ!!!

第十一話

地球滅亡ストップ!?でも…(前書き)

今回は新キャラが出ます。

第十一話 地球滅亡ストップ!?でも…

（fromトリモト）

トモだ、まだ陽子と梨恵の戦いは続いている。

「えんきゅう炎球！」

「雷塊」

二人ともはるか上空の方で戦っているみたいだ。…そろそろ空香たち_ちに運ばせたアレの出番だな。

「準備終わったよー。」

「珍しく空気を読めたな。美緒、すぐにエネルギーをチャージしろ。」

「はい。」

なんとかエネルギーがチャージ完了するまでに地球が滅亡しなければいいがな。うん、なんかまるでシリアス編みたいだな。

「トモー。『ラッキー?Orアンラッキー?制限時間は15分、ギリギリ地球ドッカーンルービックキューブ』のエネルギーチャージ完了したよー。」

「何だその名前!?!やっぱコメディイなのか?それに俺はこんなも

のを作れと言った覚えは無い。」

出てきたのは普通？のルービックキューブ。

「え？私も作った覚えは…たぶん無かったようなあったような…」

「ってオイ！ダメだろ！」

そもそも空香たちに運ばせた物はどこにある？」

「ええつと…そこら辺。」

「って荒野以外何も見えないぞ。」

「…てへつ。実はパワパワを使った真遊のエネルギーが限度を越えていて危険だったからアレを持って地球一週させているの。」

「…てへつで済むかああああああああああ！！！！！！！！！！」

どうしろつて言うんだ？あの『ストッパー』が無いと地球滅亡するかも知れないんだぞ！！！！」

「えっ、そうだったの？」

「だから状況判断ができるようになれ！！！！一体どうするつもりだ！？」

「ええつと、…あのルービックキューブを完成させる？」

「ほう、あのルービックキューブを完成させると何がおきるんだ？
(気絶しないようギリギリの殺気を放つ)」

「何か良いことが起きそうな気がする。（全く殺気を感じて無い）」

「何かって何だーっ！！！！しかも気がよ、オイ！ダメだろ！」

作者「大丈夫だ。そのルービックキューブを完成させれば陽子たちは止まる。」

「本当か！？まあ今はほかに出来ることも無いしルービックキューブを完成させるしか無いな。俺にやらせてみる！」

「はいこれ。最初に手を付けてから15分以内に完成させないと地球ドツカーンだから。」

なぜに『なんだ？と言うツツコミは置いて、目の前に出されたのは…10×10×10？普通は3×3×3のはずだろ？最高でも5×5×5までだったよな？でもこれは10×10×10のルービックキューブだ。ルービックというものは数が多いほど難易度が上がっていく。ちなみに俺は一回もルービックをやったことが無いからな……俺がやるには危険性が高すぎる

「…無理だ」

誰か他に出来そうなやつは…美緒は問題外、数学の点数はいいが本質的に馬鹿だから、アークはルービックキューブというもの自体を知らない。

だったら………！！

「緑、これを15分以内に完成しろ！」

「はい分かりました、鳥本様」

とりあえず緑に任せた。緑はパズルゲームが意外と得意だったりするからな。

ガチャガチャ

「…すみません。鳥本様、その命令は実行出来そうにありません」
「…って緑でも無理なのか？だったら空香は…気絶してるし！？多分落ちるときは恐怖か…」
「…だったら真遊は…いないな。ならば」

「来斗、これを15分以内に完成させる！」

「ごめん、早く核シエルターを掘らないと！」

あわてるな！核シエルター掘っても意味ないだろ。キャラが崩壊してるぞ。
ならば

「白羅！」

「これで合っているんだね？ミル」

「そのとおり」

「これでどうかな？ミル」

「いーんだよ」

「ここはどつやるの？ミル」

「しらない」

「ええい！らちがあかん、しの！」

『……………無理。』

「沈黙長っ！」

【残り時間、8分。】

「って早っ！？いくらなんでも早すぎだろ！！」

《ヒヤハハハハハ！！こんな物破壊しちまえばいいだろ！！喰らえ！！》

「死乃！やめろ！」

ドカアアアアーン！！

リモコン操作でなんとか上空へと軌道を逸らすことが出来た。

それにしても人間というのは不思議なものだ。さっきまではあんなに慌てていたのに今は心が波一つない水面のように穏やかになっている

…冗談だ

（fromサクシャ）

〔上空〕

〔指閃・散^{さん}〕

指閃は梨恵の手前まで来て

〔散〕

陽子の合図と共に散弾する。

「！水球^{すいぎゅう}！」

梨恵は水の球体で全て吸収してさらにそれで攻撃する。そして陽子に当たる

ドカアアアン！！！！

〔雷影^{らいえい}〕

しかしそれは陽子が雷で作った分身。

〔そろそろ終わらすわよ 雷鎖砲^{らいせう}・輪^{りん}〕

「させない。乱炎武^{らんえんぶ}！」

梨恵を囲むようにして現れた雷の鎖とその内側に現れた火の剣、槍、弓、などのあらゆる武器が衝突し相殺した

「やっぱり…強い」

「」

「ならば、全てを焼きつくし灰と帰す、地獄から出でし業火よ『火』
奥義、炎神轟焦撃！！！」

「！赤光」

全てを焼きつくす最強の炎と全てを破滅へと導く禍々しき赤い雷が
衝突する

↳ from トリモト

【残り時間はカップ麺ができるまでの時間かな？】

「って普通に言えよ！しかも疑問文かよ！？」

「……………」

「っていつからいた！？桜」

「…さつきから…」

「さつきからって誰も気づいていなかったのかよ！？（人任せ）
それに出来るってどういふことだ？」

「…」

ガチャガチャガチャンガチヨン

「早っ!?!」

…なかなか凄いな…あっという間にルービックキューブがそろって
いく

「…」

もう完成した、まさか桜にこんな特技があったとは…知らなかった

ピカアアアアアアア!!!!

「!」

ルービックキューブが光りだす。そして上空へと飛び上がった。
つてやけにかっこいいな、ルービックキューブなのに

fromサクシャ

〔上空〕

「相殺?」

「でもこれで終わりよ アースブレイカー」

「！天は全てを覆い被し全てのものに恵みを与えてくれるだろう。
『天』 奥義」

陽子がアースブレイカーを取りだし魔力をこめ、梨恵の周りにはあらゆる『力』が集まっていく。こりゃあ地球終わったな。と思っ
たら

「やったーっ！」

「「え？」」

陽子と梨恵の声がダブる。そりゃそうだ。なんせ急に目の前に現れたルービツクキューブが喋ったのだから。

喋る包丁や鎌はけっこういるが喋るルービツクキューブなんて滅多にいないだろう。あれ？今どこかで『私は包丁ではなああああああ
い！！！』と言う声が聞こえてきたような気がするけどまあいいや

「や、やっとこのルービツクキューブから出る日が来た。ありがとう
う神様！って私が神じゃん！」

「…」

「」

二人ともどう言っているのか分からないみたいだ。この作者にもど
う言っているのか分かりません。（ぶっちゃけた！？）

ピカンピカンピカンピカンバシユウウウ！！

「！」

「久しぶりの外の空気！」

なんとルービックキューブが光りだして人になった。

外見はまず最初に一言言わせてもらつと小さい。どつからどうみても小学生もしくは中学生ぐらい。髪はオレンジで自身の身長ほどもあるぐらいに長い。瞳の色もオレンジ色でうん、ロリだ。ちなみに作者はロリコンではございません

「誰？」

「はっ！あなたは誰！？また私を封印するつもり！？」

「封印？」

「あ、えっと…私はゲーム神というゲームを司る神んだけど昔とあるゲームで人間に負けてルービックキューブとされて封印されちゃった訳なのよ。全くもう人間って理不尽！」

「とあるゲーム？」

「そうそうそのゲームというのがなんでも無い普通のゲームなんだけどね、『生き残るのはどっち リアル戦争ゲーム』っていうやつなんだけどね」

「」

「…」

封印されて当然！

「ええ！？普通のゲームよ！？」

どこが普通なんだよ！

「このぐらい普通よ！」

だからどこが！？

「普通よ！」

普通じゃない！

「普通よ！」

NOT普通！

「YES普通！」

YES普通！

「YEAH！」

YEAH！

[...]]

「...」

「…誰かツツコンですよ！」

「私はツツコミ役ではない」

「私も」

「…つまんないよ。久しぶりに復活したのに…そうだ！」

何だ？

「ゲームをやるうよ！えっと、ここにいる人数は4人だから」

ちよつと待て。俺も頭数に入っているのか！？俺は作者だぞ！

「このゲーム！『トリッパーレベル6』」

華麗にスルー！？それに何だそのゲーム！？

「トリッパーシリーズのゲームは神のゲームの一つで古の巨人兵を
先に倒したら勝ちというゲームよ」

ゲームスタートと同時にいるか遠い誰も場所を知らない特殊な星に
ワープしてそこで巨人兵と戦うのよ

巨人兵に負けてしまったら巨人兵の中に取り込まれて永遠の苦しみを
味わうことになるわ

レベル6はその中でも最高の難易度で巨人兵の強さは太陽を一撃で
消滅出来るほどよ」

恐ろしい！しかも何で陽子、お前がそれを知っている！？

「気ニシナイ」

オイ!

「それじゃあそろそろゲーム始めよ!」

ちよい待ちやーっ!

「あ そろそろ時間」

え?

「遅くなるから帰らないとね」

お前は子供か!

「空間転位 強制送還」

あ、帰った

「それじゃあゲームスタート!」

やめる!...!それに梨恵はどうした!...!何故か居ないし!...!

ジュイイイイ!...!(ワープした音)

～fromリモテ～

遠すぎて詳細はよくわからないがとりあえずバトルが終了したみた

いだ。しかも陽子は帰ったみたいだ。…ふう、何とかなったな。空香も目覚めたし。真遊も地球一週させられて帰って来たみたいだな

『…私は？』

「忘れられているな。まあ出番が少なかったからな」

『…』

あ、なんかかなり落ち込んでいるな

「空間転位 強制送還」

「出番が少なくても忘れられてはいなかったな」

『……うん』

「それじゃ」

「じゃあね」

「バイバーイ！」

「またお越しください」

「さよならだよね？ミル」

「そのとおり」

「って誰！？私今初めて会ったんだけど」

「私も今初めて会ったんだが」

「（コクリ）」

「一体誰だ？」

「さてここで問題。誰がどの言葉を言っているか当ててみる」

「一体誰に喋ってるのよ？トモ」

「気にするな」

「？」

『……………それじゃあ』

ウイイイイン

「…帰ったな」

「って誰なの？あの女の子は」

「詳しくは感想欄へGO！」

「感想欄って何！？」

「気ニシナイ」

「それパクリ！」

よしゃつといつもの感じが取り戻せてきた

「それにしてもあの魔王の手下は何しに来たんだ？」

「魔王の手下？アーク、お前の目の節穴にツバメが巣を作って卵生んでヒナが孵って巣立ちして行って、幸せの王子の願いを聞いて、最終的には哀れに凍死した死骸と王子の心臓といっしょに燃やされた後の灰から出てきた不死鳥に連れて来られた桃から生まれた赤ん坊に退治された鬼が吐き出した一寸法師につき殺されたいのか？」

「いや、何かそれ色々とおかしいから！」

「そもそも魔王の手下とはどういうことだ？」

「え？あの梨恵さんと戦っていた人は魔王の手下じゃないのか？」

「ほほう、お前からはよく話を聞く必要があるようだな」

俺はものすごい殺気を放つ

こうして最終的には何事もなかったかのようにして終わったのだ
た…約3名を除いて。

「アーク」

アークはどうなったのかは誰も知らない（待てい！）

「フロア」

「ちょっと！私の出番が一切無かったんだけど！どうゆうこと！？」

〔創輝〕

「俺はいつまで吹き飛ばされていたらいんだー！」

その頃

「今度はこっちで勝負」

「いいわよ」

梨恵は陽子たちの世界で戦っていた

第十一話

地球滅亡ストップ!?でも…(後書き)

ギヤアアアアア!!!

鳥本「作者が巨人兵に襲われているから俺が仕切る。さて今回で地球滅亡シリーズは終わりだ。次回はフロアたちが学校へ行くぞ。まあこんなところか、じゃあな。」

追加報告：今回出た新キャラ、ゲーム神はまあ今のところは全く意味不明ですがそういうキャラですので暖かい目で見守っと思ってください。

第十二話

登校前のクイズ大会！（前書き）

ど、どうも巨人兵から必死で逃げてきた正体不明です。

ゲーム神のキャラ紹介は次回あたりに行いますので誠に申し訳ございません。

トモが部屋に入ってきた。

「あ、トモ。一体この子は誰なのか知らない？」

「俺が知るはず無いだろ。お前がさらってきた子供なんて。」

「私はさらってきた覚えなんて無いわよ!？」

「だったらその子は何だ？不潔だな。」

「だから違っつて!」

「人間って意地っ張りだよな。」

「そうだな。」

「って普通こつ言う時は立場が逆なんじゃない？」

「それじゃあ、今度は立場を逆にしてテイク2スタート!!!」

「っってお前いつから起きてたんだ!？」

「いやいやいやいや、トモもさっき、普通に合わせていたよ!？」

「それにしてもお前は誰だ？」

トモの言うお前というのは私のことじゃ無くて、いつの間にか起きていた私の足元で寝ていた女の子。

地面についた黄色い髪…あれ？黄色い髪？確かさっきは白い髪だっ

たわよ？それがどうして今は薄めの黄色い髪なの？

「私はゲーム神！この世の全てのゲームを取り締まる神なの。」

「…ふーん。」

「反応薄いよ！？」

「「もうこんなことには慣れたから。」」

「声はもったよ！？」

「そりゃあまあこんなのは良くあることだからね。」

「そろそろ神あたりが来てもなんらおかしくはなかったからな。」
「本当に慣れってこわいものだね。」

「それよりもどうして空香の部屋で寝てた？」

「それは空間移動の出口がここに定められていて、しかもここについたら久しぶりに体を動かしたせいでねむくなったからなの。」

「久しぶりについてどういうこと？」

「そうそう、私は今まで人間によってルービックキューブにされて封印されていたのよ。まったく人間って自分勝手よね！？」

「そうだな。」

「否定しないの！？」

「ねえ、今日は学校があるんだけどいいの?」

「二時間もあれば終わるだろ。もしも場合は強制終了する予定だ。それじゃあ全員叩き起こせ!」

と言っわけで

「第一回、二時間で終わるゲーム大会スタート!」

展開早っ!?

全員「つてええええええええええええええええええええええええ!?!」

えっと今は私、トモ、真遊、来斗、美緒、創輝、白羅、桜、緑さん、アーク、フロアが集合しました。全員私服です。

∴まだ朝5時なのに。

フロア「何なの!?!いきなり叩き起こして!」

そりゃあ普通はそっよね?

アーク「∴助けて、助けてくれえ∴血が血がああああ!?!溶ける、とけるううううう!?!闇がああああ!?!闇が迫ってくるぞおおお!!!」

∴……ひ、ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

一体何がおきたの!?!キャラが崩壊してる!?!っていうかむしろ狂

つてる!?

緑「鳥本様の命令ですので。(黒い笑み)」

な、なにか危ないこと考えていそう。

桜「…スー。」

目を開けたまま寝てる!?!ごめんね。眠かったよね?

真遊「…うーん、…せめて7時30分まで寝かせてくれ。」

それでもサイボーグなの!?

鳥本「はい、他のやつらはカットしてとっととゲーム始めるぞ。」

「ちょっと酷くない?」

「さて、今お前らのいる場所は地下に用意した特別スタジオだ。今からここでとあるゲームを始めるぞ。そのゲームの内容は俺も知らない…はずだ。」

「はず!?!」

つていつの間にか地下がバラエティー番組のスタジオらしきものに変えられている!?!

「ゲームは私が今から出すよ!」

「誰だ!?!」

「ってどこから現れたの!？」

…あれ?それに髪の色は今度はオレンジ?どついつつことなの?」

「私はゲーム神よ!髪の色は私のテンションによってかわるよ!
以下略)」

「…ふーん。」

「またもや同じような反応なの!？」

「さて、さっそくだがゲームを出して貰うぞ。」

「今回のゲームはこれ!『THEクイズ』!今からクイズが出されていくからそれに答えてよ!」

「ってそのまんま!？」

「今回は早押しクイズだ。手元にあるボタンを押してくれ。あと創輝、ここに用意したステージに乗れ。断ったら…分かっているよな?」

「…はい。」

立場弱っ!?

そして影薄は用意されたステージの上に乗る。

ヒュッ

「え?消えた?」

第十二話

登校前のクイズ大会！（後書き）

鳥本「なあ。」

何だ？鳥本。

鳥本「梨恵はどうした？」

…まだ向こうの世界で戦ってる。

鳥本「なるほどな。それにしても今回の話はテンション高いな。」

…ゲーム神の影響か。

鳥本「そうみたいだな。」

それでは。

鳥本「急に終わった!？」

第十三話

クイズ大会はぐだぐだで…（前書き）

今回は色々ごめんなさい。

第十三話

クイズ大会はぐだぐだで…

（fromソラカ）

「落ちるのは誰か！？受験に役立つクイズ大会スタート！

どうも司会のゲーム神です！

…司会者口調って難しいのでこれからは元の口調に戻るよ！」

「受験に役立つってどういうこと！？もうシーズン過ぎたよ！？」

「クイズ大会のルール説明よ！今回は早押しクイズ！次々に出題されていく問題に手元にあるボタンを押してから答えていってください！

もし間違えたら罰ゲーム！パラシユート無しのスカイダイビングを学校の真上からやっていただきます！

また各問題ごとに一分の制限時間を設けていきます！もし制限時間内に正解が言われなかったのならば全員罰ゲームよ！

また最終問題が終わるまでに一問も答えられなかった人も罰ゲーム！さらに問題が出されてからは回答権を手に入れるまでは喋ってはいけないよ！

さて今回はどんな展開になると予測するの！？製作委員長の正体不明！」

作者「今回はですね、もう全員落ちて終わりでしょうね」

「って何故作者が！？それにどうして」『なの！？楽しんでいるでしょ！？』

「それではあなたはどう思うの？助手の梨恵！」

「あの高さから落ちたら多分この中の2、3人生き残るかどうか…」

「何冷静に分析してる！？って一体いつの間に助手に！？それに落ちるの前提！？」

「大丈夫、あなたたち二人は生き残る可能性があるほうだから。」

「そっという問題！？」

「次は資金提供者の鳥本！」

『資金提供者の鳥本だ。今回は諸事情によりモニター観戦させていただく。』

諸君！頑張ってくれたまえ。』

「はい！長官！」

「長官って誰！？」

「それでは今回はこのメンバーで送るよ！まずは軽く第一問！」

第一問：作者、正体不明の本名を答えなさい。

「全然軽くない！？そもそも正解しちゃ色々ダメでしょ！？」

ピカーン

いかにも眠そうにして、右手には魔方陣？らしきものがある。…誰なの？

皆も分からないみたい。

ってなんか写真の上の方に何か文字がある。ええっと…

【魔法を効率よく使うべし】より。

って許可とってあるの！？さ、作者も顔が青ざめている！？もしかしたら知らなかったの？

『(ニヤツ)(ニヤツ)』

ってトモ絶対仕組んだでしょ！

ええっと他の皆は気付いてないみたい。ここは私が答えないといけないところなの！？

…よし

ピカーン

「はい、来斗さん！」

先に押された！？

「確か…高江　○斗だよ。」

あ、やっぱり伏せ字。

「正解です！解放します。次は第三問！」

うう、一、二問と続いて色々と危ない問題が出たから…やっぱり次

何かさつきから存在を忘れていたアークが笑いながら、梨恵を背後から攻撃してきたけど梨恵は炎でガードした。

空香「一体どういう事なの!？」

フロア「そもそもどうして暴走状態じゃないのに攻撃してくるの!？」

『ああ、昨日ちょっと【ピー】しすぎて今頃になって本能的な防衛反応がでたか。』

ほぼ全員「…(青ざめた顔)」

そうしている間にも二人はバトルを続けていく。

ガキンギシャザクグフドムビグザムガンダム

『後半モビルスーツの名前だぞ。』

それじゃあそろそろ最終問題だから気をつけろよ。

あと梨恵にゲーム神、お前らも実は最初からゲームに参加させているからな。第五問。』

「え!?!それってどういうことなの!?!」

『そのまんまの意味だ。助手なんかいらなし、司会は俺がやる。』

「それは」

「ト&エ ……!?!」『バルド・レイ』!?!」

第十三話

クイズ大会はぐだぐだで…（後書き）

キャラ募集企画受け付け中です。一人何回でも応募してください。
あと次回はついに学校へと行きます。

鳥本「もしくは番外話だろ。」

…そのとうりです。

第十四話

これぞ学校なり！（前書き）

うう、ちよつとスランプ気味だ。

今回は短めです。あと神技さんのところの遊鬼がちよつとだけ出ます。

第十四話

これぞ学校なり！

（fromフロア）

フロアです。今、校長という学校で最も偉い人がいるという部屋に魔法王といっしょにいます。ちなみに魔法王は元に戻りました。それにしてもこの学校は一通り見た感じとても広い
…これから一体何があるんだろう？

「校長！」

「はい、何でしょうか？鳥本様。」

「何で様付けなの！？」

「うるさい！黙っておけ！」

「はい！」

それにしてもどうして？学校で一番偉い人でしょ？

「こいつら、この学校に入学させることになったからな。もし逆らったらお前の一家を末代どころか先祖まで生き地獄を味わうことは分かっているな。」

こゝ、怖すぎ！！！

「はい。分かりました。それに私のような小百姓が鳥本様に背くは

「ずなかるうて」

「いつの時代の人!？」

「それに聞いてないわよ?そんなこと!」

「そつだ!僕たちには使命がある!」

「うるさい黙れ!殺されたいのか?」

「「ごめんなさい!」!」

「分かれればいい。それじゃあ俺は用事があるから校長、後は任せたぞ」

「はい、分かりました。鳥本様」

その後、私たちは制服やら教材やらを受け取った。

「さて、次にこの時間割表です。」

「…ほとんど私たちの知らない教科ばかりなんだけど。数学って何?」

「行けば分かります。」

「物理って何?」

「行けば分かります。」

「英語って何?」

「逝けばわかります」

「テイリオネアって何？」

「逝って下さい」

「ちょっと！さっきから殺意が込もっているんだけど！？」

「永久に逝って下さい」

「何か答えなさいよ！」

「逝って下さい。そしてもう二度と帰って来ないで下さい」

「ちょっと！……！」

「逝って下さい。そして地獄に落ちて下さい」

「さっきからどんどん酷くなっていくんだけど！？」

「奈落の底までの落とし穴まで自分から進んで逝って、末代まで笑われて下さい。」

「……「じゅんなんせい」」

「奈落無明の地獄の底を通り過ぎて誰も逝ったことの無いような地獄まで先祖と末代、血の繋がりがあるものとその知り合いたちを全て連れてから逝って下さい」

「ごめんなさあああああああああああああああああ
！！！！だから表情を何一つ変えないでそんな恐ろしい事を言うの
は止めて下さい！！！！」

（from トリモト）

鳥本だ。今俺は教室のドアの前フロアとアークといっしょにいる。

それじゃあ入れ！！」

「それじゃあお前ら、入るぞ。」

「…はい。」

二人ともかなり疲れているようだな。
俺たちはドアを開けて中に入る。

「うわあ、可愛い！！」

「イケメンだと！？男の敵め！！」

「好き！！！！」

「もう食べてしまいたい！！！！」

等とやかましい多分二度と登場しないであろうクラスメイトA、B、
C、Dの声がとぶなか、俺はとっとと席に着く。

一通り周りを見てみるとどうやらこのクラスの大半の女子の視線が

アークに向いてるようだ。

「お前ら！！自己紹介しろ！！ちなみに俺は神技のところから特別出演の臨時教師の殺破刺遊鬼だ！！夜露死苦！！」

「つてもしかしたら他作のキャラ!？」

「そこら辺は気にすんな!!」

「俺が今日限定で認めてやったんだから気にするな。」

「ええ!?!」

「早く自己紹介をしやがれ!!」

「は、はい分かりました。私の名前はフロア・ムーン。それでこっちが魔法王。」

「ちょっと待て！僕のは決して魔法王という名前ではない!!!!アーク・ジラフだああああああ!!!!」

「それじゃあ次は質問だぜ!!」

と遊鬼が言ったところでクラスメイトEが

「二人は知り合いのようですがつき合っているんですか？」

…と言ったとき、女子からとてつもない殺気が放たれた瞬間クラスメイトEはどこかに消え去った（連れていかれた）。

…一応冥福を祈っておこう。

「…さて、次の質問だぜ！！」

「どこから来たんですか？」

「もしかしたらハーフ？」

「誕生日は？」

「趣味は何？」

…つまんないありきたりな質問だな。

「面白く無い発言をした奴には鉄槌が下るぜ！！」

遊鬼の発言と同時に教室が静まりかえる。

…遊鬼、ナイスだ。

〔その後〕

「ふう、今日は大変だったわ。…あの教師があんな発言した後誰も質問しないとききなりテイリオネアというゲームを始めたりするし、終わったらいきなり帰っちゃうし。」

「そつえばお前ら、部活はどうするんだ？」

「部活って何？」

「…はあ。部活というのはな（超略）だ。」

第十四話

これぞ学校なり！（後書き）

キャラ募集企画受付中!!!

第十五話

本を読むにもほどほどに（前書き）

今回は前半コメディー、後半からはジャンルが変わります。

続編か。まあこれも借りておくか。

…他には？

『真・超科学全書』

真？それってどういうことだ？これが本物だということなのか？

『元祖・超科学全書』

一体どれが本物だああああああああああああああああああああ
あああああああ！！！！

…次は？

『これが本物！超科学全書』

…次！

『初版・超科学全書』

…次！

『いえいえこれが本物です。超科学全書』

………

『一体何を言っている？これが本物だというのに。超科学全書』

『何を言っている！こっちが本物だ！』

『死にさらせや！オラー！』

「その頃桜は」

↳ from サクラ

「……………コウモリの羽、カエルの血……」

…桜です。今、自分の部屋で惚れ薬の本を読んでいます。…でもまるで魔女のスープの材料的なものばかりで集めるのが大変そう…
…研究室にだったらあるかも。

という訳で来ました。

「あれえ？どうしたの？桜？」

「……」

美緒が話しかけてきたから私は本の材料が書いてあるページを見せる。

「……この本がどうしたの？桜？」

「……」

…相変わらず鈍い…（人のこと言えるのか？）

「…そっか！それを作ればいいんだよね？分かった！。」

さて、俺は向こうの方に行ってくるぞ。
ああ、こちら辺には気をつけるよ。」

「? 一体どういう意味だ?」

「…『幻惑』『悪戯』『虚空』、まあそこら辺の言葉が一番適当だな。」

「…『幻惑』? 『悪戯』? 『虚空』? 一体それは何…消えた!?」

今僕の目の前にいたはずの鳥本さんが忽然と消え失せた。

「クスクス」

「キャハハ」

周りからどこからともなく笑い声が聞こえてくる。一体、一体これはどういうことだ!?

「その頃」

「トモ、アークがどこに行ったか知らない?」

「俺は知らないぞ。それに空香、何でそんなこと聞く?」

「それが桜が探しているらしいのよ。でも部屋にも図書館にもいないんだって」

「…そうか」

(…まさかあそこに迷い込んだりはしてないだろうな?)

「それじゃあ私フロアにも聞いてみる」

「ああ、そうか」

(もしあそこに迷い込んだりした場合…死んだと同じだぞ。まあそんなこと滅多に無いから大丈夫だろう。

『空白の部屋』にはな)

第十五話

本を読むにもほどほどに（後書き）

次回からシリーズ入ります。

鳥本「今回俺の出番が少ないような気がするんだが。」

気にするな。お前は次回も出るから。

鳥本「そうか。それにしてもちょっとベタな感じがするんだが。」

はい、そうです。自分でもベタな感じはしますが。こんな駄目な作者を見捨てないで下さいまし。それでは。

第十六話

進みはじめる一話(前書き)

今回から話が少しずつ動き出します。シリアス編ちょっと長くなり
そつでごめんなさい。

第十六話 進みはじめる一つの話

↳ from アーク

「…ここはどこだ？」

僕は今真っ白な一直線の通路にいる。

…僕はさっきまで図書館にいたはずだ。

周りの何も無いところから笑い声が聞こえてきた後からの記憶が無い。

…どうなってるんだ？

「『スピルレア』！」

「『！』エーテルシールド』！！！！」

突然背後から複数の槍が飛んできたがガードする。

「『ムーヴ・レッドウォール』！」

「くっ！『ブルーウォール』！」

間髪入れずに迫ってきた炎の壁を水の壁で相殺する。

くっ！僕を攻撃してきているのは誰だ！？姿が見えない。

「『ピル・キャレス』」

「！」

僕の周囲にいくつもの巨大な光球が召喚され僕にレーザー光線を放つてくる。

：おかしい。この魔法は僕のオリジナル魔法でまだ誰にも見せた覚えも無い。それなのにどうして『名前まで』同じなんだ？偶然にしては出来すぎている！

一体この魔法を放ったのは誰なんだ！？

（fromフロア）

フロアです。今は空香に頼まれて魔法王を探しているところです。というわけで

「魔法王知らない？」

「またそれが、空香にも同じこと聞かれたぞ。

俺はどこにいるか知らないからな。…まあ暇だから手伝ってやるか。

「えっ!？」

「一体どうした？」

「いや、そりゃまあまさか鳥本が探すのを手伝ってくれるとは…何か企んでる？」

「だから暇だからって言っただろ。」

「…何か信じられない。」

「『死にたくても死ねない』的なことにしてやるうか？」

「ごめんなさあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああ
にたくても死ねない』って他の小説の名前なんじゃ…」

「そんなこと言っていたら、どんな言葉も言えなくなるぞ。」

「いやいや、でも今『』で区切ってたよね!？」

「それじゃあ俺は図書館付近を探してくるからな。それじゃ。」

「逃げた!？」

…図書館か…あそこは膨大な量の『知識』と『歴史』がある場所だ。
『空白の空間』が発生する確率はかなり高いな。

だが「誰かが人為的に」手を加えない限り、そうそうに発生するものではないはずだ。

さらに言うならばそこへの入り口が現れるのは一瞬も無い間だけ。

しかし一旦入り込んだ後は最後、決して自力で出ることとは出来ないし、外部からそこがどこか分らないから助けることも不可能だ。まあ大丈夫だろうが、用心に越したことは無いし、そもそも『空白の空間』なんてものを知っているのは山上財閥の中でも俺を含めて数人ほどだ。普通だったならそんな空間があるとは思いつかないだろう。

…行方不明と聞いただけで滅多に無いことなのに『空白の空間』なんかを思い浮かばせる俺も十分変だな。

〈fromアーク〉

「『ウインド・ボーム』『サイクロン』」

…二種類の広範囲に影響を及ぼす風魔法を使ったが僕に向けて魔法を放っているやつのはいまだに見えない。

「『ピル・メガ』!!!」

僕は前方からとんできたレーザーをギリギリのタイミングで避ける。未完成だがあの魔法を使うか？いや、失敗すれば取り返しのないことになる。…どうする？

「『バルスレア・カーニバル』」

「何だと!?!」

上空からありとあらゆる武器が大量に落ちてくる。ソード、ジャベリン、アックス、ハンマー、バルバードまでもが。どうする？逃げ場は無い。エーテル・シールドではシールドごと押し潰されるし、エーテル・シールドでももつかどうか…ならば

「『ピル・ジャイロ』!!!」

高速で螺旋状に回転するレーザーを上に向かって放ち、全ての武器をはじき飛ばす。

「そろそろ姿を現せ!この魔法を使った本人!」

「オレはもうここにいる。」

「！」

僕は背後に振り返る。

「…何だと！？お前は一体何者だ！？」

…その姿は…髪の色こそ僕と違って血のように赤いが…『僕』だった。髪形、容姿、背丈、どれをとっても僕とまるっきり『同じ』だった。

「…お前に答える必要は無い。『ゼルスレア』」

「！『ゼルスレア』！」

「…無駄だ。」

「くっ！」

あいつと僕は同じ魔法を放つが…相殺ではなく向こうの魔法に僕の魔法は全く歯が立たない。

僕はなんとかギリギリで避ける。

「『ムーヴ・レッドウォール』」

向こうの攻撃は続く。…くそっ！

（frontリモ）

「…いないな。」

俺は今、このだだっ広い図書館でアークを探している。

…俺はこの図書館の全ての構造を把握しているが何にせよ普通のやつからしてみると広すぎる。これなら迷子になったとしてもおかしくは無いな。

「鳥本様。山上財閥調査部隊からも全く情報は入ってきていないみたいです。」

「分かった。緑、ご苦労だったな。」

…山上財閥調査部隊でも見つからないとなると、残った可能性はここだけだな。

この図書館は山上財閥の中でも最も広い場所の一つだ。一旦迷えば中の構造を把握していないと間違いなくのたれ死ぬな。

しかしこの図書館の構造を把握しているのは図書館館長の蓮也に桜、俺と緑を含めて数えられるくらいしかない。

…仕方がないできるだけ使いたくないが『アレ』を使うか。

「緑、ちよつとここに誰も来ないようにしておけよ。」

「…『アレ』を使うのですね。」

はい。分かりました。鳥本様。」

「…よし、アイズチェンジ瞳変更、タイムアイズ時間眼！」

〈fromアーク〉

「ハアハア、くっ！『ピル・テラス』」

最大級のレーザーが『やつ』に迫る。

「効かん！」

しかし全く効いていない。

今のはピル系最大魔法だった。もう僕のエネルギーは底をついている。生命エネルギーも半分ほど使った。これ以上使うと間違いなく死ぬ。今の状態ですらもう命の保障など一切無い。

…だがこいつは今すぐに倒さねばならない、それを本能が告げている。

「そんなぼろぼろの体でなにが出来る？オレは弱ったやつをいたぶる趣味は無い。もう諦めろ。」

「…『クロス・カトル』」

「効かないって言うて…！？何だと？くっ！『クロス・カトル』」

あいつに相殺される。

「…何だ？今の魔法の力は。お前のどこにこんな力が残っていると
いう？」

あいつが何か言っている。しかしうまく聞き取る力も無い。

バタッ

そして僕は倒れた

「……今のは火事場の馬鹿力というやつか。まあいい。お前の体を借りさせてもらう。」

バシッ

「……まだ意識が残っていたか？しかしオレの足を掴んだからってなら状況が変わる訳でも無い。」

「……最後に聞いておきたいことがある。」

「……何だ？最後まで答えを返してやる。」

「……い、一体……お前は……誰……だ？」

「……いいだろうと答えてやる。オレの名前はレルド・サラブ。お前の言っている『魔王』だ。」

僕の意識はそこで途絶えた。

↳ from トリモト

「何だと！？これは……間違いない。何者かによって『空白の空間』が作られている。」

俺は今、タイムアイズ時間眼の能力で時間をさかのぼってこの場所の様子を見て

いる。

それにしてもこれは…よほどの力だ。空白の空間自体を作り替えている。

（一体あれは何なの？鳥本を追ってきたら、なんか瞳の色が翡翠色になっていくし、緑には透明魔法を使っているのに攻撃されるし、一体どういふことなのよ！？）

その頃一人の少女、フロアが鳥本の様子を遠くから見ていた。

第十六話

進みはじめる一つの話（後書き）

魔王レイド登場。名字はアークと同じだった。それが意味することとは！シリアス編は続きます。

第十七話

空白の空間（前書き）

今回はかなり短いです。あとシリアス偏はまだまだ続きます。ちなみに今回は新設定とか盛りだくさんです。それにしても何か最近スランプで書きたいことがうまく書けません。

第十七話 空白の空間

（fromトリモト）

人の『知識』無くして発生し、一つの世界と世界を繋ぐ通路が、な
りかけの段階で止まってしまい、その通路の中に途方も無く広い亜
空間が出来てしまう。それが『空白の空間』だ。

そこには水も空気も光も無い。それらが出来るとはいいくらの
年月をかけても無い。よって入りこんだだけで間違いなく死んで
しまう。

…普通だったらな。

アークはもはや間違いなく『空白の空間』に入り込んだ…だが何か
がおかしい。

タイムアイズ
時間眼で見たところまず最初にアークは何もおきて無いのにうるた
えている。…幻覚か？

次に辺りに白い霧が立ち込めた瞬間にアークが消えた。しかしその
事にアークが気付いた様子ではない。

…どうして白い霧が出てくるんだ？今までの山上財閥がかき集めた
『空白の空間』の情報の中でもこんなことはおきていない

…誰かが細工した以外に考えられないな。この情報から意図的にア
ークを『空白の空間』に連れ込んだと思う方が自然だな…誰だ？ア
ークに恨みを持つ者か？それともアークを利用して俺を狙っている
のか？はたまたその両方か…

「鳥本様。」

「…緑、すぐに帰れると思うが一通りの処理は任せたぞ。」

「はい分かりました鳥本様。すぐに帰ってきて下さいね。あと入り口はもう開いておきました。」

「ああ、気が利くな。それじゃあ行ってくる。」

俺は『常人には見ることが出来ない』空白の空間への入り口をくぐり抜けた。

(…: どういうこと？鳥本が…消えた！？…: こうなったら)

その後すぐに透明魔法を使ったままのフロアが『空白の空間』への入り口に入っていた。

↳ from サクラ

…: 桜です。今私は…: あの人を探しています…:

「桜。部屋にはいなかったわよ。」

「…: (コクリ)」

…: 空香の方も見つけれなかったみたい…:

「うーん、他にアークが行きそうところって無い？」

「…: 図書館…:」

「それじゃあ今度は図書館に行くわよ。桜。」

「…(コクリ)」

「ここが図書館ね…」

「…(コクリ)」

「…一回も来たこと無いの？」

「それじゃあ入るわよ。」

「…」

私たちは図書館の入り口に入る…すると。

「あれ？ここはどこ？」

「…」

「…私たちは図書館の南入り口からちゃんと入ったはずなのに何故かいきなり東入り口から出ていた…」

「…戻るわよ。」

「…」

…今度は東入り口から入ったはずなのに私たちは西出口から出ていた…どういうことなの？

「鳥本様の命令なので、図書館には入れません。」

図書館の内部にいるメイド長の緑が呟いた。

（fromトリモト）

「…ここが『空白の空間』か…」

俺は『空白の空間』…：白い一直線の通路にいた。

…それにしてもこの情景は何だ？明らかに山上財閥の記録に残されているものとは違うな。

それにここには空気がある。気圧も濃度比率も地球のものとはほとんど変わらないな。

…明らかに山上財閥の記録に残されているものとは違う…空間によって個別差があるのか…いやそれはあり得ないな。やっぱり何者かを作り出しているとしたか考えられん。

ガサッ

ん？何の音だ。

「「「ジイイイガアアアアア！！！！！」」」

突然俺の目の前の地面が盛り上がり、三匹の超巨大なガーゴイルが現れる。

…まあ、ここなら誰も見てないしな。それにしてもこいつらの鳴き声は何だ？…まあいいか。

アイズチェンジメテューサアィズ
「瞳変更、石化眼！」

俺の瞳が灰色になつた瞬間、三匹のガーゴイルは石像と化した。

…この三匹は誰かに操られているということがまるで無いな。

…おおよそもう一つの『繋がる予定だった』次元から来たのだろう。さて、この『空白の空間』の広さは定められていないから歩き回って探していたのではキリが無…

「『ゼルスレア』！！！」

「…そこか。」

突然背後から多数の剣が襲いかかってくるが俺は軽く避け、その内の一本を何も無いはずのところに向けて投げる。

バシッ

そして空中に剣が止まる。

「…何でオレがここにいと分かった？」

「殺気で普通に分かるだろ。このぐらい。」

俺に攻撃してきた本人が姿を現した。

姿形はまるでアークだが髪の色が違うし、アークでは無いな。ちなみに俺がさっき投げた剣はキャッチしたようだ。

「それにお前は誰だ？」

「山上 鳥本。お前は何だ？」

「…オレの名前はレルド・サラブ。魔王だ。」

「そうか魔王か…『空白の空間』を作り出したのも、空間内にこの環境を作り出したのもお前の仕業だな。あともう一つ聞きたいことがある。

…アークをどうした？」

「…魔法王なら…消した。」

「ほう？…『どこへ』だ？」

「…まさかそこまで感づかれているとはな…
とにかく『この世界』にはいない。」

「成る程…それじゃあお前以外だれも見えていないのなら俺もちょっと本気が出せるな。」

「オレと戦うつもりか？『魔王』だぞ。

かかってこい。圧倒的な実力差を見せつけて、ちよつと強いだけの一般人がおれに勝てるはずが無いことを改めて思い知らせてや…
……………え？」

「残念だな。偽物の魔王が俺に勝てるはずが無いだろ。」

と俺が言った瞬間に相手の右手が粉碎し肉片と化した。

やつは何がおきているのか理解出来てないもよう。
そりゃそうか、今のはちよつと強いだけのやつにはとても見ることも不可能な攻撃だったからな。

「く、くそが。一体何がおきた!? オレの腕が腕がああああああああああああああああ!!! それに偽者だど!? ふざけるな! オレは正真正銘の魔王だ!」

「その腕を破壊したのは俺だ。圧倒的な実力差を理解しろ。
それに魔『王』を名乗るのは勝手だ、しかしお前は『真の王』リザルトキングでは無い。」

「何だと!? お前がオレの腕を、それに真の王とは一体…」リザルトキング

「お前に答える必要は無い!」

次の瞬間あいつの左手を粉碎した。

(…何を言っているの? それに魔法王と姿が似ているあいつは誰?)

その頃二人の様子を遠巻きに見ていたフロアはそう思っていた。

第十七話

空白の空間（後書き）

ぶっちやけ鳥本が本気を出せば梨恵よりもはるかに強いです。
さらに緑だつて謎の力をもっています。

他にも「えっ！？あのキャラが…」的な展開はありますが見
捨てないで下さいね。

第十八話

真の王（リザルトキング）（前書き）

まだシリアス編は続きます。

…しかし今回ちょっとだけコメディーが戻ってきます。

ただし、お前が死人になったあとでな！『リバーズ』『ダークジュネライト』！」

レルドの切り口が一瞬で消え、両手が再生した後、やつは漆黒の鎧を身にまとった。

「殺す、殺してやる！」

…やっぱりこいつは馬鹿だな。これだけの実力差を見せつけられてもまだ戦いを挑むとは。

…やれやれ

～fromリエ～

「かなり強い力が…一つ…」

私は近くにあるように遠くにあるようではつきりと分らないが、とにかく強い力を全身に感じていた。

「天の行進、天昇脚！てんしやうしやく」

この方向は…図書館！」

…私は力がある方向に向かって一直線に走り出した。
そう、図書館へと。

～fromトリエ～

「舐めるなあああああああああああ！！！！」
「ダーク・ゼル
スレア」！！」

アイスチエンジ ホーリーアイズ
「瞳変更、聖眼！」

漆黒の剣を俺は聖なる眼によって相殺する。

「くそがあああああああああああああああああああ！！！！」
さつきからあいつがいくら攻撃しても何一つ俺にダメージを与えて
はない。

「だからもう一度、一字一句変えずに言ってやろうか？
俺とお前とは実力差がありすぎる。どうせお前は勝つどころか逃
げることも出来ない。アークをどこにやったのか答えたら、最低限
のことは保証してやるから、とつとと白状しろ！」

「うるさい！うるさあああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
！！」
『インパクト・ジヤネスト』！！」

ウオオオオオン

何だ？今の音波は…成る程、破壊の音波か。

「うるさいのはお前だ！」

破壊の音波が消滅する。

「くつ！『ダレス・パレル』『サイル・ピル』『ガイア・ソフラス』
！！！」

前方から無数の極太レーザーと黒い立方体と流星群がとんでくるが俺は右手を振るだけで消滅した。

（はあ、はあ…オレは魔王のはずなのに、なぜこんなただの人間に負けている？魔王だぞ！オレは魔王…なのか？）

「もう終わりか？」

そもそもお前なんていなくてもアーク一人探すのなんて、簡単なことだがお前に最後のチャンスを与えてやろう。命は助けてやるから情報を提供しろ。

…それとももしかしたら逆に俺に聞きたいことでもあるのか？答えられる限りのことなら3つまで質問を許してやろう。」

「はあ、はあ……………真の王とは何だ？教える！」

「真の王のことか。
…真の王。」

簡単に言っと。全てを統括し、全てを従える。それほどの力と知識を持った者の血筋を受け継ぐ者のことだ。

何も人間に限ったことでは無い、微生物から神、実際には存在しないかもしれない生物まで幅広く真の王は存在する。それらの者は冥王、海王、帝王、という感じに称号を持ち、それに合った能力を持つ。次の質問は？」

「…お前は…人間なのか？」

「ああ、俺は真正正銘の人間だ。能力を使わなければただの一般人、

雑魚だ。それに能力を使っても肉体は一般人だ。」

「成る程……」

「今さら俺に不意打ちをくらわそうとしても無駄だ。」

「くっ」

右手に魔力をためているのが見え見えだ。

「さて、もうそろそろアークの居場所を答えてもらおうか。それともまだ俺に聞きたいこともあるのか？」

「……………お前は何故知り合ってからまだたった数週間のやつに
対してこの世界に来てまで探そうとする。」

「…その質問の解答は至って簡単だ。」

「その答えは何だ！」

「…面白く無いからだ。」

「…面白く、無い……？」

「…パズルってな、どれか一つでも欠けてしまうと、もう二度と完成することは無い。」

例え新しいピースを代わりにはめたとしても、決して元には戻らないんだ。

それと同じ。誰か一人でも消えてしまったら、少なくとも面白くは無い。

…つまらない理由だろ？だがお前にもそんなときがあつたはずだ！」

「…何だと！？何を根拠にそんなこと言える！？？」

「さっきのお前が攻撃している間に読心瞳スコープアイズでお前の心の中を覗かせてもらった。」

「！『ガイ』もうおそい。「くそっ！この鎖は何だ！」

レルドが鎖によって両手両足を封じられた。

「お前はもうすでに俺の罠にかかっている！」

「な、何だと！？？」

「お前は俺の瞳変更アイズチェンジ、催眠眼マナーサアイズによって幻覚を見ている。」

「これが幻覚だと？？」

「そつだ。もうお前の自由は奪われた。」

そして周りの殺風景な白だけの景色が農村の風景へと変わる。

「これは何だ！？…いや、どこかで見たとような…」

「そりゃそつだろ。なんせここはお前の過去の記憶の中を忠実に再現しているからな。これからお前の記憶を俺が直接見せてやる。」

「止める！止めるおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお！…！！！！！！」

くっろおびんぼうし

ボガアアアアアン

「！」

私は今、鳥本様の命令により図書館に誰も入れないようにしていたところですよ。

そうしていたらいきなり壁が崩壊してそこから出てきたのは……

「通せ。」

色々やる気じゃなくてむしろ殺る気満々の梨恵様でした。

……どうでしょう？ 私は戦うのは苦手だし、鳥本様の命令にはほぼ絶対だし戦う他無いですよ。

「……」
「……」
「……」
「……」

「ちょっと待って下さい。梨恵様。」

「どうした？ もし私の邪魔をしたら……」

「思いつかないんですね。」

「五月蠅い……」

あ、ちょっと怒らせてしまいましたね。
まあいいです。怒らせておいた方が動きも単調で楽ですし。

「炎球！」
えんきゅう

つていきなり攻撃ですか。火の球がとんできました。

「……時空の繋ぎ目。」
ワームホール

…とりあえず梨恵様の攻撃は別世界に送るのが精一杯です。
あ、出来れば遊鬼様等がいる世界に送ればいいですね。他の人達
には迷惑では無いし。

…これから梨恵様の攻撃は全部そこへ送るようにします。

「！」

でも梨恵様は驚いている様子です。

「水花判！」
すいかはん

でもまだ梨恵様の攻撃は続きます。

…はあ、正直めんどくさいです。

第十八話

真の王（リザルトキング）（後書き）

ぶっちゃけレルドと鳥本のほうはほぼ100%シリアスで緑と梨恵のほうはコメディーバトルです。

第十九話

過去そして戦乱（前書き）

うう、コメディーが恋しいよ。

第十九話

過去そして戦乱

（fromミドリ）

緑です。今は梨恵様と戦っている最中でございます…まあ、今は防戦一方何ですけどね。

「水撃すいげき！」

「時空の繋ぎ目発動ワームホール。」

水流が押し寄せてきたので軽く異世界に転送します。ふう、私は時空を操る能力があつて良かったです。

「水撃かげき、火撃きげき、金撃もくげき、木撃どげき、土撃！」

「…何か技名が変ですね。作者のセンスはゼロに近いです。」
そう言いながら私はやはり遊鬼様の屋敷へ梨恵様の放った水と火、木、鉄、土の流れを送りました。

「これなら！」

天の解放、天昇閃地空！！！」

「つてもう『天』の技を放たれたのですか！？」

私の周りの地面がもり上がりました。もう梨恵様は邪魔をする私を殺る気ですね。でも

チユドオオオオオオオン!!!

神々しき光がメイド服の切れ端を吹き飛ばし、天井を突き破り、月を消去して（オイ！サイ○ジンの大猿化を止めるなよ！）、ついでに付近を飛んでいた地球にぶつかる予定の彗星にぶつかり軌道が変更されて、地球を制服しようとしたタコ型宇宙人のUFOを貫いて地球の平和が守られたことは誰も知らないことであった。

「でもその技を使うタイミングが少し早いんじゃないでしょうか？」

「！」

私はさっきの攻撃をギリギリのタイミングで避け、梨恵様の背後に周りこみました。

「！火炎」

「遅いですよ。時空の裂け目。」

ジュイイイイイイン

梨恵様の片足が何も無いところに吸い込まれ、そのままひきづり込まれました。

「くっ！ここから出せ！」

「嫌です。」

ふう、何とか梨恵様を時空の裂け目に落とすことによって閉じ込め

ることが出来ました。

〈fromトリモ〉

「お前はかつてはとある国の戦士だった…いや、魔法を使って戦つから魔法戦士とも言つか。」

「…俺にはそんな記憶は無い！」

「…そうか。お前の過去をお前自身に見せてやる。今からお前の見ている風景が動かしはじめてやる。」

「…」

辺りの風景が動き出した。ここは農村だ。そこにとある国の軍隊（中世ヨーロッパ的な）が進行している。

その最前列には馬に乗っている隊長副隊長らしき人物の姿が見えた。

「おい、レルド。」

「…何でありましょうか？隊長殿。」

「オイオイ、隊長殿なんてかしまった言い方止めるよ。俺たち親友だろ？」

「ハハツ、確かに。で何だ？」

「そろそろ宿営の準備に入るぞ。」

「え？まだまだ村までは遠いんじゃないのか？」

「王からの通達だ…一人残らず殺せとな。明け方に奇襲を仕掛けたほうがいいだろ？」

「……………そうか……………」

「全軍止まれ！」

バサッ

隊長らしい男の指示により全軍が一斉に止まり敬礼をした。

「今からここに宿営をはる。即刻準備せよ！」

「了解！」

(その後)

空は暗く、夜になった。兵士たちは今酒宴をやっているようだ。

「…なあ、隊長殿。」

「隊長殿じゃなくて、俺の名前はサイロ・ファイロイア＝ワルドレアリアルクル・スークレアハイドレイン・デュアルシュワイツゼロルト＝サクリファイスだ。いい加減に覚えるよ。」

倒的に強いのに焦っていたせいか、閉じ込めることに成功しました。そういえばさつきから梨恵様の声が聞こえませんか？どうしたのでしょうか？

私は良く耳を澄ましてみました。

「…朝は太陽が全てを照らし夜は月の光が暗闇に降り注ぐ。その光を返しきらめく純白の刀よ、今我に力を与え、全てのものを天の色に染まりし」

えっと、何と言うか危険な予感がぶんぶんします。まるで会社でいう部長が部下の〇と不倫して、それが部長の妻にバレたときのような。（分かりにくっ！）

あ、ちなみに私はそんなことしていませんからね。まだ二十歳です。（マジかよ。）

嘘ではありませんよ。本当に二十歳ですからね。結婚もまだです。それに不倫するとしたらもっと上手くやりますよ。（結局ダメだろ）

グオオオオオオンドカアアアアアン！！！！

「降臨、『白神』！！！！」

「！！」

そこには純白の真つ白な刃の日本刀を手に持った梨恵がいた。

あ、そんなくだらないことを思っているうちに空間が破壊されまじた。

…一旦閉じ込められたら絶対に中からは破壊出来ない仕組みになっていますし、外からは空間を操る能力が無い限りなんらかの干渉することすら不可能ですのに…どうやったのでしょうか？

ちなみに

(ここは本来梨恵がすごくカッコイイ場面のはずなのに緑のせい
緊張感台無し。)

というのは作者の思考である。

〜fromトリモト〜

「とりあえず話は続けるぞ。」

今は宿営地での酒宴の後半、ほとんどの者たちは酒によって眠りに
ついている。

「なあ隊長殿、何かがおかしく感じないか？」

「…ん？なにがだ？レルド。」

どうやらこの二人も大量に酒を飲んだようで酔っぱらっている。

「王の命令のことだ。」

「…ああ。」

「つくづく思うが何ゆえ同盟国のレミリル王国を倒す必要があった

のか？」

「…」

「さらに言つならどつしてここまで執拗に残党狩りをする必要があるのか？」

「…」

「これから俺たちが攻撃するハイサ村だつて何一つ問題等は無い平和な農村かときいたぞ。それなのにたった一人の残党が紛れ込んだ可能性があるというだけで村を皆殺しにした後に焼き払えなんてやりすぎかと思わないか？隊長殿。」

「…さあね。上の考えていることなんて俺たちには分からんさ。ただ俺たちは命令に忠実に従い死なないように精一杯頑張っていくだけさ。」

「…本当にそういうものなのか？」

「そういうものだ。」

「…そうか。」

「さて、明日は早いからそろそろ寝るぜ？」

「ああ、分かった。」

そして二人も眠りについた。

(明け方)

「今から我らは奇襲を仕掛ける、準備はいいな？」

『オー！！！！』

パチパチパチパチ

村の様子は正に地獄絵図。血と炎の赤に染まっている。兵士たちの足元にはまるでボロキレのような服を着た首無し死体とボールのよいな首がゴロゴロと転がり、また逃げまどっている人々の恐怖の悲鳴と断末魔の叫びが響き渡る。辺りには血の匂いしかない。

「…戦争とは悲しいものだな。」

「…隊長殿、もはやこれは戦争というレベルでは無い。ただの虐殺だ！俺たちはこんなことをするために戦士になったのではない！」

「レルド、落ち着け。」

「…というのも無理な話か。」

「…何故、何故俺たちはこんなことをしなくてはならない！俺は、俺は母国を守るために戦士になった！だが…だが、この有り様は何だ！？ただの人殺しじゃないか！何が『守る』だ？何一つ守るどころかまるで逆じゃないか！」

…王の様子が変わったのは三年前、人が替わられたように急変した。今までやってきた平和友好政策は何だったのか、独裁者になりはじめた。

…そう、まるで人類を滅ぼそうとしているかのように！」

「…それ以上言うのはやめとけ。悲しくなるだけだ。」

「でも…」

「でもが何だ！所詮俺たちは1戦士、それだけの力等たかが知れているだろ！」

「…くそっ！くそおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお！…！」

「…ほら、行くぞ。」

「…ああ……。」

ガラガラガラガラ

「！」

二人が歩き出したとき、隣の瓦礫が崩れ、美しい青髪で身体中が泥だらけの女性が姿を現した。

「…助けて、助けて下さい！命だけは！」

女の顔は恐怖でひきつっていた。

第十九話

過去そして戦乱（後書き）

更新遅れてごめんなさい。

第二十話 激突！（前書き）

今回はちょっと短めです。あとキャラ人気投票を開催します。リンクだけでなく感想欄にも、メッセーじでもいいです。

ぶっちゃけ新キャラがまだどんどん増える予定なので常識の範囲内ならいくらでも投票してよろしいですのでよろしくお願いします。

第二十話 激突！

（fromミドリ）

そこには純白の刃を持つ日本刀を構えた梨恵様がありました。
…時空の裂け目から自力で戻るには私と同じような能力をもつ人が、
それとも爆発的なエネルギーで力ずくで出るしか方法はありませ
ね。ともなるとやはり後者の方ですね。

「…その刀は何でしょうか？梨恵様。」

「この刀の名前は『白神』^{しろかみ}。この刀の能力は…今から見せる。」

「成る程。そうですね。」

ヒュッ

そう言った瞬間に梨恵様が目にも止まらない速さで私の目の前に移
動してきて

「白神よ、紅く染まれ。」

なにやら白神が紅く染まった瞬間私に斬りかかってきました。

「くっ！時空の歪み！」

それを私は直前で無理やり時空を歪ませて剣を斜め後ろに反らして
回避しました。

…が

ぼおっ

「！」

反らした剣の一直線上にあった本が燃え…いや、溶けました。

「ならば、火極斬^{かきごくざん}！」

今度はさらに白神が紅くなり、まるでマグマを凝縮したものみたいな色に変わりました。

…何やらすごく危ないような気がするんですけど。

「喰らえ！」

シュッ

私は間一髪というか紙一重の差で避けましたが…白神は勢い余って地面を切ったはずなのに全く音を出しません。他の音はちゃんと聞こえているのに…まさか！

「…成る程、梨恵様。今ので白神の能力を暴きましたよ。」

「！」

…それは何だ？」

「白神の能力、すなはちそれは実に単純かつ強力。そう、あなたの持っているエネルギーの凝縮です。極限まで白神にエネルギーを集め凝縮することによって一点のみに集中して攻撃するのです。」

例えば今のは火の技のエネルギーを凝縮させることによってものを一瞬で蒸発したのですね。」

「…とりあえず正解。でも白神の能力はこれだけでは無い！」

「そ、そうですか。ならこっちもそれなりの対応はします。」

…白神の能力はそれだけでは無いのですね…

こちらはちよつと本気以上の力を出さないとまずいですね…どうしましょうか？

「…はあ…使いたくなかったのですがゆるしかありませんね。…ブラックホール、発動！」

私は右の手のひらの上に空間を凝縮させることによってできた巨大ブラックホールを生み出します。

辺りの本や木片がすごい勢いで吸い込まれてます。

それとどうじに梨恵様は白神を地面に突き刺しました。

「白神！」

そして突き刺した白神は図書館の床を突き破り、地面に刺さりました。

そうすると辺りの地面が白い光を放ちだし、放射状に地面の色が抜けていくように白くなっていきます。

さらに地面だけでなく、梨恵様の周りがあるありとあらゆる色が白くなつていき、白神の色が最終的には黒くなりました。

…これはもしかしたら、白神が全ての色を吸収しているんですか！？

「白神第二の能力、それは色をエネルギーに変える！」

喰らえ！『天』奥義、天神五法撃てんしんごほうげき！！！！！！！」

「くっ！ラスト・ブラックホール！！！！！！」

梨恵様が目にも止まらない速さで刀を振ると、火、水、金、木、土、というエネルギーを持った五つの斬撃が 型の頂点になるように私目掛けて超速度で飛んできました。

…

それに対抗して、私は巨大ブラックホールをそれにぶつけます。

…正直勝てる自信は全くありません。しかし何としてでも止めなければいけません。

「くっ…」

しかしこちらのほうが多少負けてます。多分…天神五法撃は梨恵様のもつ技の中でも最大級の奥義ですね。私のブラックホールですら軽く太陽系を滅ぼせるのに…

しかしこのままでは…私の身だけではなく山上財閥が危険です。どうすればどうすれば止められますか？

ピカッ

「！」

…遂に予測していたことが起きましたね…エネルギーが外に漏れだしました…これは…もう私たちでは止められません。

ドカアアアアアア

「な…」

そして、遂に大爆発を引き起こしました。
もう…終わりです。

私は目を静かに閉じました。

ガキッ

…あれ？衝撃波どころか爆風も来ませんね…
私は目を開きました。そうするとブラックホールも天神五法撃も跡形もなく消え去りそこにいたのは

「…何をやっているんだ？緑さんに梨恵。」

「！」

「……………さすが、代々山上家の最強の護衛役をしてきた草橋家…」

そこにいたのは草橋 創輝様。

「梨恵、ちょっと気絶させてもらっせ？」

トン

「っ…」

創輝様はそう言うつと一瞬で梨恵様の後頭部に手刀を当てて気絶させました。

「…何をやってたんだ？緑さん。このままでは山上財閥の裏がぁいつらにバレるところだったぜ？」

梨恵はもう仕方がないから数十分前から今までの記憶を消しておいたが、外にいる気絶させた二人がもう少しで入ってくるころだったぜ？

まあ、緑さんでも梨恵が相手じゃ仕方がなかったかも知れないけどな。

「…そうですね。」

「…それにしても…トモはもう行ったのか？」

「はい、鳥本様はもう行ってしまわれました。」

「…全くもってあいつはここぞというときには自分が山上財閥のトップだということを忘れて先走るクセは変わってないな。」

「…まあ、真の王リザルトキングの能力を『2つとも』解放すれば十分大丈夫だと思うがな。」

「…でも鳥本様の瞳変更アイズチェンジは本来霸王アイズチェンジの能力ではないですからね…あの一般人の状態のままでは瞳変更はそう長くは使ってられないはず。」

「…まあ、大丈夫だろ。」

「……そうですね。」

さて、鳥本様は大丈夫でしょうか？

第二十話 激突！（後書き）

緑VS梨恵、完結！そして次回か次次回でシリーズが完全終了になるはずですので温かく見守って下さい。

第二十一話 真実(前書き)

更新遅れてごめんなさい！シリアス編終わらないでごめんなさい！
ダブルでごめんなさいああああい！！！！

第二十一話 真実

（fromメモリ）

（レルドの過去）

「…助けて…助けて…」

この女の年齢はおおよそ17歳ぐらい。さっきからずっと悲痛に『助けて』と連呼するばかり。

隊長と呼ばれている男が言う。

「…大丈夫だ。安心しろ」

「いや、いや…近寄らないで！」

「…そうか……………」

隊長は困惑しているようだ。

「……………隊長」

「…どうしたレルド？」

「…他の兵士が近づいています」

「何だと!？」

…こいつはどうする?…こいつは例えここを凌げたとしても当ても

無いだろう…！っす助けられないんだったら…！」

「馬鹿なことを言うな！」

「……だったらどつする」

「……………」

そして、過去のレルドはちょっと考えた込んだ後

「…オレと来ないか？」

「…？」

女性は状況が掴めない様子だ

「…ずっと『お前』と呼んでいたんじゃぎこちないな…お前のごことを何と呼べばいい？」

「……クリア……クリア・ファリス……」

「クリアか、いい名前だ」

「…レルド、お前本気か？」

「ああ、本気だ。大本気だとも！体長！この子、クリアはオレが責任をとって預かる！」

「…もし、もしこの子の肉親が生きていてクリアに会いに来るその日まで……」

「そして、クリアとお前はいつしか愛しあうようになり、結婚した。そして…子供も産まれた。お前たちはその子に名前を付けた…そう、アークとな！」

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお！！！！！」

オレが、オレが壊れる！！！！もう、もうそれ以上は話すな！！！！止めろ！！！！！！オレという存在が否定される！！！！！！！！！！」

「思い出せ！レルド！お前にもこんなときがあったことを！そしてこの後起きたことを自らの目で見つめなおせ！
…続けるぞ。お前らが結婚した後、しばらくは平穏な日々が続くがそれはとある日を境にして一変する」

(魔王レルドの過去)

「一体何のご用件でございましょうか？国王様？」

「…アレを見る！」

国王はレルドの後ろを指差す。すると

「！」

「ゲホゲホ…ハア…ハア」

縄で縛られたクリアだった。

「これは一体どういうことですか！？国王！」

「敵国の血筋だ。お前も分かっているだろう？敵国の血筋は完全に滅つさねばならぬことも」

「そつだ、レルド」

…国王の隣から一人の男が出てきた

「…ま、まさか…お前が密告したのか！？隊長！いやサイロ！」

「ふふふ、そつだ。」

だがこのままでは俺の親友であるお前まで死んでしまうだろう？だから国王はチャンスを下さつた」

そう言い終わるとどうじにサイロはレルドのほうへ剣を投げる
レルドはそれをキャッチした。

「その剣でそいつを殺せ！そうすればお前の命は助けてやる！」

そして、クリアはレルドの目の前へと連行された

「……………」

「私を殺して！あなたの命が助かるのだっ たら！」

クリアがそう言いはなつ。

「…」

ズバツ

レルドが剣を振るう

「…？」

しかし切れたのはロープだけ。

「僕には…出来ない」

カラアン

そして、剣がレルドの手から落ちる

「フハハハハハ！女一人殺せないのか！だっ たらお前は死よりも
ひどい苦痛を味わってもらおう」

「！」

するとクリアは落ちた剣を拾いあげ。

「…今まで…本当にありがとございました。そして…」

ズシヤツ

「！」

自らの喉元に剣を突き刺した、そしてあたりに鮮血が飛び散る。

「さ…よな…ら…」

バタッ

そしてクリアは倒れた

「…く、クリア？」

レルドが呼んでもクリアは起き上がらない。

「クリア！クリアあああああ！…！！！」

悲痛な叫びを周りの壁が反射して、こだまする。

「…許さない…許さない！！！！！」

それから辺りは真っ暗になり何も見えず

ズシヤッ！

バキ！

グチャ！

そんな音が聞こえてくるのみであった…

そして、暗黒のエネルギーが高速ドリル回転をしながら俺に迫る。

「馬鹿が」

ドガアアアアアアア！！！

「…アタツタカ？」

「いくら威力が高くて当たらなければ意味がないだろ」

「！イツノマニカハイゴニ…」

「気付くのが遅いぞ、喰らえ、霸王の鉄槌！」

ドカアアアアア

「クツ、カハツ！」

今俺がした攻撃は『ただのパンチ』、破壊力もさして一般人のものと変りない。だが、やつにはそれとは比べ物にならない衝撃が来てるだろう。

俺の攻撃の正体は絶対的なまでの殺気、殺気による恐怖で敵の脳と全身の細胞を狂わせ、その殺気と相応するダメージと脳が勝手に思い込み、そして痛みを与える。また痛みだけではなく全身の細胞までもが勘違いをし、傷や衝撃をも受ける。それが真の王霸王リザルトキングの能力だ。

「…かなり手加減しといてやつが喋れるか？」

「…ああ、今まで俺がしてきたことは何だったんだらうな？」

どうやら正気に戻ったらしい

「…さあな、だがお前がしてきたことは正しい」

「！」

「…どれが正しい行為なのかはそれぞれによって変わる、どれが正しいか定めることなんて、どんな天才でも、どんな権力者でも出来る訳がない。だが、一つだけ言えることがある。

…例えば自分が間違っただことをしていると思っただけでも、自分が今していることが結局正しいということだ」

「……そうか……だったらサイロも国王も正しかったのか……」

「…いや、そうとも言えるし、違うとも言える。」

「…それは…どういう……」

「…あの二人は…偽物だ」

「え？」

その時

パチパチパチパチ

「クスクス、よくそこまで気がついたね、山上財閥のトップ、山上鳥本君」

「！」

俺たちは上空を見上げた。そこにいたのは人間。たった小学生ぐらいの、黒い髪をした顔は中性的で男なのか女なのかよく分からない。そいつが空中に立って拍手をしていた

「…お前は誰だ？」

「…レルド、こいつはきつとお前を影から操っていたやつだ」

「クスクス、さすが山上鳥本君、洞察力や推理力はかなりのものだね。」

「…お前の目的はなんだ？」

「目的？…強いて言うなら命令…かな？」

「命令？」

「クスクス、君なら知っているだろう？」

…『ペンタゴン・ジュネラルキング五星王』様の命令さ」

第二十一話 真実（後書き）

多分：次回で本当にシリアスが終わります。

ただ今誠心誠意執筆中でございますので許して下さい。あと次回は、新キャラを最後にちょっとだけ出す予定です。

第二十二話

負の感情（前書き）

シリアス偏終わりませんでした。ごめんなさい！さらに更新遅れてごめんなさい！その代わりに2話同時更新をします。次の話でシリアスは終わりですので長々と続くシリアスを何とぞよろしく願います。

第二十二話

負の感情

ペンタゴン・ジュネラルキング
「…五星王だと？」

「そうさ、このくらいのこと知ってるよね？」

「…ああ、全てを統率するという目的のために集まった真の王の中リザルトキングでも最上位に位置する五人の総称…」

「クスクス、だいたいはね。」

そこでレルドが口を挟んできた

「お前がオレを操っていたというのか…」

レルドの体は怒りのせいなのか、震えていた

「クスクス、僕はちよつと君の手助けをしてやっただけさ。人類を滅亡させようとしたのも、君の親友であるサイロを信じず裏切ったのも、全部君の意志さ！」

「く…」

「だがサイロに変装したのはお前だろ」

「…クスクス、またもやご名答。でも僕はちよつとレルド君は僕の目的のために利用させてもらった、そしてその代わりに僕はレルド君の目的に手助けしてあげた、単純なギブアンドテイクさ」

「ふざけるな！」

「レルド、あまり大きな声を出すな。傷口が広がる」

「…くそう！」

「…さて、そろそろ本題に入ろうか。まず僕がここにいる目的は何だと思う？」

「…真の王、リザルトキング覇王の力の見極めもしくは抹殺だ」

「クスクス、正解。でも僕の目的は他にもあってね」

「…むしろもう1つの目的のほう为本題だろ？」

「クスクス…よく分かったね…だったらもはやこうやって時間稼ぎをしても意味はない」

「…僕の名前はハイラ、鳥本君、ちょっと殺させてもらおうよ」

「…とってやつは一本の槍…ジャベリンを召還する。」

「…こいつは…強いな。レルドとは段違いの魔力を感じる。」

「…来い」

「…いくよ」

ズバシャアアアア

上空から俺に向けて槍がハイラとともに高速回転しながら落ちてくる。

だが俺はそれを見極め横に避け

「霸王の鉄槌！」

ハイラが地面についた瞬間を狙い攻撃を繰り返す

「おっと」

だが避けられる。

「『ヘルスピア』！」

闇の槍がとんで来るが俺は難なく避ける。

「霸王の領域！」

ズバズバズバズバ

ブシューー！

「！」

ハイラの全身に無数の切り傷ができ、そこから大量の血が吹き出す

「クスクス、さすがにやるね、鳥本君」

しかし、それを何とも思っていないみたいだ。

「クスクス、『ダークネス・オーブ』」

「！くっ」

俺が後ろに下がると同時に目の前に漆黒のカプセルが現れる。
…あともう少しで閉じ込められるところだったな
俺はそのまま相手と離れて距離を取る

「クスクス、逃げるのかい？」

「逃げる？ちがうな

…覇空はくう！」

「！」

ドガアアアアアアア！！！！

ハイラが吹き飛ばされた

「くっ！やるね！今のはどうやったんだい？」

「笑いが消えたぞ。今のはただ単に凝縮した殺気を飛ばしてお前に
当てただけだ」

「そう、さすが殺気の扱い方は完璧だね鳥本君」

「さて、とつとと決めるか」

「それはこっちのセルフさ」

「覇空連はくうれん！」

「『バル・ジャベリン』！」

俺は覇空を連発するが、闇のエネルギーによって相殺される。

「『スピル・デス』！」

ズガガガガガ

ハイラが闇の魔力を纏った槍を持ち突進してきた。

アイズチェンジ ホーリーアイズ
「瞳変更、聖眼！」

「！」

俺は闇の魔力をかき消す。

するとハイラのスピードが急激に落ちた。

「そして覇空！」

「…くっ！」

『アイアン・ウォール』！」

俺が覇空を放つとハイラの前に鋼鉄の壁が出現した

「…だが、効果は無いな」

「くっ！」

鉄の壁をすり抜けて覇空がハイラに当たる

俺の殺気による技は生物以外の物質は全てすり抜けてしまうからだ。

「はあはあ…くっ」

「どうした？ もうばてぎみになってるぞ。」

(…さすが『霸王』の称号を持っているだけあるね…このままでは間に合はない…まあ、まだ手はあるけどね)

「クスクス、交代の時間だよ…ミレル！」

ミレル？ それは誰だ？

ぶわっ！

するとハイラの周りに煙が立ちあがり

「キャハハ！よろしく！ミレルよ」

「！…多重人格のようなものか…」

煙の中から出てきたのは同じく中性的な顔立ちをした、長い金髪をした少女だった。ちなみにさっき俺がつけた傷は全て無い。

「…不味いな…時間は後5分つてところか」

「キャハハ！『アックス・ダレスト』！」

「今度は斧か」

ミレルが斧を召喚し、俺に叩きつける。

…だが

「やはり遅い！」

俺は横に避ける。

「それはどうかな？」

「何だと!？」

すると今度は横からハイラが槍で突く

「くそつ! 覇掌^{はしやう}！」

槍が俺に届く前に二人とも殺気で弾きとばす

「…ふう、なるほど。最初から二人だった訳だな。だが今までは魔法により一人の体を媒体とし、複合していたってとこだな…」

「よく分かったね鳥本君、そうさ」

「私たちは」

「二人で」

「一人よ！」

「…そろそろ俺も本気でいくか」

「キヤハハ! じゃああれを見てよ!」

ミレルが指した方向にあったのは澄色の水晶、それはハイラとミレルのはるか後方に存在した。その中にいたのは

「…アークか！」

傷だらけのアークがとじ込まれていた。どうやら今は眠りについて
いる様子

「クスクス、僕たちと賭をしよう鳥本君。アレは後5分程で覚醒をする。それを君が止められたら君の勝ち、覚醒したら僕たちの勝ち、
これはどう？」

「…話している暇は無いな」

「キャハハ！でもこんな真っ白な風景をバックにして戦うんじゃ味
気ないよね！『フィールドチェンジ』！」

グゴゴゴゴゴゴ

するとまるで瞬間移動したかのように一気に風景が変わる

「…地形を作り替えたのか」

「キャハハ！ここはうつそうとした森の地形！これじゃあ水晶の位
置もみえないよ！」

「クスクス、しかもこの木々は鋼鉄の数百倍は硬いしね」

「…こんな森があっても普通は気配で分かるだろ」

俺は水晶に向けて走り出す

「クスクス、『ブラック・ジャベリアス』」

「キャハハ！『アクシム・ダーク』」

しかしやはり二人は俺の前に立ち塞がる。
闇の魔力を纏う槍と斧が俺に迫る

「覇掌！」

だが俺は一撃で二人を吹き飛ばす

「クスクス、『ピル・ソニック』！」

「キャハハ！『ピル・ソニック』！」

だがすぐに体制を建て直し、超スピードのレーザーを放つ
この速さは起動が予測出来ても俺の体の反応が追い付かん

ズシュ

「つつ！」

一つのレーザーが俺のわき腹を霞めた

「キャハハ！」

「クスクス、一般人の肉体ではとてもこの速度にはすぐに反応しても避けきれないよね？」

「…」

「…ならオレが相手だ！」

急にハイラとミレルの背後に現れたのは…

「…ここは任せたぞ、レルド…」

「レルド君か…何故君が鳥本君に協力を…」

「…これは協力などではない…俺は絶対お前を許さん！『ゼルスレア』…！！！」

「キャハハ！！私にとってはそんなことどうでもいいよ！『ゼルスレア・ガトリング』…！！！」

「クスクス、確かにね。まあとりあえずここは任せたよ、ミレル」

↳ from アーク

…ここはどこだ？

暗い…暗黒の空間だ…一切の光も無い…空気すら無い…だったら僕は何故こんなところにいれる？もしかしたら僕は…死んだのか？確か突然現れた魔王に殺されて…

「ソウダ、オマエハコロサレタノダ」

誰だ！？僕に語り掛けてくるのは…

「オマエハマオウニコロサレタノダ」

うるさい！僕に語り掛けてくるな！

「マオウヲニクイトハオモハナイノカ？」

…魔王？ 憎い？

「ジンルイハマオウニヨリセンメツサレヨウトシテルゾ」

…

「フロアモコロサレタ」

！

…何だと！？

「シンジルカドウカハオマエシダイ…」

…信じたく無い…でも、でも…

「ニクメ、ニクメマオウヲ！」

…魔王…お前だけは僕が絶対に倒す！

「サアイケ！サスレバオマエノチカラトナラン…」

うおおおおおおおおおお！！！！

（fromトリモト）

「…間に合うか！」

俺はとにかく水晶に向けて走っていた…
後おおよそ100mに達したところで

ピカアアアアアアアアア！！！

水晶が光りだし

ぶわあああああ！！！！

「コ…ロ…ス…！」

そして、アークが圧倒的な魔力、どす黒いオーラを放ちながら中から現れた

辺りの木々は根元から折れ、しかもエネルギーを一気に失ったように枯れ、土と化した

「くそっ！間に合わなかったか！？」

「クスクス、どうやらゲームはこっちの勝ちみたいだね」

急に隣からハイラが現れた。

「…ああ、お前らのもう一つの目的、それは『アークの真の王へのリザルトキング」

覚醒』、…前々からやつには真の王リザルトキングになれる素質はあるから感じ
ていたんだが、まさかこれ程の魔力とは…しかもこれは負の感情に
よつての覚醒…お前らの思うツボということか」

「その通り、しかも負の感情によつての覚醒だから、僕らの思うが
ままに操れる…行け！」

「リヨ…ウカ…イ！！！！」『エターナル・ダーク』！！！！」

「」

アークが俺を攻撃を攻撃しようとしたとき

「待ちなさい！魔法王！！！！」

ピクッ

アークの動きが止まる

「！！」

突然アークと俺の間に立った人物、それは

「フロアか…気配は感じていたが何故ここに来た？」

「…トリモト、あんたを追っていたらたどり着いたのよ。状況が良
く掴めないけど、とりあえず魔法王がピンチだということは分かっ
たわ」

「そうか」

「どうしたのさ？アーク君、早くフロア君ごと吹き飛ばしてよ？」

「…リヨウ…カ…」

「待ちなさい！魔法王！」

「…ワカッタ…」

「アーク君、早くしてよ」

「魔法王！」

「…ぐあああああ！…！」

すると突然アークが頭を抱えだした

「どうしたの！？魔法王！」

「…まさか…こんなことが…起きるとは…予想外だよ…」

…まさかとは思いがこれは…

「…うおおおおおおおおおお！…！」

「…これは…自らの負のオーラを真の王リザルトキングの力とともに再度封印するつもりか！？」

「…！…そんなことはさせないよ！負のオーラを強めてやればいいだけの話さ！…」

「させるか！霸王の鉄槌！！！」

「クハッ！！！」

俺の拳がめり込むと同時にハイラが血をはき、そこらにあった木をぶち抜けて倒れた

「うわあああああああ！！！」

「く…アークのほうは不味いな…負のオーラが今でも強すぎる…！」
するとそのとき

バサッ

「…魔法王…落ち着きなさいよ…！」

「！！！！！」

フロアがアークに抱きついた

「落ち着きなさいよ…魔法王！」

「…だから」

アークの唇が動いた

「僕の名前は魔法王ではなあああああい！！！！アークだ！！！！」

「…魔法王！」

フロアの瞳から涙がポトリポトリとこぼれおちる

「この、この馬鹿魔法王！！あんたがいなかったら…私は…私は…」

「…ありがとう、フロア」

アークはフロアを抱き締めた

「…さて、そう浸ってる場合では無いぞ」

「キャハハ！その通り！」

「確かにね…」

そこでハイラが立ち上がり、ミレルがやってきた

「…レルドはどうした」

「キャハハ！死にかけていたから楽にしたよ！」

「！」

「レルド…？魔王のことか！」

「アーク、お前はとりあえず静かにしてろ」

「…？」

「…僕たちの目的は失敗だね…ミレル」

「キャハハ！だったらここにいる全員殺しちゃおうよ！」

「！」

「クスクス、そうだね。行くよ、ミレル」

「キャハハ！全魔力解放！」

奴らは闇のエネルギーを全て放つつもりか

…威力は地球を数個分余裕で消滅できるほどだろう…

「ちっ！アイズチェンジ瞳変更…！」

アイズチェンジ瞳変更を使おうとしたら俺の膝が地面についた

「く、アイズチェンジ瞳変更を使いすぎたな…この肉体のままではさすがに無理があつたか…」

「『ナイトメア・オブザワールド』…！！！」

その瞬間闇の魔力が全解放された

第二十二話

負の感情（後書き）

次回、シリアス編（一時的に）終了！

第二十三話

そして…（前書き）

シリアス編終了！

さらに今回はシリアスとコメディーが入り交じった話です。

…重要な伏線も多少あり

第二十三話

そして…

（fromトリモト）

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!

漆黒の闇のエネルギーが全てを包みこみ、強烈な爆風が起きる。
まるで核爆発の超巨大版みたいだ。

「キャハハ！殺った殺った殺ったあ！」

「クスクス、…」

「何言っているんだ？お前らは」

「！」

「鳥本君…！」

「生憎だがお前らの攻撃は防がせてもらった」

「…どつやって…」

「簡単だろ。あんな規模がでかいだけで中身の詰まってない攻撃なんて、簡単に殺気力で貫ける…まあ、他のやつらは気絶してしまっただけだな」

「クスクス…でもずいぶん疲れてるみたいだね」

「ああ、そうみたいだな…」

さつきは瞳変更を長時間使いすぎた。霸王の能力はまだ使えるんだがな、何にせよ、今はとにかく危険だ。

「キャハハ！だったら殺らせてもらっつよ！」

「…そう簡単に…！」

「キャハハ！だったら『ブラック・ドーム』！」

「！」

「クスクス…」

「く…人質か…」

そう、ミレルは気絶したやつらを黒いドーム状の物質で包み込んだ

「クスクス、そうさ、僕たちの意思で簡単に殺ることが出来る…」

「キャハハ！だったら抵抗はしないでよ！」

「…ああ、分かった」

「クスクス、『ジャベリアス・ムーヴ』」

そしてハイラの手から槍が現れ、

「…はあ…はあ、クスクス、もう何も残ってないね」

「キヤハハ！全て消滅したよ！」

「…なんてことがあると思ったのか？」

「！」

ハイラとミレルがこちらを振り向く

「…君は…誰だい？」

「…見て分からないのか…俺は…」

俺は背中に生えた翼で羽ばたきしながら言う

「俺の名前は…山上鳥本だ」

「馬鹿な！ちゃんと心臓を貫いたはず！」

「馬鹿なのはお前だ。わざと心臓を貫かれてやったのにも気付かないとはな」

「！」

「この姿になるのは一旦死にかけるのが一番手っ取り早い方法。しかもお前らは見事に騙されて人質を念入りに殺さなかったからな」

今の俺の姿は…いわゆる化け物だ。背中からは巨大な血のような紅い翼が生え、瞳は金色に変わった。髪の色は灼熱の太陽みたいな才

レンジに変化した。
はたからみると、美しいとも恐ろしいとも入り交じったふうに見えるだろうな。

「…それは…霸王の力かい？」

「いや違う、これは鳳凰の力をちょっと解放しただけだ」

「…鳳凰？そんなものはデータには一切無い…」

「そりゃそうだろ。なぜなら…」

ブゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「話しても無駄だと知るからだ！」

「！』空白の空間』が崩れていく！」

「お前らはもう恐怖すら感じない」

「！」

「一つの空間すら崩れさるほどの力には、いくら恐怖しても無駄だからだ」

「…クスクス…そんなことがあるはずが…」

「ならば今、全てを知れ」

俺は右手を上空に掲げる

「鳳宝！」
ほうほう

ズドン！！！！！！！！！！

太陽の数倍のエネルギーを持つ火の玉が落ちた

「う、うーん…」

「お、目覚めたな、魔法王」

「…僕の名前は魔法王などでは無くアークだああああ！！！！」

「よし大丈夫みたいだな」

「大丈夫って…あれ？ここはどこですか？」

「今頃気付いたのか、ここは山上財閥病棟だ」

「…そうですか…」

「…すーすー」

「…フロア？」

「ずっとお前のことを診てたんだぞ」

ふと寝息が聞こえ、フロアがアークにすがりこむように寝ていた

「そうか…ありがとうフロア…」

「それにしてもどうしたんだ？お前図書館で倒れていたぞ」

「え？じゃあ魔王は？僕は殺されたはずじゃあ…」

「そんなわけは無いだろ」

よし、何とか記憶は消えているみたいだな。

「…じゃあ、鳥本さんが図書館で僕に言ったことは…」

「何を言っているんだ？俺は今日一度も図書館になんか行ってないぞ」

「あれ？じゃああれは…」

…どういうことだ？この様子から見ると気が動転したわけでも無い

…ともなるとアークの言っていることは本当になるな

…さてや『位置の記憶』か？

「まあ、深く考えるな。」

ドカッ

「グハッ！」

「どうした？アーク」

「そ、そう言っ……き……傷口を殴らないで下さい……」

「大丈夫だ。手加減したからな」

「いや、そういう問題!？」

するし

「……………トモ」

「おっといたのか、氷火^{ひょうび}」

「……………うん」

「で、何のようだ？」

「……………食事持ってきた」

「そうか」

「……………バイトの時間に間に合わないからそれじゃあ」

「じゃあな」

氷火がドアを開けて出ていった

「……………今の無口な人は誰ですか？」

「ああ、気にするな」

「いや、気にしますよ！いきなり知らない人が出てきブゲラ！」

何かしらんがアークの顔面にメロンが飛んできた

「結城のバカバカバカバカ！！！」

「いてっ！ちよつと待てよ！分かった！分かったから俺が悪かったから！友那！だからお見舞い品は投げつけないでくれ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！！！！！」

…何故あいつらがここにいるんだ？まあいいが

ドアが開きっぱなしだな。きつとそこからメロンが飛んできたんだろっ。

「…あれ？僕は一体何を話していたのですか？」

ラッキーなことに何か記憶が消えた

「…占いと納豆との関わりについての話だ」

「どこに共通点が！？過去の僕は一体何を話していた！？」

「いや、自分で自分にツツコムだよ」

「…本当に一体何を話していたんだ…」

「さあな。さて、話は変わるがちよつとお前に聞きたいことがある」

「なんですか？」

「…お前はいつからフロアと一緒にいたんだ？」

「！」

「…何故そんなことを聞くんですか？」

「…ただの推測だが、お前には何か事情があるような気がしてな」

「……話します。」

「…僕はサイロという人によって育てられました…その人はかつて、王国のとある部隊の隊長を務めていたほどの実力者で魔法剣士でした。さらに僕の実の親でもありません。でも僕にとってはちゃんとした父でした…」

「僕がそのことを聞かされたのは僕の15の誕生日のこと。僕の本当の母親の名前はクリアといい、その名前の通りに肌と心はは透き通るようで、綺麗な人だったといいます。」

「僕はその人から僕の育ての父、サイロに直接預けられました…大事に育ててほしいという言葉だけを残して、その人はすぐにまるで幽霊のように消え去っていったと聞きます…また、その日は、魔王が最初に誕生した日でもありました。」

「…その後父は魔王と戦い足に重症を負ったらしいのですが、父はその事について詳しいことを僕に語らず、魔王に会ってみれば分かるという言葉をもらい、旅に出て、僕は世界で唯一魔王を探し当てる事が出来るだろう勇者を探し当てました…がモンスターに襲われているところでした。僕は怒りと憎しみを込めモンスターをなぎ倒し、フロアを助けましたが、その時に見た嬉しいような、また悲しいような、そんな感情が入り交じったあの顔は忘れられず、僕はだんだん怖くなり、自分でもどうやったのかは分かりませんがフロアの頭からその記憶を消去しました…さらにその前の記憶を変えてし

まい今ではもう…こんなふうに…初めから仲間だったかのように…
全てはただの偽りなんです…」

「…そうか…だが俺からも一言言わせてもらおう」

「…?」

「フロアはお前がいなくちゃフロアでは無い。またそれと同様にお
前もフロアがいなくちゃお前では無い

…多少臭いセリフだったか…

まあ、この言葉の意味を考えておけよ。じゃあな」

「…」

俺はドアを開けて出ていく…

「…お前も安静にしとけよ。一応重症なんだからな。『元』魔王、
レルド・サラブ」

すると柱の影から全身に包帯を巻かれたレルドが現れた

「…」

「で、お前はこれからどうするつもりだ？」

「…さあな。まあ、俺はしばらくこの世界にとどまるさ、そしてあ
いつを見守っている。向こうの世界に帰ったらきちんと償うよ」

「…そうか」

「じゃあな」

シューイイイイン

「…消えた…さすが仮にも魔王だな」

「…何故か僕と同じような気配が向こうのほうへ消え去っていった…」

その頃、アークは病室でこう呟いた

（from?）

「…ついに五星王が動き始めたか…」

「それで、私たちはどうするのですか？」

「しばらくは潰しあうのを待つことにする。そしてその間に戦力を蓄える」

「はい、分かりました」

「そういえば、ナンバー6342は回収出来たか？」

「はい、山上財閥の総本山。山上鳥です」

「山上鳥…これまたやっかいなところに…あいつは俺たち『革命者』の最重要情報を抜き出して逃げていきやがった…」

「……………そうですね」

「ああ… ナンバー6342は最初の成功個体だ… そう、全生物の誰もが今までに持ったことの無い全く別の属性を人工的に手に入れた… な」

第二十三話

そして…（後書き）

いやー、ついにシリアス編終わりましたね。本当に自分でもいくら続くのが不安でした。

これからはしばらくはコメディーをやりますが、また十話くらいした後にシリアスに入ると思いますが、何とぞよろしく願います。清き一票をどうか私に

空香「選挙？」

第二十四話

めんどくさいとこじ理由で始まる逃走劇(すぐに終わる)

コメディー復活!

第二十四話

めんどくさいという理由で始まる逃走劇(すぐに終わる)

「fromトリモト」

「この問題は…となるわけだな」

鳥本だ。今俺は学校で普通に授業を聞いている。

…いくら世界最大の超財閥のトップといっても高校生だ。授業に参加しないとまずいだろ。

…それに俺としては『あいつら』のほうが悪介だしながらがらがら

「はあああ、すいません遅れました!!!!!!」

クラスメイトFがドアを開けた。どうやら遅刻したらしい

「理由は何だ!」

「ちょっと目潰し暗黒魔神と戦うためのイメージトレーニングをする」

…何故に?

ふりをしていたらひたすらつまようじのあの持ち手のところにある利用用途の分からない溝の一番下の部分のみを彫る仕事をしていら

…そんな仕事がこの世に存在するのかわ？

「つまようじが手から滑り落ちて、床に刺さったら暗黒魔界への入り口が開いてしまってる」

すごいな！つまようじ！

「それからなんやかんやあって目潰し暗黒魔神を倒したらヒーローと崇められて」

目潰し暗黒魔神を倒すトレーニングをされていてよかったな…そういえばふりだから結局してないのか

「パレード中に転んでつき指して、病院行ったら、テロリスト集団に病院が占拠されたら」

つき指したのか

「なんか、『俺のようかんがああああ！！！！』とか言う右手に包帯巻いた人がテロリスト全員ぶち殺したから助かって」

…まさかこのタイミングであいつが出てくるとは…

「それから色々あって寝坊して遅れました！！！！！！！！！！」

『結局寝坊かああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！』

「…つるさいぞ、空香、フロア、真遊」

もはやこの三人はツツコミ三人娘だな

「久しぶりの出番がたったこれだけとは納得いかないのだが…」

「それは作者に言え！」

ちなみに真遊は久しぶりの登場だな

「そうだよー。真遊ー」

「僕たちの出番は大丈夫だよな？ミル」

「そのとーり」

「てか私なんてこの前ちよつと出ただけよ！」

上から美緒、白羅、ミル、ゲーム神の順番だ。

「よし！もういいからお前ら全員落ち着け！あとそこの生徒Fは面白かったから許す！」

会話が白熱しているところで先生が遮った。

この先生の名前は望月もちつき舞まい、性別は女、年齢は20代後半。独身、このクラス、一年D組の担当教諭だ。この教師は『面白さ絶対主義』をモットーに生きている人で、面白しろければ何でも許すという、お気楽な教師だ。

さらに『全国デコピン連合』の会長で、その伝説は巨大要塞をデコピンで吹き飛ばしたやら、全国に七万人のデコピン教信者がいるとか後を絶たない。

さらに俺が山上財閥のトップだということを知らない、他の教師もそうなんだがな…

俺が山上財閥のトップということを知っているのは、山上財閥の総本山であるこの山上島の住民のなかでもごく僅か。数百人程度しかない。全世界でもその倍くらい、そのほとんどが山上財閥の重役だ。この学校でも知っているのは校長ぐらいだ。

…まあ、裏社会ともなると話は別だな。

キンコンカンコン

「ああ、チャイムが鳴っちまった。まあいい、来週は前々から予告していたとおりテストだから、頑張れよ！俺の尊厳と給料のために！」

ああ、そういえば来週は一学期最後のテストか。

「…帰りのホームルームは無し！解散！」

…帰りのホームルームは終わったな、さて逃げるか。

俺はとりあえず挨拶をする前に窓に向かって走りだし

ガシャーン

「あ、逃げた！」

「逃がすかあ！！！」

俺はガラス窓を突き破って外に逃げた。ちなみにここは三階だ…が大丈夫だ

ボスーン

「鳥本様、あちらです！」

今度は上から捕獲用ネットが降ってきたが

「甘い！」

俺は片足を抜いて、脱出したのちにネットの間を駆け抜ける

ズゴオオオオオオ

「なに！？」

走っていると突然下には超巨大な落とし穴が現れる。

…来斗の技術を侮っていたな…まさかこんな短時間でここまで掘るとは…

「だが落ちるのは断らせてもらっぞ！」

俺は何とかアドル改を放った反動で落とし穴から脱出する

「ミル！」

「りょーかい」

すると今度は空中に浮かんだ俺の体をミルが捕らえる

「…ちっ」

「これまでだよ。トモ」

「そっだよね？ミル」

「そのとーり」

「…仕方がないな…勉強教えてやればいいんだろ？」

今まで俺が執拗に追いかけていたのは…こういうことだ。ちなみに俺の成績は全科目学年トップだ。だてに山上財閥のトップをやっているわけではない

「そつだよ」

「そつだよね？ミル」

「そのとーり」

「土日間に詰め込みで勉強を教えてくれ！！」

「ねえ、どうしてみんなこんなに必死なの？」

「前回なんて赤点とつたやつがどうなったのか…想像したくもないな…」

「赤点とるとそんなにヤバイの！？」

「…精神的苦痛…」

「ええ！？」

「ええつと、そついえば前回の罰って何だったっけ？」

「校長に【ピー】されたり、されたり【ピーー】されたり…少年

誌的に危ないことを…
理事長であるトモですら罰の内容自体はよく知らないだけにより危
ないことに……」

「これ少年誌じゃないでしょ！？てか貞操が危ない！？」

「……………R18……………」

「…てか俺の存在を完全に無視してないか？（泣）」

「梨恵にフロア、美緒に桜、影薄まで来たか…まあいい、とりあえ
ず俺は近くの新しくオープンした喫茶店によるから来い！」

という訳で、俺たちは喫茶店、『アナザー』に来た。ちなみに外見
自体は何も変わったところは無い。…外見はな

「ここが喫茶店というものか…」

「パフェはあるの？パフェは！」

「神界にも喫茶店はあるよ！」

「ええっと、喫茶店って何をするとところだったっけ？」

「……………私はどうもこの空気に馴染めない…」

「……………」

え！！！！！？？？軽く十倍増！？無理でしょ！？」

「つべこべ言わずにやれ！」

ガチャ

「はい！」

「後一っだけ言っておくが、もし手を抜いたら……」

「絶対に手なんて抜きません！」

ふう、やっぱり殺気と拳銃で脅すに限るな。

おっととりあえず忙しくなってきたから氷火の紹介は次回だ！

第二十四話

めんどくさいという理由で始まる逃走劇(すぐに終わる)(後

というわけで、この勉強会編は続きます。

第二十五話

喫茶店『アナザー』（前書き）

今回はもう他先生のキャラを大量に出してみました

第二十五話

喫茶店『アナザー』

fromソラカ

どうも空香です。

今、私たちは相変わらずに喫茶店『アナザー』にいます。

ちなみにここで勉強をさせる理由はトモ曰く、喫茶店『アナザー』の視察のついでらしいです。

ちなみに私とトモと桜は勉強を教える役です

「…トモ、一体どこまでケーキばかり食べるつもりなの？」

「全種類のケーキを食べ終わるまでだ」

さつきからトモは他のやつらに色々教えながらケーキを食べ続けています。只今トモは10皿目。トモはケーキが一番の好物です。…この喫茶店『アナザー』はとても料理が充実していてどれもこれも種類が多く、さらに美味しい。

河傘料理長（かさん）（読者の方々に覚えていてる人はいますか？

まあ多分90%以上の読者様が忘れていらっしゃると思うのでとりあえず簡単な紹介をします

本名は河傘（かさん） 庄徳（しやうとく）

山上財閥の料理長でかなりの怪力の持ち主。

気分屋でよく呼び名を変える。

その料理の腕前は世界最高といってもいいほどです（

の直弟子がこの喫茶店を経営していて、今のところはかなりの儲けが出ているみたい

すると、ここの店員をしている氷火がきた

「……バイクドチーズケーキにシフォン、ガトーショコラにレアチーズケーキ、苺のタルト、シャルロット、ザッハトルテ、ミルフィユ、カトルカール、ガトーショコラ、フルーツ、ブルーベリー、ブッシュ・ド・ノエル、ザルツブルガートルテ、キルシュトルテ……を、お持ちしました……」

「てかトモは本当に全品食べるつもり!? てか一体この喫茶店にはケーキが何種類あるの?」

「582種類だ」

「ええ!? 多すぎ!」

「……………」

あ、氷火の紹介するの忘れてた! ごめんね。氷火

氷火の本名は上杉うえすぎ 氷火ひょうび

基本的には無口、でもそれは初対面の人に対しての反応で、顔見知りになるとちよつと口数は少ないけど普通に話す。

私たちと同じ高校一年生で、居候。容姿はそこそこイケメン。ちなみに戦闘能力は梨恵に近い実力を持つ。

冷静沈着、トモにとてつもよくなついで、たまに危険な発言をすることがある。

…まあこんなところね。

「ねえ。この問題はどうやって解けばいいの?」

するとフロアがトモに質問した

「ああ、これはこれを代入すればいいだけだろ」

「……何であんたはこんな複雑な問題がスラスラと分かるのよ!？」

「毎日必ず3、4時間以上勉強すれば普通に出来るだろ」

(…い、意外と努力してる……)

まあトモだったら『こんなもの別に勉強なんてしなくても普通に出て来るだろ』とか言いそうだけど、まあ才能だけではとても全国模試で満点をとったり、東大入試問題を楽々と満点取れるはずは無いしね

「マサチューセッツ工科大学の入試問題もパーフェクトでしたよ」

「え？それって私でも知らないけど本当なの？緑さん」

「はい、その通りでございます」

……緑さんはこんな自分の利益にもならない嘘は言わないからきつとこれは本当…

トモ、あんたは一体何者？

まず金持ちでしょ。超大金持ちで世界最大級の財閥のトップ

次にその頭脳、マサチューセッツ工科大学の入試問題がいと簡単
に満点……なのに基本的には頭がそこまで良さそうには見えないし…
運動神経は抜群に良く、普段たいして運動してないし、意外と
細身なののに、100m走が14秒くらいだったり…

外見的には…まずは女顔。パツと顔だけ見たら女と間違われてもな
んらおかしくはないほどだし…それでいて小学校と中学校のほとん

どを金持ちの温室で育ったせいかな細身で白い肌をしていて、いつも目付きが鋭いのよ
さらに重度のケーキマニアでケーキの事を話し出すと、止まらない。他にも様々なケーキ伝説を持っている
…例えば…

ケース1、『とあるトモお気に入りのケーキ屋がとある半島にある国の国家権力により潰されようとしたとき』

トモはその国を山上財閥によって裏から解体させた

『結果』そのケーキ屋は救われたし、日本住民の核ミサイルによる恐怖はなくなった。その後その国はとりの国と一つの国となった

ケース2、『トモがケーキについて話し始めたとき』

いつまでも話を止めずに3日くらい話し続けたわね…

『結果』私たちはその後、トモにケーキの話をさせるのだけは止めようと思った。

…あの時は本当に死んだほうがマシかと思ったわよ…あれはもう二度と思い出したくない…

ケース3、『トモがプロデュースしたケーキが不味いと言われたとき』

誰がやったのかは不明だけどその不味いつて言った人はこの世にいた証拠を何一つ残さずに消え去ったという噂があるらしい……

『結果』みんな根も葉もない噂かと思っただけどなんか一部の人がトモに密かに怯えている…うん、私も根も葉もない噂だと思っ…
…たい

「おーい、空香。さつきから何を考えているんだ？」

「い、いや、何でもないので。トモ」

それにしても…何で私はこんな無神経なのか、冷静なのか、…それとも純粹なのかよく分からない人…トモを好きになってしまってるのだろう…
……だからか

カチャ

「手を挙げる！」

「え？」

私はトモの方を見ようとしたら、その向こうにこちらに銃を構えて覆面をした男がいた

（fromトリモト）

やれやれ、何でこんなことになったのだから。

「オラオラオラオラア！！！！金出せ！」

ドババババババ

俺たちがいる喫茶店『アナザー』の店内には銃器を持ち覆面をした男たちが6、7名いる。

…うん、間違いなく強盗だな。まあ俺が山上財閥のトップだとは知らないみたいだがな。おおよそ喫茶店強盗だろう。

全く、俺のSPどもは何をしているのやら……まあとりあえず緑が

「か、カップル？」

ポカッ

あ、結城の腹部がすごく凹んだ

「何で疑問文なのよ？」

「…な、殴ってから言わないでく…れ…」

「よう、結城に沙耶、お前たちも来ていたのか」

「げっ、鳥本！」

ちなみに結城は俺を苦手な人物ナンバーワンとして見ているようだ。
すると、ちよつと遠めの席にいた人物が立ち上がった

「よう！！鳥本に結城、お前たちも来てたのか！！」

「遊鬼、お前まで来ていたのか」

「俺だけで無くて、今回はしのも来てるぜ！！」

「そうか」

そう、俺の知り合いの一人、遊鬼だ。

「ええい！お前ら！俺たちのことを忘れてないか！？」

ババァン

すると、強盗集団のリーダーらしき男が拳銃を真上にぶっぱなした
「おい！その店員！死にたくなければレジの金を全てこのカバン
の中に入れる！」

すると、強盗集団のうちの副リーダーらしき男がとある店員に向か
って言いはなつた。

…何故こいつはリスの仮面を着けているのかは不明だが、きっとこ
いつは一番先に逝くだろうな。

「……えんぷうれんごくは炎風練獄破！！！！！」

何故ならとある店員とは最強クラスのアルバイト、上杉氷火だった
のだからな。

その強盗集団の副リーダーは炎により黒焦げ、しかも昔のコントみ
たいにアフロになって気絶した。

「くそ！」

すると強盗集団の一人が氷火に向かってマシンガンを構える………が

「カハッ」

「おっと、危ない危ない」

結城の拳がマシンガンを構えた男にクリーンヒットした

「このくそがきが……！」

ババババババン！！！！！！

「！」

その時結城にマシンガンの弾が飛んできたが、弾丸がそれる

「よっしゃー！俺も殺るぜー！」

どうやら遊鬼も加わったらしい。

当然遊鬼クラスに弾丸の弾が避けられないはずもなく

「グハッ！」

「ボゲッ！」

「あべし！」

「ふるなるばっ！？」

「ハナボキッ！？」

「スリジャヤワルナプラコッテ！？」

強盗集団たちは一掃される。

…それにしても面白い叫び声だな。特に最後のやつ、それはスリラ
ンカの首都だぞ

「く、くそう！こいつの命がどうなってもいいのか！」

「ふにゃ？」

するとただ一人残った強盗集團のリーダーが猫耳をした美女のような顔をした俺と同じ年くらいの男を人質にとった
…ん？まさかそいつは…

「フハハハハハハハハハハ！！形成逆転だな！」

「……よくも、よくも俺の可愛いジユリを人質にとつてくれたなあ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ！！！！！！！！」

ズゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

人質にされた男の子のとなりに座っていた男が強盗集團のリーダー
をぶちなぐると、そいつは星になった

「大丈夫か！？怪我はないか！？ジユリ！」

「はい、大丈夫です。父上」

…間違いなくリュウさんとジユリだな…

「…私と戦え！！！」

梨恵が立ち上がったってそう言い放つ。

…そりゃリュウさんは最強クラスの人だから、戦闘狂の梨恵として
は戦いたいだろうな

…ちなみにその後のことは読者の想像に任せる。

ただ一つ言えることはとりあえず結城が酷い目にあっただくらいだ

「…それにしても何で今回はこんなに他作のキャラがいるのよ!？」

…そう、ここは喫茶店『アナザー』

世界と世界を繋げる特別な喫茶店だ。

(ちなみに…)

「……ここは……どこ?」

…遊鬼と一緒に来たはずのしのは何故か山上財閥図書館に迷い込んでいた

第二十五話

喫茶店『アナザー』（後書き）

神技さんギルさん姫百合さんごめんなさい！！勝手に使わせてもらいました！

鳥本「それにしても今回は今更俺の外見説明が出てきたな」

確かに…皆さんすいません！皆さんが思っていた鳥本の外見と違っても知れませんでした！ごめんなさい！！！！

鳥本「…他にも謝るところはあるだろ」

更新が停滞しててごめんなさい！！！！

第二十六話 アルコールは史上最強！？（前書き）

今回は最近出番の少なめのキャラに焦点を当ててみました。
後今回は第三者視点に挑戦してみました。結果は……惨敗です！

…何やら真面目にやってそんな様子だが…きっと俺をはめる罠でも考えているんだろうな…

「…お腹すいたー！」

すると突然美緒が叫んだ

「仕方がないな…じゃあディナールムに來い。ついでに他のやつらもな」

「はいー！」

というわけで俺たちはディナールムに行ったのだが…その時あいつがいないことに気付かなかったのが原因だな…

（fromサクシヤ）

「……………これで……………」

図書館に一人残り、桜はとある本を見ながら何やら泡がブクブクとしたピンク色の液体が入ったフラスコを持っていた

「……………完成……………」

「ではないよ！」

『……………確かに……………』

「……………?」

すると突然ゲーム神と神技さんのところのキャラクターであるしのが現れた。桜はきよとんとした顔で二人を見た

「それって惚れ薬よね? だったらこうしないと!」

『……………(コクリ)』

「……………」

『……………』

「……………」

「…完成!」

……………何を入れたのかは内緒である

『……………姫さんは……………私が止めとくから……………』

「……………ありがとう……………」

そう言い残し、しのは小説の外の世界へ飛び出した。

「後は魔法王が来るのを待つだけよ!」

「……………(コクリ)」

ちなみに桜とゲーム神は本棚の影でその様子を見ていた

「……………」

「それにしても…それをどつやって飲ませるのよ?」

「……………そこに……………」

机の上を見ると、なにやらブドウジュースらしきものがあった

「……………あれの中に……………」

「あのブドウジュースらしきものなかにいれといたのね?」

「……………(コクリ)」

「あれ?魔法王、このジュースは何?」

「……………僕は知りません」

「じゃあ私が飲んじゃえ」

ズバコ!

「!?!?」

「……………」

その時、桜が投げた本がフロアの頭に直撃した。

「いったー！」

「一体…誰が…」

アークは周りを見渡すが誰もいない

「じゃあ私が飲もっ！」

「!?!」

すると突然美緒が全て飲み干した。

「……？何だか体がぼかぼかと…」

「吐き出しなさいよ！」

「……………」

「ふへ？」

すると突然桜とゲーム神が本棚の影から現れて、美緒をぶんぶんと振り回した。

「……………ひっく」

「え？」

美緒が顔を真っ赤にしてそんな声をあげる

「…これは」

「まさか…」

「アルコール…か？」

「……………（コクリ）」

「…桜、一体あれはどこから持ってきたんだ？」

「あ、真遊」

「……………向こうから……………」

「…あれはワインが入った樽だろ！」

「…ということはそれだけで美緒があんなに!？」

「いや、それだけでは無くてきつと一緒に入った惚れ薬の効果で酔いやすくなってしまったのよ!」

「惚れ薬……………一体どういうことですか？」

「……………何でもない……………」

そう話している間に美緒はどんどん樽を開けてワインを飲む

「ひっく、皆々飲もうよっ!」

「…っわああああ!」

その時、アークが美緒に押し倒された

「!?!」

「離れなさい!」

ズカボカドカバキ

当然、美緒はめったうちにされた

「ふん! いいもーん!

真遊でも呼んで一緒に女二人で朝まで楽しむもん!」

「それは解釈の仕様によつてはすごく危険な百合発言だ!」

「もきゅ?」

「……………姫百合さんの口癖……………」

「ま〜ゆっ!」

「!

ちよつと待て! 胸を私の胸を揉むな! ! ! ! ! ! !」

「…真遊の胸って結構大きい…もっと揉んじゃえ!」

「……………真遊って確かサイボーグのはずだよな?」

「……………(コクリ)」

「まだまだ!」

「美緒!酒で酔ってるとはキャラが微妙に違うぞ!
つてかそれ以上揉むな!早くするな!

…くっ」

「…とりあえずそろそろ危険だから魔法王は見るな!」

「ぐるせりあつ!?!」

フロアの拳がアークいや魔法王の腹にめり込み…そしてアークは倒れた

「ラストスパート!」

「それにしても酒のせいかもはや美緒のキャラがかなり違う!?!」

「酒は……………人を……………変える……………」

「え?そうなの?」

(だったら魔法王に飲ませれば…)

(……………飲ませる……………)

そんな女たちの思いがはせるなか

「ええい!これでどうだ!」

その後、他のメンバーも帰ってきた……が……勉強どころでは無かったらしい……

「ふふふ………」

ちなみにその時の一部始終を緑がビデオカメラで録っていたのは誰も知らない

第二十七話 テストの結果はそれぞれで…（前書き）

今回はちょっと出来が悪いです…スランプ気味ですいません

衝撃が分散しやすく安定しているから』……………かなあ？

～fromマイ～

よう、このクラス、1年D組の担当教諭の望月舞だ。ただ今彼氏募集
集中！

え？知らない？俺のデコピンをくraitたいのか？かつて高校生のこ
ろに戦車を弾き飛ばしたデコピンを知らないのか？

おっと話がそれた、今俺はこのクラスの試験官だ。さて、何か今回
は問題自体が面白いのだが、きつとそれに勝るほど面白い解答をし
ている生徒がいるはずだ！

だってこのクラス自体まともじゃねーし

例えばな…今学校に来てないやつで言うとな

アメリカのラスベガスで豪遊している、煉瓦れんが・ローグ・クロウ

やら常に修行するとか言っている戦闘狂、天信梨恵

ただ今、ヨーロッパに留学中の空崎歩そらさきあゆむ…いや、こいつはまともだな。

他にも流星せいせいやらが来てないがこいつは全く面白くないからな…まあ、
からかうのは面白いけどな

さて、このテストをやってる奴等の反応はと
学年ダントツトップの成績を誇る鳥本はと…

…何か凄くびつしりと文章を書いていやがるな…採点するのめんど
くせえから満点でいいか！

次に来斗の方はただ今、問六を書いている途中だ。どれどれ…

『マンホールのふたは丸くないと罫として使いにくいから』

…それにしてもやっぱりこのクラスは特殊だな…まともな解答をしているのは空香くらいしかいねえぞ…

…やっぱりこのクラスの担任になって正解だな。さて…そろそろ

「おっと、時間が。テスト回収しろ！」

次は本番だ！」

「え!?!」

「こんなもんテストのはずねえだろ！」

「……やっぱり……それにしてもやけにベタなような気がするけど

……」

「その生徒、とりあえず黙れ。さて、マジテスト配るぞー」

そんなこんなでマジテスト開始、内容は普通のテストだ。まあ、配るのめんどくせえから五教科同時に配ったがな

10分後、さてとりあえず生徒どもの様子はと、まずは鳥本だが…
…こいつはもうシャーペンシルも持たずに何かを考えている。そうだな…大方……駄目だ。こいつは何を考えているのか分かりやあしねえ

(そういえばあそこのケーキ屋はモンブランだけは断トツだったな。モンブランの種類さえ増やせばかなり流行ると思うが…)

さて、次に空香だが普通だ。以上!(ひどい!)

来斗は…やはりこいつは罨のことしか考えてねえ!

白羅はとりあえずテスト問題に悪戦苦闘している。全くもってお前はこの学校の…なんだからしっかりしろよ

「その後」

テスト返却だ。ここの学校は即日返却だからかったりーな

空香&真遊&桜

「ねえねえ。真遊。テストどうだった？」

「うーん、微妙」

「…真遊の微妙っていつつ平均80越しだけどね」

「確か空香も同じくらいだが…」

「いやいや、私は全然出来なかったわよ」

「……………嘘……………平均83点……………」

「…っていつの間に私のテストを盗ってるのよ？」

「桜は当然満点だろ？」

「…（コクリ）」

…つまんねー

アーク&フロア

「魔法王、テストは何点だったのよ？」

「だからだからだから僕の名前は魔法…違う違う違う！アークだあ
ああああああああああああああああ！！！！！！！！」

「とにかく点数教えなさい！」

「えっと僕は平均で94点ですが…」

カチン

「何であんたはそんなに点数がいいのよ！？私なんて平均36点よ
！この大馬鹿愚鈍大法帝王！」

「大馬鹿愚鈍大法帝王！？」

魔法王改名！

白羅&鳥本&氷火&誰だっけ…ああそうか影薄か

「ミル、この点数はどうだと思っ？」

「わるいー」

「……トモは何点？」

「平均150点だ」

「……僕は………そこそこ」

「ってそれ以前にどうやって100点越えたあ!?!」

影薄のツツコミ炸裂!

美緒&来斗

「ねえねえ、美緒、次にこんなのを考えてただけど…」

「すぐに作るー」

テストのことなど関係なし!

ちなみに生徒Fは…

「やったー!」

解答がとてつもなく面白かったから満点にしといてやったぜ!

さてそろそろ頃合いか

「…今日の俺の学校での仕事は以上!それじゃあ帰るぜ!」

「先生!帰りのホームルームがまだです!」

「めんどくせえから却下!じゃあな!」

「なんとという横暴さ!?!」

じゃあな!

そして俺は廊下を全力ダツシュ！

「先生が廊下を走ってどうするの!?!」

そんな空香のツツコミが聞こえたが気にしない。だって仕事したくねーからな！

「全くもってあの先生は……はあ……教師ですら変人だと頭が痛いわ……」

その後、空香はこう呟いたらしい

第二十七話 テストの結果はそれぞれで…（後書き）

重大告知！金ファン人気投票を次の話が更新されると共に終了します！

第二十八話 金ファン通信局（前書き）

なんか更新ペースが尋常でないような…

第二十八話 金ファン通信局

（fromリモ）

「第一回金ファン通信局！」

「イエイイ！」

「どうも、アナウンサーの来斗です。とりあえず今回は丁寧語でやらせていただきます」

「アシスタントA：だったっけ？の美緒です」

「アシスタントBのゲーム神よ！」

「スペシャルゲストの鳥本だ」

「さあて、遂に始まってしまいましたね。金ファン通信局！」

「金ファン通信局とは…何だっけ？」

「ええと、私たちが住んでいるこの島、『金持ちはファンタジー！』略して金ファンの主な舞台になる山上島についてをどんどん紹介していく番組よ！」

「その通りだな」

「さて、まずはニュースレポーターの空香さんに繋ぎます」

突如上からモニターが下がってきて、電源がついた

『ええと、このカメラは何？あ、はい分かりました。とりあえずこの学校の紹介をすればいいんですね』

「カットしなくてもいいんですか？監督」

「面白いから続行だ」

ちなみに監督とは教師、望月 舞監督だ

「さて、今はどちらにいらっしやるのですか？空香さん」

『はい、ただ今私は山上仁黒高等学校、略して山仁高校にいます。この学校は山上島に多数ある高校の中でも、最も巨大な高校で生徒数は10000人を越えます。部活の数も半端ではなく、

総合野球部、軟式野球部、硬式野球部、男子野球部、女子野球部、男女混合野球部、変態野球部、野球同好会、怪人野球部、野球研究部、野球観戦部、野球撲滅部、野球デストロイヤー部、暗黒野球部、裏野球部、サッカー部、卓球部、バスケット部、ハンドボール部、テニス部、バレー部、水球部、アメフト部、ダンス部、タンス部、タンズ部、ペサパッロ部、ホッケー部、ドッジボール部、スカッシュ部、アイスホッケー部、ボウリング部、レスリング部、プロレス部、スキー部、カバディ部、ラクロス部、ラグビー部、相撲部、柔道部、剣道部、空手部、少林拳部、太極拳部、破壊神部、アニメ研究部、ゲーム研究部、戦国部、百合百合部、メガネ部、コンタクトレンズ部、片メガネ部、ラーメン部、悪の秘密結社部、世界征服部、改造手術部、化学研究部、暗殺研究部、拷問部、埋葬部、壊滅部、ス○ット団等々の部が存在します

…つてなにこのカンペ!?

野球部だけで多すぎるし野球撲滅部と野球デストロイヤー部ってむしろ破壊してる!?!それに野球同好会って野球部があるのに何故!?!サッカー部は…普通ねそれに破壊神部って何!?!破壊神を降臨させるの?それとも自らが破壊神になつちやうの!?!戦国部は…とりあえずスルーして百合百合部って何!?!もしかしたらあの姫がつく人が創設したの!?!メガネ部コンタクトレンズ部片メガネ部ってそもそも何をやる部!?!悪の秘密結社部以下略は色々と危険でしょ!?!そして何ゆえその流れから来て最後にス○ット団なの!?!」

「はい、今の空香のセリフはスルーしても構いません」

『いや、もう遅いよ!?!美緒』

「それにしてもノンストップツッコミよ!」

「これぞ正にツッコミ魂だな」

「ツッコミ魂?」

「ツッコミ魂とはツッコミを極めようとする者たちが必ず持つ精神だ」

『いや私はツッコミを極めようとしているわけではないわよ!』

「そんな空香にはツッコミ女帝の称号を与えよう」

『なにその名誉そつで不名誉な称号は!?!』

「H A H A H A !」

『そこにいる先生も笑わないで!』

「さてさて次に行きましょう」

『…はい分かりました。』

さて、今私の目の前にいる人はこの学校の校長、田原たはら士し似に我が御みです。名前に対して言いたいことはありますが、スルーで。とりあえず何か一言!』

「テレビの前にいる中学3年生の皆さん。この学校に入らないと、カエルの死骸とコウモリの羽を煮詰めた汁をたっぷりつけたわら人形に錆びた五寸釘を打ち付けますよ」

『それは呪いなのでは…ごめんなさい!』

モニター内の空香がまさかの超高速土下座を繰り出した

「さてさて次は生徒会室です」

「次は私もいくよ!」

そういつてゲーム神はモニター内に飛び込んでいった

『なんでモニターを通り抜けれるの!?!』

「神の特権よ!」

『……………とりあえずスルーで』

んの桜田ハルが馬鹿生徒会長、夏樹に飛び膝蹴りを繰り出し夏樹は吹き飛んだ

「ぐはっ！だが、だが愛の力は絶対なりいいいいいいいいいい
いいいいいいいい！！！！！！」

ちっ、死なないのか

それにしてもクロウ（未登場）と同じようなことを言っているな

「死んでよ！断罪の天秤！」

すると抱きつかれていたゲーム神が夏樹に向かって手をかざすとど
うじに巨大天秤が現れ

「ぐはっ！」

馬鹿生徒会長を押し潰した。

…天秤のところはいらんじゃないのか？

「おっと、ごめん。うちの生徒会長がいつもの癖で」

すると今度はジャーニーズふうの顔をした男、萩 昌介が出てきた

「てかあんたたちは誰！？」

「ふふふ…私たちは桜ヶ丘高校生徒会役員よ」

次は柊グループという向こうの世界では最近急成長中の巨大資本金
社の代表取締役である柊 紫苑が出てきた

「止まれ！」

『何をいきなり！？』

すると突然空香の前に槍が突きつけられた

「白羅様にあだなす者は許さん！」

『白羅…様！？』

「我ら白羅様親衛隊！もしくはは白羅様ファンクラブ！もしくは生徒会だ！我の名は長樂ながら加帆かほ！性別は女！」

『ってええ！？ファンクラブ！？それに生徒会ってどういうこと！？』

「って何をしてるんだらうね？ミル」

「しらない」

「はっ！白羅生徒会長様！ご機嫌よろしいでありますか？」

「あ、うん」

『……………白羅！あんたが生徒会長だったの！？』

「そうなの？ミル」

「そのとおり」

『後もう一つ。白羅様親衛隊って…何？』

「え？そんなものがあつたっけ？ミル」

「しらない」

(まさか…気付いていない！？)

モニターから戻って

「さてさて、これが生徒会でしたー」

パチパチパチパチ

「さて、金ファン通信局。次回は喫茶店『アナザー』をはじめとしたあらゆる施設を探訪したいと思います」

「次回もあるの？」

「当然だ」

「さて、皆さん。それでは。バハハイー！」

「何このテレビ…？」

自分の部屋で普通にテレビを見ていたフロアはそうシッコんだ

第二十八話 金ファン通信局（後書き）

さて、金ファン人気投票の締め切りは7月30日までとじとじ応募して下さい

さらに重大発表。

今度は『もしも』企画を行いたいと思います。

『もしも』だったら』

とかいう形でお願いします。一人いくつでもいいです。とじとじ感想欄、もしくはメッセージで応募して下さい。というかむしろお願いします！

あとちなみに今回の新キャラは覚えなくても結構です

番外話

人気投票結果発表ナリ！（前書き）

今回は人気投票結果発表です。
後もしも企画どんどん受付中！

番外話 人気投票結果発表ナリ！

作者「いえーい！今回は人気投票結果発表だぜ！」

鳥本「つくづくテンション高いな」

作者「H A H A H A！とりあえずスルーで」

鳥本「そうか」

作者「さて、まずは4位から！中途半端なのは気にしないで下さい」

鳥本「大した人気もないのに人気投票なんて始めたのが一番の原因
だと思っぞ」

作者「H A H A H A！過ぎてしまったものは仕方ない。

さて、4位ですが…三人います」

鳥本「全員一票ずつだったしな」

作者「悲しいことを言うなよ…さて、ご登場願います！」

パカパカーンパカパカーン

作者「おっと床から何やらステージが出てきました。その上にいる
のは4位の皆さんです。皆さん拍手をお願いします！」

パチパチパチパチ（テンション低め）

作者「誰と!？」

梨恵「北朝鮮あたりに強者がいると聞いた」

作者「……そうか。まあ色々な意味でヤバいがじゃあな」

鳥本「さて、次は3位だ。これも三人いるぞ。全員一票ずつだ」

作者「あれ?それはこっちのセリフ……」

鳥本「お前は帰れ!」

作者「いや、自分作者なのに酷くないか!？」

鳥本「さて、3位の三人は登場しろ」

ゲーム神「やったわよ!」

緑「ふふふ、ありがとうございます」

魔法王「僕の名前は魔法王ではない!決して魔法王ではない!絶対に魔法王ではない!名前はアーク・サラブだ!」

鳥本「さて、とりあえずお前らには褒美として……」

作者「ん?何だ?」

鳥本「罰ゲームだ」

作者「いや、全然褒美じゃないだろ!」

アーク「ちょっと待って下さい！」

ゲーム神「何故に!?!」

鳥本「とりあえず虐めなくなったからだ」

ゲーム神「不条理よ！」

鳥本「さて、罰ゲームはどうでしょうか…」

アーク「当然のように無視!?!」

緑「ふふふ…鳥本様。私にお任せ下さい」

鳥本「よし緑。罰ゲームはお前に任せた」

緑「ありがとうございます。鳥本様。

さてゲーム神様。アーク様。とりあえずこちらの部屋に…」

アーク「何故部屋を移動？」

緑「18禁なので」

アーク「助けて下さい！」

ゲーム神「私は脱出よ！」

作者「さてさて、向こうのほうに五月蠅いところですが、2位の発表です」（よし、取り返したぞ）

鳥本「2位は今までと差を離して五票だ。それじゃあ出てこい」

ジャジャジャー

桜「……………ども……………」

作者「2位は桜！意外と人気です。

さて、2位だから褒美に……………今度アークと桜の話を書きます！」

桜「……………ありがとう……………」

作者「さて、次に偉大なる栄冠を手にした者。1位は……………」

鳥本「俺だ」

作者「そりゃそうだよなあ……………一応主人公なんだし」

鳥本「一応？」

作者「ごめんなさい！」（ふふふ、今度お前の大っ嫌いなものが出てくる話を書いて日頃の復讐してやる……………）

鳥本「……………殺るぞ？」

作者「心からごめんなさい！」

鳥本「『スペース・レーザー』！」

チュドーン！

番外話

人気投票結果発表ナリ！（後書き）

簡単に纏めると

4位：白羅、梨恵、空香

3位：アーク、緑、ゲーム神

2位：桜

1位：鳥本
です！

第二十九話 桜の行き過ぎ！？恋話（前書き）

更新遅れてごめんなさい！

ちなみに今回は三点リーダーを多用というか乱用しているのは気にしないで下さい

…それにしてもうまく書けないー

第二十九話 桜の行き過ぎ！？恋話

fromサクラ

どうも……桜です……

今私は……図書館中の本を……読みあっさていた……ところで
す……

「僕の可愛い可愛い可愛い桜ああああ！」

……背後から……おじいちゃんが……飛びかかって……きたから……横に
避ける……

「フギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ガラガラドツシャン

……本棚にぶつかって……本の中に埋まった……とりあえ
ず……復活しないうちに……他のところに……逃げよ……

今は図書館の二階……私は本棚から……本を抜き取る……

『気になるあの人の相性占い。残念！斬りい。でもそんなの関係
ねえ！ダイジヨブダイジヨブダイジヨブ！』

……この本……何やら……タイトルが……すごく……引っ掛かるけど……
気にしない……

まずは……血液型から……

あの人血液型って……………何？

……………とりあえずスルーして……………次に誕生日

……………分からない……………そついえば私

……………あの人のことを……………全く知らない……………どうしょ？

「さつくつらあああああああああ！！！！儂の可愛い可愛いかわい可愛い桜よ！何故儂を避けるのじゃあああああああああああああ……………」

……………また五月蠅いのが……………復活して……………飛び掛かって……………きた……………

ズコン

「ぐ…ふ…

く、クロスカウンターか…成長した…な、儂の可愛い桜よ…ガクッ」

「……………さつきから……………しつこい……………」

……………ん？……………しつこい……………しつこく追ってくる……………

……………成る程……………ストーキング……………

……………とつじつとで……………今は…あの人を…廊下で……………追跡中……………

(……何だろう？なにやら後ろから強烈な気配を感じる。というかむしろどこか恐ろしいような……)

……すると……あの人がこっちを……振り向いた……もしかしたら……気付いた……？

(……とりあえず怖いから無視しよう……)

あ……そのまま歩いていった……気付いてないんだ……よかつた……
……すると……向こうから……フロアが……来た……

「おはよう。変態王」

「だから僕の名前はアークだあああああああああ……！！
！！決して魔法王いや変態王ではない！
というかそれって未だに続いていたのか!？」

「気にしない気にしない」

「……まあ、納得いかない部分もありますが、気にしないでおきましよう」

「あ、そうそう。そういえば今度行われる大食い大会にあんたとペアで参加届け出しといたから」

「へ?」

「今度山上財閥主催で大食い大会が開かれるのよ。優勝商品は何と、

甘いもの好きには堪らないと言われる一品。『ケーキパフェ』50
0種類!

それで男女ペアで出場ということになってたから、あんたとペアで
応募届けを出しといたから」

「ちょっと待て！僕に何の断りも無しにそれは」

「お願い」

「だから僕じゃなくても……」

「……………クスン」

「う……………分かりました。出場しましょう」

「……………ホントに？」

「ええ本当です」

「ありがとう！」

……………イラッ

……………何やら会話自体は聞こえないけど……………楽しそうに話し
てる……………

……………絶対にあの人を……………渡さない……………渡したくない……………

……………その後……………私は全力ダッシュで……………図書館に戻って……………本
をよみあさった……………

『もきゅ？気になるあの人に自分のことを気付かせたい？』

夜這いをかければいいのら』

『そういふことなら、勢いでやっちゃったほうがいいですよ』

.....本にはそう書いてある.....どうしょ？

〔深夜〕

.....今は.....深夜.....大抵の人が.....寝静まったところ.....
私は.....部屋を出る.....

カメラタツ

「!？」

.....すると.....突然.....何やらおかしな音がした.....

「カメラタツ」

.....これは.....機械.....？

向こうから.....機械音声.....みたいなのが.....聞こえてくる.....

「カメラタツ！」

「カメラタツ！」

「カメラタツ！」

「カメラタツ！」

「カメラッカメラ！」

「ツタカメラ！」

「ヨーシッウカーメ　！」

……最後のは……なんて発音……するんだろ……

……廊下から……大量の……そんな鳴き声をする……蛙と亀を

……足して2で割ったような……ロボットが……迫ってくる……

……

……どうしょ……

「『ポイントゲッターズ』発射！」

すると……突然……蛙亀ロボが……分解した……

「カメラアアア！？」

「カメカメカメエエエ！？」

「ゲコオオオ！？」

「！？」

……最後のは……蛙？

「……あ、桜。ごめん。ちょっと迷惑をかけたしまった」

すると……そこにいたのは……真遊……

「…全く…美緒め…ロボットが暴走したことも忘れて…」

そして…そう呟きながら帰っていった…

…とりあえず…今のはスルーして…早く…あの人の…部屋に行こう…

カチャ

「……………?」

すると…一歩踏み出したところで…そんな音がして…

ドッバーン!

「!?!」

…背後から…大量の水が押し寄せて…きた…

…当然…私は…流された…

ん……………うーん……………

私は虚ろながらも…目を開けた…

「あ、起きましたね。ふう…良かった…」

「……………?」

まず最初に目に入ってきたのは……………『あの人』アーク様……………

「全く、また来斗の罨か…」

次に……………横から真遊の音が…

「それ以前にあんな見えすいた罨に引つ掛かるほづが悪い」

「いや、ちょっとあまりに無茶でしょ!?!」

「五月蠅い。人気投票4位」

「人が気にしていることを…」

「人が気にしていることを言うのは定石だろ」

……………鳥本……………空香の声もする……………

「ねえねえ、大丈夫?」

美緒の声も…した

他にも……………いろんな人の声が……………聞こえる……………

「うー、桜の顔がよく見えないー」

ドン

「!」

すると……………今度は急に……………アーク様がこっちに……………倒れて……………き……………て……………!

チユッ

「!?!」

そして……………私の唇とが……………重なった……………
バタッ

「桜ー!?!」

「か、顔が異常な位赤くなってるよね!?!ミル」

「そのとーり」

「この大馬鹿ド変態王!」

「だから僕の名前は」

「そんなこと言ってる場合!?!早くしないと駄目よ!」

「一体何を?」

「え…うーん、人工呼吸よ!」

「この馬鹿ゲーム神!」

「馬鹿とは何よ!私は神よ!」

「私は勇者!」

「そんな忘れ去られた化石のような設定を言っても駄目よ！」

「てかお前らしい加減にしろー！」

「しるさいよ！影薄！」

「黙れ影薄！」

「ひびっー！」

「さて問題です。誰がどのセリフを言ったか当てて下さい。今日のところはこれにて終了いたします」

第二十九話 桜の行き過ぎ！？恋話（後書き）

次回は『桜ヶ丘高校生徒会役員』とのコラボか、大食い大会になる
と思います

第三十話

何が起きる？サクコー×金ファン！へ1（前書き）

今回からしばらく水月五月雨先生の『桜ヶ丘高校生徒会役員』との
コラボ&シリアス編だあ！

ちなみに梨恵のシリアス編はまた今度になりそうです（汗）

第三十話

何が起きる？サクコー×金ファン！へ1

グサッ

「く…そ…」

ここは何処かの町の路地裏。どうやら町並みから見る限り、日本らしい。

今は深夜、人々は完全に眠った…いや、眠らされたというべきか。そんなときに人が一人…死んだ

「ひっ！ゆ、許してくれえ！俺には妻も子供もいるんだ！」

「へえ…一体何を許せというの？」

サクッ

「へ…？」

殺された男と一緒に行動していた男もいとも呆気なく、逝った

「…はあ、またこんな小物かよ……」

「確かに実に呆気なかったね…」

見ると周りには、大量の死体、死体、死体。

その死体たちのなかには、爪やら牙やら生えた明らかに人外のものも数匹…いや、数人混じっていた

その中心に立つ二人の男…顔は暗くてよく見えない

「うう…まさか…我らが…ここまで呆気なく…たった二人に壊滅させられるとは…」

「おい、こいつまだ生きてるぜ。龍清リウセイ」

「うん。そうみたい。低ランクの真の王リザルトキングとはいえ生命力だけならかなりのものだね。轟龍ゴウリウ」

「ぐ…ぐがあ！」

グチュ

「あ、こいつ潰れちゃった。ちょっと踏みつけたただけなのに…」

「かかつ、さあて次のターゲットは誰だ？俺が楽しめるようなやつか？」

「ええと、次のターゲットは……だよ」

「ふーん、そいつあ多少は楽しめそうだ」

「君の第一撃に耐えられたらね」

「かかつそれを言うな

さあて、そろそろ行くか！そいつを殺りにな」

「ああ、そうだね…今現在の位置は…桜ヶ丘高校か」

「桜ヶ丘高校？別の時空の世界か」

「さてと、作戦の日時は…そうだな。明後日にでもしようか」

「けっ、待ちきれねえぜ」

「まあまあ、別時空の世界に行くためには色々と仕込みが必要だから…ね？」

「ちっ、しゃあねえな」

そして二人は消え去った…

（fromリモト）

ここは社長室だ

「…何だと！？それは本当か？」

「はい、そのようです。鳥本様」

「ふむ…」

俺はおもむろに懐から携帯を取る。

「……ソフトオンID390506セット。別時空の世界『桜ヶ丘
高校生徒会』の電話に繋げる」

【YESセット完了】

プルルルプルルル

そう携帯から合成音声が出ると同時に普通の電話の音に変わる

ガチャ

『…もしもし、こちら桜ヶ丘高校生徒会顧問の伊賀古賀』

「コガセンか？こちら鳥本だ」

『…で何のよう？お前がわざわざ電話してくるとはただ事じゃあねえよなあ』

「その通りだ。

今回の要件は手短に話す。今回は盗聴の危険もあるからな。

…『桜ヶ丘高校生徒会役員』の世界の情報が、俺たちの知らないところで紛れ込んだ」

『…………』

「この前、サクコーメンバーズがこちらの世界に来た。その時、そちらの世界とこちらの世界を繋ぐものに歪みが生じた。そして…こちらの世界にそちらの世界の情報が紛れ込んだ」

『そりゃあ危険』

「ああ、このままだと『本来そっちにいるはずの無かった人や物』が現れるかもしれないもしくは『本来そっちの世界にいるはずだった人や物』が消えるかもしれない

だがそれを直す方法は無いわけではない」

『…どんな方法？』

「…そちらの世界に結界を張り自然修復をさせる。

だが、その方法をやるにはそちらの世界に俺たちが一週間ほど行かなければならない」

『…だったら逆にこっちの世界にそちらの世界の情報が入りこむんじゃないの？』

「ああ、確かにその通りだが、正直な話こちらの世界にとってはさしたる問題ではないしな」

『そうか…それじゃあ待っている』

「ああ…かかる期間は一週間…それまでに何か起こらなければいいんだけどな…」

「なあ龍清。ターゲットの名前はなんつったっけ？」

「…夏樹竜介。桜ヶ丘高校生徒会長だよ」

…不穏な影が動き出す

第三十話

何が起きる？サクコー×金ファン！へー！（後書き）

コガセンが上手く書けないなあ
てか最近後書きも本編も短い…？

第三十一話

何が起こる？サクコー×金ファン！へ2《（前書き）

更新がグダグダに遅れました…本当にすいません！どうか見捨てないで下さい！

テストやら体育祭やら文化祭やらの行事で忙しく…しかも酷いスランプでした。

あ、ちなみに今回の話は前回と変わってコメディイです。

そして何気に新しい連載小説のほうに手を出し始めている正体不明です…近々新しい小説が連載されるかもしれません。どうかそちらの方も宜しく願います…

あ、でも金ファンの更新が一層ヤバいことになるかも…どうすればいいんだあ！

第三十一話

何が起こる？サクコー×金ファン！へ2

□ from トリモト □

「…で、何故お前らまで来てるんだ？」

「神だからよ！」

「いや、意味不明だから!？」

「どうだろうね？ミル」

「しらない」

「強者の気配を感じるから」

「……………同じく（実はトモに悪い虫が寄り付かないようにするため）」

「ええと、僕は周りに連れられて…」

「黙って、魔法王」

「うーん…何となく？」

「何故疑問文なのだ？」

「暇だったからね」

「……………（アークさんを…追ってきて）」

上から俺、ゲーム神、空香、白羅、ミル、梨恵、氷火、魔法王、フロア、美緒、真遊、来斗、桜の順番だ…

「…何故お前らがここにいる？もしくはこの情報は一体どうやって手に入れた」

「…ええと、私は不知火不明しらぬいふみょうという人に教えてもらったのよ」

「…不知火不明？」

「……………おい作者！」

「…ええと、もしかしたらバレた？」

「もしかしたらじゃなくてもバレバレだ。後、前は思いつきりリアス調だったのに一気にコメディに変わるな！」

「今回のサクコーとのコラボは前半コメディで、後半シリアスにしたいんだよ！」

「黙れ。俺には関係ない。後はもういい逝け！」

「それって漢字おかしい!？」

「喰らえ。山上財閥が最近新しく開発した、世界をも飛び越える、人工衛星からの攻撃! 『スペーススレーザー? スターメテオ』!」

「会ってるだろ。感想欄で」

「それ言っちゃ駄目！」

「気にするな」

「いやちょっと!？」

やはりハルはからかいやすいなー

「はははー、久しぶりだねー。そうだよな?ミル」

「そのとーり」

「あ、そちらの生徒会長ですか。久しぶりですね」

向こうでは白羅と萩が話している
それにしても…奴がいないな

「……生徒会長はどこだ？」

『!?!?』

む、この事を聞くとサクコーメンバーズは動揺したな

「…生徒会長はどうかしたのか?」
ハカ

「…実は…生徒会長は今……」

「仕方がないですね…」

おっと、そこで抄華が何やらバズーカを取り出して

ドガン

…馬鹿（生徒会長）にピンポイントで撃った
…が

「今回はその程度では負けん！！さあ俺と愛の逃避行をしようではないか！」

…今回は何故か効かなかった。…まさか、やられなれてるから耐性
がついたのか？

「協力奥義」

「光の聖域（セイント？サンクチュアリ）！！！」

おっと、ここでまさかのフロアとゲーム神との協力奥義。名前こそ
凄いが…

「愛の力にそんなもの効かーん！」

「きゃああああああああああああああああああああ！！！！！！」

「いい加減にしろおおおおおおおおおお！！！！この馬
鹿会長！！！！！！」

おっと、今度はハルが馬鹿に向かって大天空飛び膝蹴りを食らわした
たが…

「無駄無駄無駄あ！！！」

またしても効いてない。

…改造手術でもしたのか？キャラが多少おかしくなってるし
…まてよ

「…これはまさか…魔王ロリコーンモードか？」

「魔王ロリコーンモード!？」

お、全ツッコミキャラがツッコんだ

「…さて、抄華。いつまでたっても話が進まないから、これをやる」

「…まさか…これは…世界最強のロケットランチャー、アドルADRです
か!？」

「ああ、そうだ。好きに使っていいぞ」

「それじゃあお言葉に甘えて…発射！」

チユドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ガ！！！！！！ボガン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

おー、無数のロケット弾が全弾、馬鹿に向かってピンポイントで命中したな。叫び声も爆音にかき消された

「……てか生きてるの!？」

「大丈夫だろ。馬鹿生徒会長だし」

「いやそれ理由になつてないよ!？」

全く…空香は会長のことをよく知らないから厄介だ

「作品の時空を飛び越える用意は出来たよ」

ここは暗闇。周りには虫一匹の気配もしないところに…二人の怪しい人物がいた

「…そうそう、轟龍。今回は向こう側に夏樹竜介以外にSSSランクの人物がいるよ」

「マジかよ!？」

あー早く戦いてーなあー!」

「まあまあ、落ち着いて、まずは依頼人に会わないと行けないんだから」

「そっぴや依頼人つて誰？」

「……すでに生きてはいない者さ」

「…もしや…霊か？」

かつ！おもしろえ！

「それじゃあ行くよ」

そして二人は消えていった…

第三十二話

何が起きたあ！サクコー×金ファン（前書き）

あけましておめでとございます。今年も宜しくお願いします
ってえ？遅い？

ぐはあっ！そんな殺生なああああああ！

ということ最近更新がグダグダで申し訳ありません。

前回とはうって変わって急転直下の32話です

うう…納得いかない…

第三十二話

何が起きたあ！サクコー×金ファン

どこかの地下室

「よくも…よくもよくも私をここまで落ちぶれさせてくれたな…殺す殺す殺す！そう、桜ヶ丘高校生徒会長、夏樹竜助をな…」

「かつ！狂っていやがる」

「確かにそうだね。でもこいつは不完全な分裂体だし仕方がないと
言えば仕方がないか…こいつにあるのはただの憎しみと多少の知力
と記憶のみ。夏樹竜介の漢字も間違っているしね。そう天下統一の
目的すらも自分が何者かも忘れた…まあ、わざわざ僕らに依頼する
だけの知力があったみたいだけどね」

そこにいたのは2人だけ…しかし声は3つ聞こえる

「かつ！俺はただ戦えればそれでいいぜ！」

「僕のほうは依頼に見合った物を頂ければいいだけだしね…」

「殺す殺す殺す殺す殺すクロス殺す殺す殺す殺す殺すクロス殺す殺
す殺す殺す殺すクロス殺す殺す殺す殺す殺すクロス殺す殺す殺す殺
すクロス殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺すクロス！！！」

「大丈夫ですよ。僕たち『死龍』は与えられた依頼は必ずこなし
ますから…冬山是人…の…狂った残留思念さん」

「かつ！とつとつと行こうぜ！」

そして二人は消えていった…

〈fromトリモト〉

「…結果も張り終えたな」

「ああ…とりあえず桜ヶ丘高校を囲うようにして結果は張ったぜ」

今俺は桜ヶ丘高校の屋上にいる。創輝も一緒だ。とりあえず結果は
はり終えた…

「よし、じゃあ俺は生徒会室に戻ってるからな。ハルたちをいかに
してからかおうか…」

「了解。俺はしばらく屋上で風にでも当たってるぜ」

〈fromソウキ〉

…不穏な気配がする。特にこんな俺視点になるのって初めてだしな
あ！

いつもいつもいつも影薄と罵られて『影薄視点なんてもつたいたい
ない』
って何だよ畜生！

大抵こういう俺視点の場合には裏があるに決まってる

「…君、夏樹竜介という人知らない？」

「！」

ふと空のほうを眺めていると、突然、空中に立っている…優男が現れた

外見年齢は…中3くらいだろうか？しかし、こういう相手は外見年齢と年齢は決して同じではないもの。

着ている服は白のコートに青いジーンズ。しかし、その白のコートは所々赤に染まっていた。

トマトジュースかあ？なんてベタなことと言わない。その赤はトマトジュースでなんか出る赤ではない。血の赤だ

「…お前は何者？」

俺は奴に多少重く問いかける

「…人に聞く前に自分から名乗るべきなんじゃ無いかなあ？」

「ああ、確かに。俺の名前は草橋創輝……だぜ」

「知ってるよ。山上の……最高峰の一人…抹殺リストにもAクラスで載ってるしね

僕の名前は清龍。宜しく」

「ああ…で、お前の目的は？」

「…この生徒会長、夏樹竜介の命を貰いに来ました」

「お前は…金ファンの世界のほうの住人だな……こつちの世界…桜ヶ丘高校生徒会役員の世界の住人を殺して何の意味がある？」

「さあね？まあ世界の壁が崩れ出しているとも言っておこうか」

「そうか…まあとりあえず戦闘開始ってどこか」

「どつやらそつみたいだね」

そして両者の力が交錯した

「ここは…どこだ？」

俺は目覚めた。

辺りを見渡すと黒…黒い景色が広がってる

「かつ！見つけたぜ！生徒会長、夏樹竜介え！」

「！」

そこに荒々しい声が聞こえて赤髪の中学生くらいの男がいた。

「まあとりあえず俺と戦ええ！俺の名は轟龍！んじゃ行くぜ！」

何かいきなり過ぎてよく分からないがとりあえずここは戦うしか無いようだ…はあ…向こうのほうが圧倒的に強いが、どつやら色即是空はあるし、作者補正が効いてるみたいだ…よし、んじゃやるか
そして俺は刀を構えた

草橋創輝 VS 龍清

夏樹竜介 VS 轟龍

バトルスタート

第三十二話

何が起きたあ！サクコー×金ファン（後書き）

すみません…本当に更新がグダグダに遅れた末にこんな完成度の低すぎる話ですいません…

第三十三話

バトルイン桜ヶ丘高校（前書き）

もう一つの連載『旅人と高校生の日常記録日誌！？』を宜しくお願い致します！

鳥本「ちなみに俺もレギュラーもしくは準レギュラーで登場してるぞ」

あ、あと後書きにて重大発表

第三十三話

バトルイン桜ヶ丘高校

「右か！」

「くっ…」

ガキンと二つの『全く同じ』刀が交差する。

そこは…何も無い空間。本来…生物どころか光さえ無い空間に二人…外見は全く同じ、二人がいた

「かつ！その程度かあ！？夏樹竜助え！」

「それはこっちの台詞だ！」

外見は同じ、しかし中身はまるで違う。一人は光…もう一人は無…
…まるで違うオーラを放っている

火花が散る。まるで同じ『ような』二つの刀が交錯する。

「ちっ…これはどうなってるんだ？」

「かつ！夏樹竜助！お前は狙われたんだ！」

「おい…さっきから気になっていたんだが漢字違うぞ？『助』じゃなくて『介』だ」

「かつ！そんなの知ったこっちゃんえ！俺たち死龍になあつ！」

「いや、少しは気にしろよ…」

……死龍？どつかで聞いたことあるような無いような……」

「かつ！聞いたことの無い方が当然だ！
まあ、きつとてめえが聞いたことあるような感じがするのはきつと
世界の壁が崩壊しつつあるからかあ？」

「世界の壁が崩壊？てめえ…どういうことか説明しろ！」

「かつ！知らなかったのかよ！まあいい、どうせお前はここで俺が
殺すしなあ！！！」

「あのかなあ…その台詞は…てめえの負けフラグだろうがあああああ
あああああ！！！！！」

二つの刃は交わる。二つの刃は色即是空。本来たった一つの護身刀
が二つ…

「かつ！しかしどうするつもりだあ！？てめえの目の前にいるのは
『自分自身と全く同じ力』の男だ！そう簡単に勝てねえぜ？」

「それはお前も同じだあ！！！！！」

「まあ戦いを楽しもうじゃねえか！」

向かって右側にいるのは、夏樹竜介…に化けた…口振りから察する
に轟龍という男。

左側にいるのは、真正正銘の夏樹竜介。

二人とも同じ姿形…しかし戦いの型はまるで違う。

轟龍は…酷く荒々しい。精練さが一欠片も無く、ただ力押し。しか
し、反応速度が非常に速く。いかなる状態にも対応する。

本物の夏樹竜介は無駄が無い動き。大抵の攻撃を受け流している。
隙というほどの隙は無い

「かつ！拉致があかねえな！ならこうだ！」

「ぐっ！」

剣術で拉致があかないとなると、轟龍が繰り出したもの…それは足。轟龍の足が竜介の横腹にめり込んだ

「まだまだ行くぜえ！」

「まだこの程度で負けるかよ！」

竜介の尻ぎ払い。轟龍は足を取られる

「かつ！そうじゃないと面白くねえなあ！」

しかし、轟龍は倒れる前に無理やり体勢を戻す

…さてと、ここでの戦いはまだまだ続きそうだね。だったら僕はもう一つの戦場を見に行こうか

～fromリモテ～

「そういえばうちの会長はどっ？」

ハルが俺に聞いてくる

「む、俺は知らないな」

「うーん、どこ行ったんだろ……」

「保健室じゃないですか？軍曹さん」

「うーん……でもあの会長の事だし保健室に運ばれるようなことはそうそう無いはずだし……それにもう回復しているはずですよ？萩先輩」

「うん、生命力はかなりのものだからね」

「……おい、外を見る」

俺が皆に促す。

「うわっ！？何ですかあれ？軍曹さん？」

「そんなこと私に言われても……そうだ。何か知りませんか？鳥本さん」

「……さあな、ただ分かっていることは……アレを何とか倒さないと危険だということだ」

外……地面がうずめき、そこには大量の精密に作られた非常に精巧な……人形があった。形は様々。人間そっくりなものもあるし、足の代わりに車輪になってるものもある。しかも……動いている。これは魔力か……しかもかなりの力が働いている……

……時空の歪みによりこちらの世界より何者かが来た……か……
そういえばウチの居候たちが消えている。しかし、これは問題無い。大丈夫だ。時空のうねりにより向こう側に戻されただけだ。きつと

明日にはベッドからいつものように目覚めて、これは夢という形で処理される…

「おい、この場はお前たちに任せたぞ。俺は…ちょっと…原因を確かめてくる」

「ちょっと!?! 鳥本さん!?!」

俺は部屋から出て行く……………心当たりが無いわけではない。大体の場所は分かる…………

屋上

ここでは、さっきまでとは違う種類の戦いが繰り広げられてる。草橋創輝と龍清の戦い。それは一言で言うなら『派手』だ

「激流の風!」

「エアシエルト」

龍清の放つまるでレーザーのような風を創輝は幾重にも重ねた空気を固めた壁で防御する

「…君の守りは中々固いね」

「ああ、俺の防御技は…山上財閥最強の守りだからな…」

「見た感じ攻撃的な力ばかりつきしみたいだね。素手で攻撃するく

らしいか君には攻撃する手段が無いみたいだ。まあ、その分身体能力は人間の限界値を遥かに越えてるけどね…君は何なの？化け物？とてもその力は人間の状態とは思えない…しかもまだ力加減をかなりセーブしているみたいだしね…」

「お前に言われる筋合いは無い」

「まあでも、空を飛んで直接攻撃が届かない距離にいと、そっちは何も出来やしない」

「ちつ。もう見破られたか…でも俺には手はある…つくよのたて月夜楯！」

すると、創輝が手を空に向かって挙げる。

そして、何やら黒と白…のたった二色。しかも中央に線を引いて真つ二つにしたような非常にシンプルな装飾のなされた、円形状の…創輝の身長くらいの直径がある巨大な盾が現れた。

「へえ…成る程。その盾…かなり凄いものだね。特殊なオーラを放ってる。

よし、君を倒した暁にはその盾を貰おうか」

「さあな、お前にこの盾が操れるか？」

「へえ…自分が倒されるってことは否定しないんだ」

「ああ、いつも俺は初めから負けるつもりで勝負する」

「山上財閥護衛役筆頭がそれでいいのかな？」

「ああ…俺は弱い。そう何者よりもだ。そして守るのは俺よりも強

い男さ…守られる側のほうが強いという矛盾。おかしい？いや、これがいい。これがいいんだ」

「…成る程。大体の意味が分かったよ。君は…山上鳥本や夏樹竜介よりも注意すべき相手のようだ…ね！」

夏樹竜介VS夏樹竜介（轟龍）

バトル継続中

草橋創輝VS龍清

バトル継続中

サクコーメンバーズVS？

バトルスタート

第三十三話

バトルイン桜ヶ丘高校（後書き）

ええ、重大発表とは実は…この金ファンをプロローグから20話くらいまでを一度全く初めから修正どころか、書き直しをしたいと思います！

ええしかし、これは一話一話修正していくと、どうしても話の繋がり等に矛盾が生じてしまいます。

よって、修正分を全部出来た所で一気に全て入れ替えたいと思います！

しかし、ちゃんと更新自体はやりますのであしからず

さて、これからもどうぞ、宜しくお願い致します！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5445f/>

金持ちはファンタジー！

2010年10月10日19時34分発行